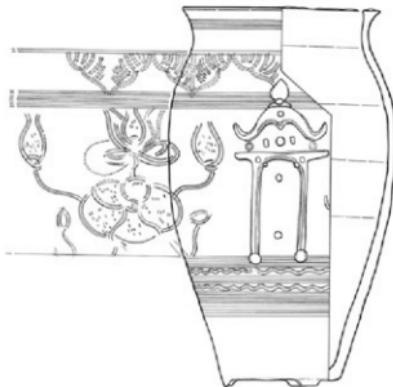


与那国島
潮原古墓群

—与那国空港拡張工事に係る緊急発掘調査報告—



平成19（2007）年 3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

与那国島

すう

ぱる

潮原古墓群

—与那国空港拡張工事に係る緊急発掘調査報告—

平成19（2007）年 3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は与那国空港の拡張工事に伴い、平成16・17年度に沖縄県土木建築部空港課から分任され、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した「潮原古墓群」の発掘調査の成果をまとめたものです。

潮原古墓群は与那国島の北岸に位置する近世～近現代にかけの遺跡です。風や潮害から畠を擁護するために植えられたアダン林に囲まれた場所に墓域があります。発掘調査の結果、様々な形態的特徴を持つ古墓群であることが確認され、墓室や墓外からは豊富な副葬品等の遺物が出土しました。

さらに、古墓群は北側の一群と南側の一群ではその様相が異なることもわかりました。南側の一群は形態的特徴が統一的で、墓室に多量の沖縄産施釉陶器を、墓外に沖縄産無釉陶器を配する特徴があります。北側の一群は様々な形態的特徴を持ち、主に墓室外に本土産近現代磁器等を配する特徴があります。このことから、南側の一群は古墓群の中でも古い段階に形成されたと考えられ、墓域が南から北に移っていたことが伺えます。

人骨は一次葬段階、二次葬段階の両方が確認できました。葬法別に見ると一次葬用の墓、二次葬用の墓、一・二次葬兼用の墓とに分けることができ、注目される成果と思われます。

琉球大学医学部の土肥直美助教授に依頼した人骨調査では、多くの骨に重労働を行っていた形跡が認められるようです。このことから、与那国島における当時の人々の生活環境の過酷さが偲ばれます。

当センターが平成14年度に同じ与那国島内で実施した「嘉田地区古墓群」の発掘調査成果と比較すると、嘉田地区では確認されていない形態的特徴を持つ墓が確認されております。その反面、嘉田地区では多量の中国産陶磁器や肥前系磁器が確認されました。潮原古墓群では僅かしか確認できませんでした。このように、近世から近現代において同じ島内であるにもかかわらず、古墓群の様相に差異が見られることは興味深い今後の研究課題となりました。

本報告書が地元与那国島を始めとした多くの方々に活用されますとともに、埋蔵文化財の保護と活用についてよりいっそうの関心を持っていただける契機となれば幸いに存じます。

末尾ながら現地調査及び資料整理にあたり、多大な御指導・御協力を賜りました諸先生、地元住民の方々、並びに事業の実施にあたり御協力を賜りました関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成19（2007）年 3月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 田 場 清 志



卷頭図版1 与那国島（航空写真）



藏骨器



冲縄産無釉陶器



沖縄産施釉陶器



染付

卷頭図版3

例　　言

1. 本報告書は沖縄県土木建築部空港課からの分任事業として、沖縄県教育委員会が主体となり沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した与那国空港拡張工事に係る潮原古墓群発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 潮原古墓群は沖縄県与那国町字潮原4740-1他に所在する。
3. 発掘調査は平成16年12月6日から平成17年9月2日まで（約9ヶ月間）実施し、資料整理は平成18年度に実施した。
4. 事業の実施にあたっては、沖縄県土木建築部空港課、八重山支庁土木建築課、与那国町教育委員会、民宿三平荘の協力を得た。
5. 現地調査の実施や出土遺物の同定・分析等は下記の方々（敬称略）から御指導や貴重な御助言を頂いた。記して感謝申し上げます。

遺構助言・・・上江洲 均（久米島町自然文化センター）
人骨調査・・・土肥 直美（琉球大学医学部）
陶磁器・・・野上 建紀（有田町歴史民俗資料館）
金属製品・・・久保 智康（京都国立博物館）
開取調査・・・池間 苗（与那国民俗資料館）
6. 引用・参考文献は第6章の末尾に一括して掲載したが、「第5章 人骨」については、その章に掲載した。
7. 本報告書は又吉純子の協力を得て、片桐千亜紀が編集した。執筆者は次のとおりで、詳細は目次に示す。

沖縄県立埋蔵文化財センター	片桐千亜紀、山田浩久、伊波直樹、山本正昭
琉球大学医学部	土肥直美
沖縄県立博物館	羽方誠
8. 土肥直美氏には発掘調査における人骨調査指導から資料整理を経て報告書の執筆に至るまでお世話になり、貴重な玉稿（第5章 人骨）を賜った。記して感謝申し上げます。
9. 本報告書に掲載した出土遺物の撮影及び現像は矢舟章浩・光嶋香が行った。
10. 発掘調査で出土した遺物や現場の実測図・写真、資料整理で作成した実測図や写真等の記録は沖縄県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。
11. 人骨は調査・研究後、与那国町納骨堂（祖納地区）に安置する予定である。

目 次

序

巻頭図版

例言

第1章 調査に至る経緯	1
第1節 調査に至る経緯	(山本、片桐) 1
第2節 調査体制	(片桐) 1
第3節 調査経過	(山本、羽方) 2
第2章 位置と環境	(片桐) 6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第3章 古墓群と出土遺物の概要・分類	11
第1節 古墓と遺構の位置	(山田) 11
第2節 古墓の分類	(山田) 11
第3節 葬法	(伊波) 13
第4節 遺物の分類	(片桐、山田、伊波) 13
第4章 古墓群の様相	(片桐、山田、伊波、山本) 25
第1節 1号墓	25
第2節 2号墓	40
第3節 3号墓	45
第4節 4号墓	47
第5節 5号墓	50
第6節 6号墓	55
第7節 7号墓	58
第8節 8号墓	63
第9節 9・42号墓	69
第10節 10号墓	76
第11節 11号遺構・12号墓	80
第12節 13号墓	89
第13節 14・38号墓	93
第14節 15号墓	99
第15節 17号遺構	101
第16節 20・21号遺構	104
第17節 22号墓	105
第18節 23号墓	110
第19節 24号墓	117
第20節 25号墓	132
第21節 26号墓	138
第22節 27号墓	152
第23節 28号墓	170
第24節 29号墓	175
第25節 30号墓	188
第26節 31号墓	198
第27節 33号墓	209
第28節 34号墓・35号遺構	214
第29節 36号墓	216
第30節 37号遺構	221
第31節 39号墓	222
第32節 40号墓	224
第33節 41号墓	226
第34節 47号遺構	228
第35節 48号墓	229
第36節 49号墓	230
第37節 50号墓	235
第38節 51号遺構	238
第39節 53号墓	239
第40節 54号墓	241
第41節 16号墓	247
第5章 人骨	(土肥) 248
第6章 結語	(山田、片桐) 264
参考文献	
報告書抄録	

図 目 次

第1図	沖縄本島の位置	8	第47図	24号墓出土遺物②	126
第2図	与那国島の位置・島内の遺跡および ウガン(知念1989)	9	第48図	24号墓出土遺物③	128
第3図	古墓の分布状況	10	第49図	24号墓出土遺物④	130
第4図	沖縄産施釉陶器分類模式図①	19	第50図	25号墓	133
第5図	沖縄産施釉陶器分類模式図②	20	第51図	25号墓出土遺物	136
第6図	沖縄産施釉陶器分類模式図③	21	第52図	26号墓	139
第7図	沖縄産無釉陶器分類模式図	22	第53図	26号墓出土遺物①	145
第8図	1号墓	27	第54図	26号墓出土遺物②	147
第9図	1号墓出土遺物①	30	第55図	26号墓出土遺物③	149
第10図	1号墓出土遺物②	32	第56図	26号墓出土遺物④	150
第11図	1号墓出土遺物③	34	第57図	27号墓	153
第12図	1号墓出土遺物④	36	第58図	27号墓出土遺物①	160
第13図	2号墓	41	第59図	27号墓出土遺物②	162
第14図	2号墓出土遺物	44	第60図	27号墓出土遺物③	164
第15図	4号墓出土遺物	49	第61図	27号墓出土遺物④	166
第16図	5号墓	51	第62図	27号墓出土遺物⑤	168
第17図	5号墓出土遺物	54	第63図	28号墓	171
第18図	6号墓	56	第64図	28号墓出土遺物	173
第19図	6号墓出土遺物	57	第65図	29号墓	177
第20図	7号墓	59	第66図	29号墓出土遺物①	182
第21図	7号墓出土遺物	62	第67図	29号墓出土遺物②	184
第22図	8号墓	65	第68図	29号墓出土遺物③	186
第23図	8号墓出土遺物	67	第69図	30号墓	189
第24図	9・42号墓	70	第70図	30号墓出土遺物①	194
第25図	9号墓出土遺物	74	第71図	30号墓出土遺物②	196
第26図	10号墓	77	第72図	31号墓	199
第27図	10号墓出土遺物	79	第73図	31号墓出土遺物①	205
第28図	12号墓出土遺物	81	第74図	31号墓出土遺物②	207
第29図	11号遺構・12号墓	82	第75図	33号墓	210
第30図	12号墓	83	第76図	33号墓出土遺物	212
第31図	11号遺構出土遺物①	86	第77図	36号墓	217
第32図	11号遺構出土遺物②	88	第78図	36号墓出土遺物	219
第33図	13号墓	90	第79図	39号墓出土遺物	222
第34図	13号墓出土遺物	92	第80図	40号墓	225
第35図	14・38号墓	95	第81図	48号墓出土遺物	229
第36図	14号墓出土遺物	97	第82図	49号墓	231
第37図	38号墓出土遺物	98	第83図	49号墓出土遺物	234
第38図	15号墓	100	第84図	50号墓	236
第39図	17号遺構	102	第85図	50号墓出土遺物	237
第40図	17号遺構出土遺物	103	第86図	51号遺構出土遺物	238
第41図	22号墓	106	第87図	53号墓出土遺物	239
第42図	22号墓出土遺物	109	第88図	53号墓	240
第43図	23号墓	111	第89図	54号墓出土遺物①	243
第44図	23号墓出土遺物	115	第90図	54号墓出土遺物②	245
第45図	24号墓	119	第91図	頭蓋長幅示数の比較	257
第46図	24号墓出土遺物①	124	第92図	四脂骨主要示数の比較	257
			第93図	推定身長の比較(男性)	258

図版目次

卷頭図版1	与那国島（航空写真）	図版43	11号遺構・12号墓	82
卷頭図版2	上：蔵骨器 下：沖縄産無釉陶器	図版44	12号墓①	83
卷頭図版3	上：沖縄産施釉陶器 下：染付	図版45	12号墓②	84
		図版46	11号遺構出土遺物①	87
		図版47	11号遺構出土遺物②	88
		図版48	13号墓出土遺物集合	89
図版1	潮原古墓群の位置	図版49	13号墓①	90
図版2	1号墓出土遺物集合	図版50	13号墓②	91
図版3	1号墓①	図版51	13号墓出土遺物	92
図版4	1号墓②	図版52	14号墓出土遺物集合	93
図版5	1号墓出土遺物①	図版53	14・38号墓①	95
図版6	1号墓出土遺物②	図版54	14・38号墓②	96
図版7	1号墓出土遺物③	図版55	14号墓出土遺物	97
図版8	1号墓出土遺物④	図版56	38号墓出土遺物集合	98
図版9	2号墓出土遺物集合	図版57	38号墓出土遺物	98
図版10	2号墓	図版58	15号墓出土遺物集合	99
図版11	2号墓出土遺物	図版59	15号墓	100
図版12	3号墓出土遺物集合	図版60	17号遺構出土遺物集合	101
図版13	3号墓	図版61	17号遺構①	102
図版14	4号墓出土遺物集合	図版62	17号遺構②	103
図版15	4号墓	図版63	17号遺構出土遺物	103
図版16	4号墓出土遺物	図版64	20・21号遺構	104
図版17	5号墓出土遺物集合	図版65	22号墓出土遺物集合	105
図版18	5号墓	図版66	22号墓	107
図版19	5号墓出土遺物	図版67	22号墓出土遺物	109
図版20	6号墓出土遺物集合	図版68	23号墓出土遺物集合	110
図版21	6号墓	図版69	23号墓	113
図版22	6号墓出土遺物	図版70	23号墓出土遺物	116
図版23	7号墓出土遺物集合	図版71	24号墓出土遺物集合	117
図版24	7号墓①	図版72	24号墓	118
図版25	7号墓②	図版73	24号墓出土遺物①	125
図版26	7号墓出土遺物	図版74	24号墓出土遺物②	127
図版27	8号墓出土遺物集合	図版75	24号墓出土遺物③	129
図版28	8号墓	図版76	24号墓出土遺物④	131
図版29	8号墓出土遺物	図版77	25号墓出土遺物集合	132
図版30	9号墓出土遺物集合	図版78	25号墓	134
図版31	9・42号墓①	図版79	転用蔵骨器検出状況	136
図版32	9・42号墓②	図版80	25号墓出土遺物	137
図版33	9・42号墓③	図版81	26号墓出土遺物集合	138
図版34	9号墓出土遺物	図版82	26号墓	141
図版35	42号墓出土遺物	図版83	26号墓出土遺物①	146
図版36	42号墓	図版84	26号墓出土遺物②	148
図版37	10号墓出土遺物集合	図版85	26号墓出土遺物③	149
図版38	10号墓	図版86	26号墓出土遺物④	151
図版39	10号墓出土遺物	図版87	27号墓出土遺物集合	152
図版40	11号遺構墓出土遺物集合	図版88	27号墓	155
図版41	12号墓出土遺物集合	図版89	27号墓出土遺物①	161
図版42	12号墓出土遺物	図版90	27号墓出土遺物②	163

图版91	27号墓出土遗物③	165	图版139	51号道構出土遗物	238
图版92	27号墓出土遗物④	167	图版140	53号墓出土遗物集合	239
图版93	27号墓出土遗物⑤	169	图版141	53号墓出土遗物	239
图版94	28号墓出土遗物集合	170	图版142	53号墓	240
图版95	28号墓	171	图版143	54号墓出土遗物集合	241
图版96	28号墓出土遗物	174	图版144	54号墓出土遗物①	244
图版97	29号墓出土遗物集合	175	图版145	54号墓出土遗物②	246
图版98	29号墓	176	图版146	16号墓出土遗物集合	247
图版99	29号墓出土遗物①	183	图版147	16号墓	247
图版100	29号墓出土遗物②	185	图版148	人骨1	260
图版101	29号墓出土遗物③	187	图版149	人骨2	261
图版102	30号墓出土遗物集合	188	图版150	人骨3	262
图版103	30号墓	191	图版151	人骨4	263
图版104	30号墓出土遗物①	195			
图版105	30号墓出土遗物②	197			
图版106	31号墓出土遗物集合	198			
图版107	31号墓①	201			

表 目 次

图版108	31号墓②	202	第1表	平成16年度潮原古墓群発掘調査工程表	4
图版109	31号墓出土遗物①	206	第2表	平成17年度潮原古墓群発掘調査工程表	5
图版110	31号墓出土遗物②	208	第3表	1号墓觀察一覧	25
图版111	33号墓出土遗物集合	209	第4表	1号墓遺物出土状況	26
图版112	33号墓①	210	第5表	1号墓出土遺物觀察一覧	37
图版113	33号墓②	211	第6表	2号墓觀察一覧	40
图版114	33号墓出土遗物	213	第7表	2号墓遺物出土状況	40
图版115	34号墓出土遗物集合	214	第8表	2号墓出土遺物觀察一覧	43
图版116	34号墓・35号道構	215	第9表	3号墓觀察一覧	45
图版117	36号墓出土遗物集合	216	第10表	3号墓遺物出土一覧	45
图版118	36号墓	217	第11表	4号墓觀察一覧	47
图版119	36号墓出土遗物	220	第12表	4号墓遺物出土状況	47
图版120	37号道構	221	第13表	4号墓出土遺物觀察一覧	49
图版121	39号墓出土遗物	222	第14表	5号墓觀察一覧	50
图版122	39号墓	223	第15表	5号墓遺物出土状況	50
图版123	40号墓出土遗物集合	224	第16表	5号墓出土遺物觀察一覧	53
图版124	40号墓①	224	第17表	6号墓觀察一覧	55
图版125	40号墓②	225	第18表	6号墓遺物出土状況	55
图版126	41号墓出土遗物集合	226	第19表	6号墓出土遺物觀察一覧	57
图版127	41号墓	227	第20表	7号墓觀察一覧	58
图版128	47号道構出土遗物	228	第21表	7号墓遺物出土状況	58
图版129	47号道構	228	第22表	7号墓出土遺物觀察一覧	61
图版130	48号墓	229	第23表	8号墓觀察一覧	63
图版131	48号墓出土遗物	229	第24表	8号墓遺物出土状況	66
图版132	49号墓出土遗物集合	230	第25表	8号墓出土遺物觀察一覧	66
图版133	49号墓	233	第26表	9号墓觀察一覧	69
图版134	49号墓出土遗物	234	第27表	9号墓遺物出土状況	69
图版135	50号墓出土遗物集合	235	第28表	9号墓出土遺物觀察一覧	73
图版136	50号墓	236	第29表	42号墓觀察一覧	75
图版137	50号墓出土遗物	237	第30表	10号墓觀察一覧	76
图版138	51号道構出土遗物集合	238	第31表	10号墓遺物出土状況	76

第32表	10号墓出土遺物観察一覧	78	第80表	33号墓観察一覧	209
第33表	11号遺構・12号墓観察一覧	80	第81表	33号墓遺物出土状況	209
第34表	11号遺構遺物出土状況	80	第82表	33号墓出土遺物観察一覧	212
第35表	12号墓遺物出土一覧	81	第83表	34号墓・35号遺構観察一覧	214
第36表	12号墓出土遺物観察一覧	81	第84表	36号墓観察一覧	216
第37表	11号遺構出土遺物観察一覧	85	第85表	36号墓遺物出土状況	216
第38表	13号墓観察一覧	89	第86表	36号墓出土遺物観察一覧	218
第39表	13号墓遺物出土一覧	89	第87表	37号遺構観察一覧	221
第40表	13号墓出土遺物観察一覧	91	第88表	39号墓観察一覧	222
第41表	14・38号墓観察一覧	93	第89表	40号墓観察一覧	224
第42表	14号墓遺物出土状況	94	第90表	41号墓観察一覧	226
第43表	14・38号墓出土遺物観察一覧	94	第91表	41号墓遺物出土一覧	226
第44表	38号墓遺物出土一覧	98	第92表	47号遺構観察一覧	228
第45表	15号墓観察一覧	99	第93表	48号墓観察一覧	229
第46表	15号墓遺物出土一覧	99	第94表	49号墓観察一覧	230
第47表	17号遺構観察一覧	101	第95表	49号墓遺物出土一覧	230
第48表	17号遺構遺物出土状況	101	第96表	49号墓出土遺物観察一覧	234
第49表	20・21号遺構観察一覧	104	第97表	50号墓観察一覧	235
第50表	22号墓観察一覧	105	第98表	50号墓遺物出土状況	235
第51表	22号墓遺物出土状況	108	第99表	50号墓出土遺物観察一覧	237
第52表	22号墓出土遺物観察一覧	108	第100表	51号遺構観察一覧	238
第53表	23号墓観察一覧	110	第101表	53号墓観察一覧	239
第54表	23号墓遺物出土一覧	114	第102表	54号墓遺物出土状況	241
第55表	23号墓出土遺物観察一覧	114	第103表	54号墓出土遺物観察一覧	241
第56表	24号墓観察一覧	117	第104表	16号墓観察一覧	247
第57表	24号墓遺物出土状況	121	第105表	潮原古墓群出土人骨の構成 (最小個体数の推定値)	252
第58表	24号墓出土遺物観察一覧	121	第106表	潮原古墓群1号墓墓室内散乱人骨	252
第59表	25号墓観察一覧	132	第107表	頭蓋主要計測値	254
第60表	25号墓遺物出土一覧	132	第108表	上腕骨主要計測値	255
第61表	25号墓出土遺物観察一覧	135	第109表	尺骨主要計測値	255
第62表	26号墓観察一覧	138	第110表	橈骨主要計測値	255
第63表	26号墓遺物出土状況	142	第111表	大腿骨主要計測値	256
第64表	26号墓出土遺物観察一覧	142	第112表	脛骨主要計測値	256
第65表	27号墓観察一覧	152	第113表	四肢骨主要計測値の比較(男性)	256
第66表	27号墓遺物出土状況	156	第114表	推定身長	258
第67表	27号墓遺物観察一覧	156	第115表	骨膜炎症のみられた四肢骨	258
第68表	28号墓観察一覧	170			
第69表	28号墓遺物出土状況	170			
第70表	28号墓出土遺物観察一覧	172			
第71表	29号墓観察一覧	175			
第72表	29号墓遺物出土状況	179			
第73表	29号墓出土遺物観察一覧	179			
第74表	30号墓観察一覧	188			
第75表	30号墓遺物出土状況	192			
第76表	30号墓出土遺物観察一覧	192			
第77表	31号墓観察一覧	198			
第78表	31号墓遺物出土状況	203			
第79表	31号墓出土遺物観察一覧	203			

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

沖縄県は全国唯一の離島県であることから他都道府県とを結ぶ重要な交通手段として航空機を利用する割合が非常に高い。当然ながら空港を利用する機会も多く、県内においては13箇所の空港が所在する。人口1,715人（平成18年12月1日現在）の与那国島においても空港は県内外を移動する重要な窓口として機能している。

与那国空港においては横風の影響を受けることが多く、滑走路延長を前提に暫定的にジェット化していた。これを受け、平成12年8月に沖縄県の概算要求で沖縄県が事業者となり就航率の向上による一層の安定運行の確保や、搭載量制限の解除による効率的な運航等を目的として、従来までの滑走路1500mを500m延長することが計画された。その後、環境対策を検討した上で、平成14年12月に与那国空港拡張工事の申請が許可され、平成15年度着工、平成18年度供用開始という内容で滑走路延長計画を策定した。

平成13年10月下旬、沖縄県教育庁文化課が与那国空港拡張予定内において埋蔵文化財の有無を確認するため、表面踏査を実施した。その結果、土器片が散布していることや近世の古墓群が存在することがわかった。これについては、計画が具体化した段階で再度試掘調査等の予備調査を実施することとした。

平成15年6月、沖縄県土木建築空港課から、沖縄県教育庁文化課あてに与那国空港拡張予定地内においての文化財の有無についての照会があった。沖縄県教育庁文化課と沖縄県立埋蔵文化財センターで予備調査についての検討を行い再度の表面踏査と試掘調査の実施を決定した。平成15年度後半～平成16年度前半で計4回にわたる予備調査を実施し、与那国空港拡張予定地内における埋蔵文化財の分布状況を明らかにした。この成果をもとに沖縄県土木建築部空港課と調整を行い、平成16年度後半から年度をまたいで平成17年度前半で緊急発掘調査を実施し、平成18年度に資料整理と報告書の刊行をすることとなった。

第2節 調査体制

発掘調査及び資料整理・報告書刊行に係る業務は沖縄県教育委員会が主体となり、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。各年度の調査体制は以下のとおりである。

平成16（2004）年度 発掘調査

事業主体	沖縄県教育委員会	教 育 長	山内 彰
	文化課	課 長	名嘉 政修
		記念物係長	島袋 洋
		専門員	中山 晋
事業所管	沖縄県立埋蔵文化財センター	所 長	安里 翠淳
事業事務		副所長兼庶務課長	赤嶺 正幸
		庶務課 主 事	城間 奈津子
調査統括		調査課 課 長	盛本 紅
調査担当		専門員	山本 正昭
調査補助		専門員	羽方 誠
		専門員（臨）	山田 浩久
		"	金城 達
		"	久貝 弥嗣
		"	崎原 恒寿
発掘調査作業員	宮里 武行、長濱 拓、與那覇 博貴、渡邊 美也子、花城 圓子、前濱 由紀、佐藤 詩織、森下 さと子、真地 正彰		

平成 17（2005）年度 発掘調査

事業主体	沖縄県教育委員会	教育長	仲宗根 用英
	文化課	課長	千木良 芳範
		課長補佐	島袋 洋
		主幹兼記念物係長	盛本 黽
		専門員	知念 隆博
事業所管	沖縄県立埋蔵文化財センター	所長	田場 清志
事業事務		副所長兼庶務課長	赤嶺 正幸
	庶務課	主任	山田 恵美子
調査統括		調査課	課長
調査担当			岸本 義彦
調査補助		専門員	羽方 誠
		専門員（臨）	伊波 直樹
		"	青山 奈緒
		文化財調査嘱託員	山田 浩久
発掘調査作業員	伊嗣 セツ子、神谷 友彦、萱野 浩美、前濱 由紀、佐藤 詩織、崎原 杏奈、 杉田 公子、高瀬 正美、堀内 美樹		
資料整理作業員	伊波 まさみ、城間 五百子		

平成 18（2006）年度 資料整理・報告書刊行

事業主体	沖縄県教育委員会	教育長	仲宗根 用英
	文化課	課長	千木良 芳範
		課長補佐	島袋 洋
		主幹兼記念物係長	盛本 黽
		専門員	知念 隆博
事業所管	沖縄県立埋蔵文化財センター	所長	田場 清志
事業事務		副所長兼庶務課長	瑞慶覧 康博
	庶務課	主任	玉寄 秀人
調査統括		調査課	課長
調査担当			岸本 義彦
調査補助		専門員	片桐 千亜紀
		専門員	山本 正昭
		文化財調査嘱託員	伊波 直樹
		"	山田 浩久
資料整理作業員	阿良 克也、伊波 さとみ、玉那霸 キミ子、當間 あきの、中山 まり、古堅さとみ、 與古田 愛		
資料整理協力者	新垣利津代、大村由美子、荻堂さやか、上原美穂子、久保田有美、崎原美智子、 平良貴子、並里のりえ、比嘉孝子、比嘉登美子、譜久村泰子、又吉純子		

第3節 調査経過

2ヶ年度にわたって実施した発掘調査経過は以下のとおりである。

平成 16（2004）年度（調査期間：平成 16年12月6日～平成 17年3月18日）

発掘調査を開始するにあたって、まずは調査区内の下草除去作業を実施した。平成16年度に調査可能な古墓は14基、残り16基は墓地公告が終了する平成17年度以降であることから、後者については全く立ち入ることができず、下草除去後に前者は現状写真撮影を行いうに止めた。事前に八重山支庁土木建築課（以下、土木建築課）が確認していた古墓の位置と写真との照合作業も並行して進めた結果、石積石室墓が4基、屋

根をモルタルで覆った横穴の古墓が10基であることを確認した。

発掘調査は土木建築課からの要望で与那国空港から最も近い17号遺構から行った。手掘りによる発掘調査を実施したが、天候不良のため作業は中々進展せず、翌平成17年の1月12日まで日数を要した。一方で2～6, 7, 10, 11, 13～15, 20～23号の下草除去作業も平成16年12月17日までに終了、翌平成17年1月17日から古墓が分布する中で最も北西に位置する2, 3号墓から発掘調査を開始した。横穴形態の墓は殆どが空墓で天井が陥没していたため、天井部材の除去を行ってから、墓庭、墓室の床面検出作業を行った。また周辺にも確認されていない古墓が無いかの確認踏査をしたが、明確な古墓は確認することができなかつた。2, 3号墓の後は用地買収が完了している古墓からすなわち4, 5, 7, 24, 25, 26, 9, 10, 11, 14, 15, 13号の順で発掘調査を実施した。24, 25, 26号墓以外は小規模であったため、古墓又は遺構1基に付き作業員2名を充てて下草除去並びに検出作業を行ったが調査期間中、雨天が続いたため24, 25, 26号墓の発掘作業は墓室の状況を確認したのみで調査が完了しないまま平成16年度が終了した。完全な形での埋葬人骨が検出されたのは5号墓のみで琉球大学医学部助教授の土肥直美氏の指導の下、取り上げ作業を行つた。また、久米島自然文化センター館長の上江洲均氏から遺構検出の調査指導を受け、墓室内における状況に留意しながら発掘作業を行つた。雨天時は遺物洗浄作業、図面整理を中心に行つた。

最後に潮原4752, 4750, 4794-3番地において5箇所の試掘を行つたが、とくに遺構並びに遺物包含層等は確認できなかつた。

平成17（2005）年度（調査期間：平成17年4月11日～9月2日）

前年度の調査では、天候不良等による原因で調査期間が足りず、調査が終了しなかつた墓があつた。そこで土木建築課と調整した結果、今年度の調査期間を1か月間延長し、平成17年7月末まで行うこととなつた。

また空港整備工事を円滑に進めるために、優先的に発掘調査を行つてほしい墓があるという申し出が空港課からあつたため、調査区北東側に位置する墓・遺構（7～9・11・12・20～23号）を中心に調査を開始した。同時に並行で、前年度で調査が終了しなかつた24～26号墓等の調査も行つた。

調査を進める過程で、墓周辺における除草・清掃作業、重機を使った試掘作業により、未発見の遺構があるかどうかを調査した。その結果、石灰岩の岩盤が露出した部分を中心に、遺構やその可能性がある場所が20基近く発見された。そのため空港課との調整の結果、さらに調査期間を1か月延長し、8月末まで行うこととなつた。

調査区南西側の27～31・53号墓については、本格的な調査は8月から行つた。特にこれらの墓にはガジュマルの根が張つていたため、チェーンソウや重機を使って可能な限り除去した。

墓の調査は基本的に、①調査前の撮影 ②伐採・除草・清掃 ③清掃後の撮影 ④外観の実測 ⑤天井石の取り外し ⑥墓室内の清掃 ⑦墓室内の撮影 ⑧墓室内の実測 ⑨出土品の取り上げ ⑩床面の検出 ⑪床面の撮影 ⑫床面の実測 ⑬床面・墓室外の掘り下げ ⑭調査完了後の撮影 という手順で行つた。②の伐採・除草の一部、⑤については重機を使用した。④・⑧・⑫の実測作業については、写真測量によつた部分がある。⑨については、特に人骨の取り上げに際し、琉球大学医学部助教授の土肥直美氏に指導していただいた。また墓1基に対し、調査担当職員の指示のもと、1名ないし2名の発掘作業員が作業にあつた。

雨天時に野外で作業が出来ないときは、現場事務所内で出土品の洗浄・ナンバーリング・図面整理等を行つた。

第1表 平成16年度 潮原古墓群発掘調査工程表

月 週	12				1				2				3			
	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
1	1号墓															
2	2号墓															
3	3号墓															
4	4号墓															
5	5号墓															
6	6号墓															
7	7号墓															
8	8号墓															
9	9号墓															
10	11号遺構															
11	12号墓															
12	13号墓															
13	14号墓															
14	15号墓															
15	16号墓															
16	17号遺構															
17	20号遺構															
18	21号遺構															
19	22号墓															
20	23号墓															
21	24号墓															
22	25号墓															
23	26号墓															
24	27号墓															
25	28号墓															
26	29号墓															
27	30号墓															
28	31号墓															
29	33号墓															
30	34号墓															
31	35号遺構															
32	36号墓															
33	37号遺構															
34	38号墓															
35	39号墓															
36	40号墓															
37	41号墓															
38	42号墓															
39	47号遺構															
40	48号墓															
41	49号墓															
42	50号墓															
43	51号遺構															
44	53号墓															
45	伐採・除草															
46	試掘作業															
47	年末年始															

第2表 平成17年度 潮原古墓群発掘調査工程表

月 週	4				5				6					7					8					9 1
	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	
1	1号墓																							
2	2号墓																							
3	3号墓																							
4	4号墓																							
5	5号墓																							
6	6号墓																							
7	7号墓																							
8	8号墓																							
9	9号墓																							
10	11号遺構																							
11	12号墓																							
12	13号墓																							
13	14号墓																							
14	15号墓																							
15	16号墓																							
16	17号遺構																							
17	20号遺構																							
18	21号遺構																							
19	22号墓																							
20	23号墓																							
21	24号墓																							
22	25号墓																							
23	26号墓																							
24	27号墓																							
25	28号墓																							
26	29号墓																							
27	30号墓																							
28	31号墓																							
29	33号墓																							
30	34号墓																							
31	35号遺構																							
32	36号墓																							
33	37号遺構																							
34	38号墓																							
35	39号墓																							
36	40号墓																							
37	41号墓																							
38	42号墓																							
39	47号遺構																							
40	48号墓																							
41	49号墓																							
42	50号墓																							
43	51号遺構																							
44	53号墓																							
45	伐採・除草																							
46	試掘作業																							
47	台風																			5号	9号			
48	ゴールデンウイーク																							

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

潮原古墓群が所在する与那国島は沖縄本島から西南西へ宮古諸島を経て八重山諸島の最西端、約520km離れた洋上にある。同時に日本最西端の島として知られ、隣国の台湾まで約120kmという近さであり、年に数回、晴れた日には花蓮県の峻険な山々の稜線を望むことができる。黒潮が島の西側を流れていることから、大型回遊魚の姿を見ることができ、毎年、国際カジキ釣り大会が町の主催によって開催されている。

与那国島へは飛行機を利用すると沖縄本島から石垣島を経由してアクセスする方法と直行便にてアクセスする方法がある。船舶では石垣島から約4時間必要とするが、飛行機を利用すると約30分でアクセスが可能となる。

気候は高温多湿の亜熱帯性気候で、年間の気温較差に乏しい。夏から秋にかけての台風シーズンは猛烈なものも襲来することがある。その場合は、漁業や農業に大被害をもたらし、人々の生活にたびたびダメージを与えている。最近では2005年、夏の台風13号の被害は大きく、学校施設ではドアが大破したり体育館屋根の一部が吹き飛び、農業では特にさとうきび農家に影響があり、漁業では陸上げした船が横転する等の大きな被害があった。

島は東西に長い六角形を呈しており、面積は28.88km²である。山がちの地形で、標高231.2mの宇良部岳を最高峰として、久部良岳等の100m~200m級の山々が島の中央東西に連なっており、島の分類では高島に属す。宇良部岳・久部良岳はまた、鱗翅目中世界最大の蛾である県指定天然記念物の「ヨナグニサン」の生息地として知られており、このような特定の地域に大型蛾が多産することは、学術上の価値が高いと言われている(与那国町教育委員会1979)。町ではアヤミハビル(与那国の方言で、ヨナグニサンのことを指す)館を建設し、ヨナグニサンを始めとしたその他の豊かな自然について展示している。

地質は砂岩などからなる八重山層群を基盤としており、県指定の名勝となっている南岸のサンニヌ台でその露頭を観察することができる。また、八重山層群の上位には石灰岩からなる琉球層群が覆っており、概ね島の北側で確認できる。サンニヌ台と同じく県指定の名勝であるティンダバナでは両者の露頭を観察できる。

サンニヌ台はまた、琉球大学の木村政昭教授によってその一部が鳥のレリーフに見えるとされ、かの有名なテレビ番組でも放映され著名な場所となった。また、サンニヌ台から南西方向にある新川鼻と呼ばれる岬の東側海底にはダイビングポイントとして有名な「与那国海底遺跡ポイント」があり、年間を通して多くのダイバーがあこがれ興味を持ってこの島を訪れている。

沖積層は島北側の祖納、西側の久部良、南側の比川で確認でき、それぞれがそのまま与那国島の集落を形成しており、同時に入江を利用した重要な港となっている。また、祖納集落は町役場、警察駐在所、郵便局等があり行政の中心的な役割を担っている。

潮原古墓群はこのような与那国島の北側、現在の与那国空港の東側、祖納集落から川を挟んで西側の海岸断崖沿い、標高約18m~30mに位置する。周辺は平坦で鋭い石灰岩が至るところに露頭し、赤土土壤が薄く堆積している。

第2節 歴史的環境

与那国島では、今回発見された調査が実施された潮原古墓群と、2002(平成14)年に当センターによって調査が実施された嘉田地区古墓群(沖縄県立埋蔵文化財センター2004)を合わせると、計20の遺跡が確認されている。

戦前は明治時代に笹森義助によって、ヤマト墓の骨格調査が行われている(笹森1895)が、本格的な考古学調査が初めて実施されたのは戦後で、高宮廣衛氏によって4遺跡が発見された(多和田1960)。その後、九州大学人類学教室(永井1964)、沖縄大学学生文化協会(沖縄大学学生文化協会1971)、沖縄県教育庁文化課(沖縄県教育委員会1980)等によって調査が行われ、新しい遺跡が次々と確認されていった。

現在確認されている最も古い時代に属すると考えられる遺跡は新石器時代のトゥグル浜遺跡で、与那国空港整備工事に伴い沖縄県教育庁文化課が緊急発掘調査を実施している(沖縄県教育委員会1985)。安里嗣淳氏によって、一端は南琉球文化圏の新石器時代後期に位置付けられた(安里1989)が、同氏によって再考

され前期に属する可能性が高いとされている（安里 2003）。与那国島にはもう一つ新石器時代に属する可能性がある大泊浜貝塚が確認されており、無土器貝塚の可能性が強いとされているが、採砂によって露頭した断面で観察されているのみであるため、詳細は不明である（沖縄県教育委員会 1980）。

与那国島で遺跡が多く確認されるようになるのは、中世となった14世紀以降である。1980年代に緊急発掘調査が相次いで実施された慶田崎遺跡（与那国町教育委員会 1986）や与那原遺跡（与那国町教育委員会 1988）を始めとして、空港拡張工事に先立って詳細分布調査による試掘調査を実施したサンバル村跡遺跡（沖縄県教育委員会 2000）や、近年詳細分布調査が実施された島仲村跡遺跡（与那国町教育委員会 2002）、浦野遺跡・祖納遺跡・トウグル遺跡・上里遺跡等が確認されている。特に、島仲村跡遺跡は15世紀に活躍した女傑サンアイ・イソバの生まれた村と伝えられており、その生家跡は町指定文化財として保護されている。また、サンバル村跡遺跡はそのサンアイ・イソバの村であるサンアイ村の前身とされており、与那国でも古い村の一つとされている。

1477年には朝鮮人が漂着し、当時の島の様子や生活などが『李朝実録（世宗実録）』（1392～1910）に記録されている。

近年ではテレビ番組「Dr. コトー診療所」の撮影舞台となり、比川集落の海岸沿いには今も「診療所」が残されて、観光客が訪れる。

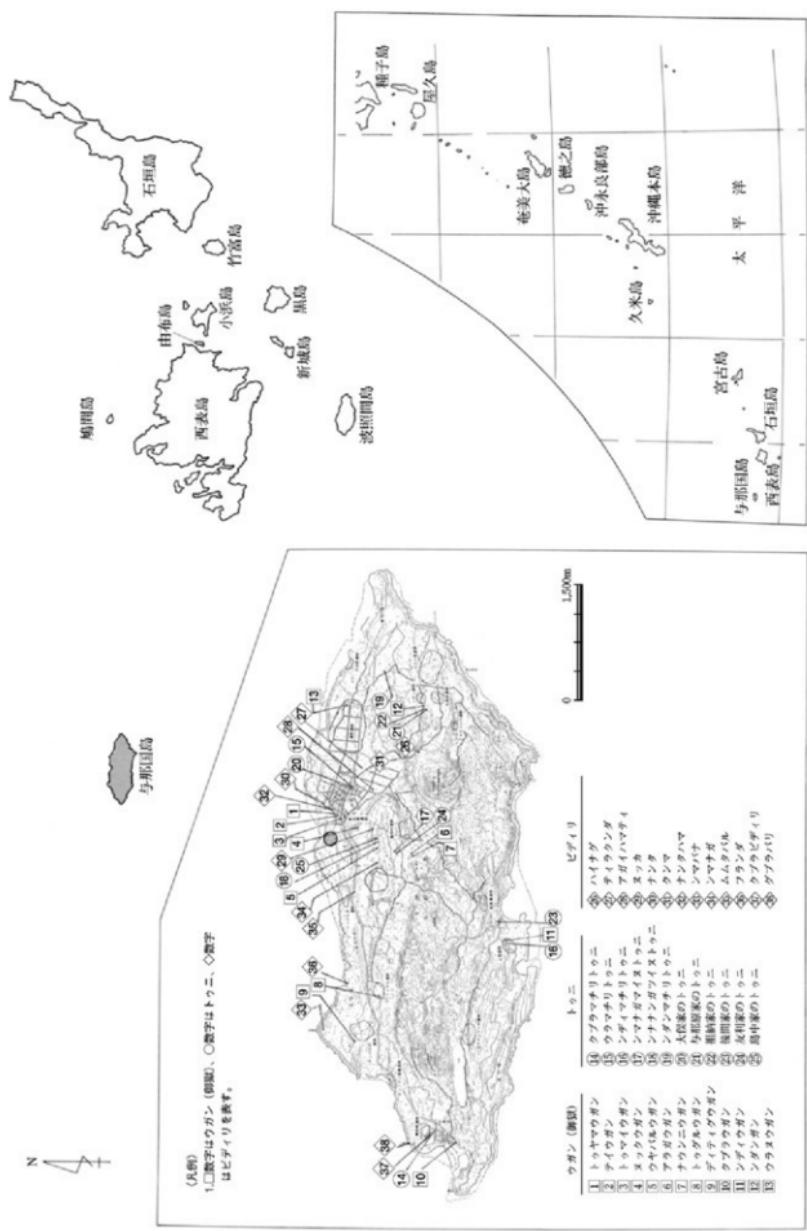
潮原古墓群は発掘調査の結果、近世・近代に位置付けられる。東側に祖納集落と祖納遺跡・浦野遺跡、南側に島仲村跡遺跡が所在することから、これらの内、いずれかが潮原古墓群に葬られた人々の集落であったと思われる。本古墓群は廃棄された後、周辺はアダンやガジュマル等の樹木が生い茂った。そのため、表面踏査では古墓の明確な数を把握することが困難で、調査に伴う伐採後、墓の数が大幅に増えることとなった。



図版1 潮原古墳群の位置



第1図 沖縄本島の位置



第2図 与那国島の位置・島内の遺跡およびウガソン (知念1989)

＝＝＝　凡例　＝＝＝

I類・石積石面地 [●] 地面地を利用して形成
II類・モルタルが掛かる場 [○] 大きな塊で露出している所を利用して形成

III類・外側の堆積物に似る
IV類・岩盤裏
V類・半地下下式石積壁
VI類・縦み縫
VII類・不規整
△ 性格不明遺構

○○○○ 露出している岩盤 (石突岩)

アダン群

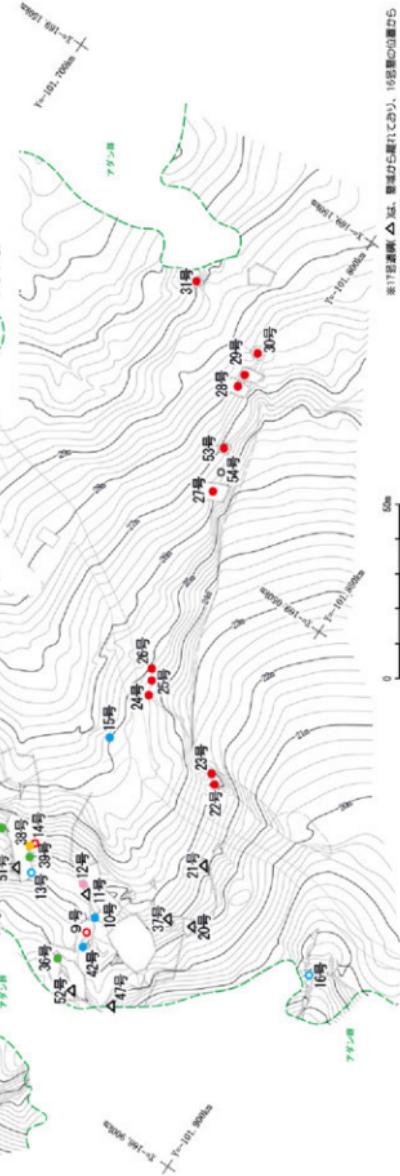
アダン裏

アダン縫

アダン縫

アダン群
露出している岩盤 (石突岩)

アダン群



第3図 古墓の分布状況

第3章 古墓群と出土遺物の概要・分類

ここでは、今回の発掘調査で確認された遺構や出土した遺物の概要や分類を行う。第4章で述べる各墓の様相での参考とされたい。

第1節 古墓と遺構の位置

今回調査した45基の古墓・遺構は、瀬原地区でも北寄りの斜面に位置する。全ての墓が、斜面、または、地表に露出している石灰岩の岩盤を背にして使用、または造られている。

古墓の分布状況として、調査区内の北西から東側にかけては、石灰岩の岩盤が大きく露出している地形を利用した墓が多く分布しており、南側には斜面地（石灰岩の岩盤が少し露出している場所もある）を利用している墓が多く分布している。補足ではあるが、調査区南側に分布する墓は、外観・構造が似ており（23～27・29～31号墓）、床石を使用する墓（23～27・29・30・53号墓）、墓室内から沖縄産施釉陶器を中心とする墓室外から沖縄産無釉陶器を中心に出土する墓が多いことは注目できる。また、屋根にモルタルが掛かる墓（2・4・7・10・13・15・16・34・40・42）は、外観が亀甲墓に似ている墓（2・4・7・10・15・42号墓）が見られ、近・現代の遺物を主体的に出土する。

第2節 古墓の分類

墓・遺構番号は、伐開・清掃中に確認出来たものから数字を付していった。確認出来た墓・遺構は全部で50（この内6つは調査区外）。調査区内では36基の墓（この内1基は未調査）、8の遺構を確認した。確認した墓の多くは発掘調査前に墓の持ち主によって人骨・遺物が持ち帰られている。また、一部の墓では、墓の持ち主が墓室内から人骨・遺物を持ち帰るときに墓を崩して取り上げているものもあり、墓の形態が読み取りにくいものもある。

墓室内を掘削して確認した層は、墓の選定場所・構築方法を知るために、参考用として載せる。層序は、I a（砂）・I b（表土）・I c（盛土）・I d（砂敷）・II a（盛土）・II b（砂利）・III（旧表土）・IV（褐色土）・地山・岩盤に分けた。IV層は無遺物層である。

墓を作る場所の選定として、ゆるやかに傾斜している地形を利用して斜面又は、石灰岩の岩盤が露出している所を選び、地面を少し掘り下げて整地したり、墓室内にかかる岩盤を削ったりする。盛土（II a層）をして整地するものもある。5号墓は例外で、地中に埋葬するため深く掘り下げて整地している。整地した後の墓室内には、床石・砂・砂利を敷くものがある。

墓室は、ほとんどの墓が地表に露出している岩盤を利用して周辺に石灰岩礫を積む。墓室内の床部は岩盤を削って利用しているもの、平らな床石（石灰岩・砂岩）を敷くもの、床石を敷かないものがある。

墓室を閉じるものとして天井に使われるものでは蓋石（石灰岩・砂岩・ビーチロック）、礫石（石灰岩）が主で、天井以外に墓口があるものは板石（石灰岩・砂岩）、礫石（石灰岩）を積んで墓口を閉じる。板石と礫石（石灰岩）を併用して閉じるものもある。II類に示したモルタルが掛かる墓は前記の蓋石、墓口等の上からモルタルを掛けたものである。

今回調査した墓の特徴的なものとして墓室内から墓口前に砂を敷くものが多く見られる。墓口前に敷かれている砂は、22号墓が墓庭を形成していることを参考に便宜上「庭」とした。

墓はI～VII類で分類した。細分が不明瞭なものは残存状況から類推して分類。II類B+として分類した16号墓は調査の途中で、調査区外の墓であることがわかった。VII類の54号墓について、調査終了後に土中から人骨・遺物が出土したが、調査出来なかった墓である。

I類：石積石室墓（8・9・14・22～31・53号墓）

天井に大きな蓋石を乗せており、岩盤を一部利用して周辺に平らな石を立てるか、礫石を積むもの。

A：墓室内にかかる岩盤を一部削り利用するもの。

i：床石が敷かれているもの。

a：墓口が板石で閉じていたと思われるもの（25号墓）。

- b : 蓋口が板石と礫石を併用して閉じていたと思われるもの（23・24・26号墓）。
- c : 崩されていて、蓋口が何で閉じられていたか不明なもの（8号墓）。
- ii : 床石が敷かれていないので、蓋口が板石で閉じられていたと思われるもの（9号墓）。
- B : 岩盤の露出していない緩やかな斜面を利用しているもの。
- i : 床石が敷かれているもの。
- a : 蓋口が板石と石積みを併用して閉じていたと思われるもの（27号墓）。
- b : 墓を確認した時は、蓋口がセメントブロックを積んで閉じていたもの（30号墓）。
- c : 蓋口前にブロック状の砂岩を並べているが、何で閉じられていたか不明なもの（29号墓）。
- d : 蓋口が何で閉じられていたか不明なもの（53号墓）。
- ii : 床石が敷かれていないので、蓋口を板石で閉じているもの（31号墓）。
- C : 地表に露出している岩盤をそのまま利用しているもの（22・28号墓）。
- D : 元々岩盤が掘り込まれた場所を利用しているもの（14号墓）。
- II類**：蓋石または礫石の上からモルタルを掛けている墓（2・4・7・10・13・15・16・34・40・42号墓）。
- 40号墓以外は墓室内の岩盤を削って石積みで補足してあるもの。
- A : 天井に大きな蓋石を乗せていたと思われるもの。
- i : 蓋口が石積みで閉じていたと思われるもの（13号墓）。
- ii : 蓋口を石積みで閉じ、その上からモルタルを掛けていると思われるもの（2号墓）。
- iii : 蓋口が崩されていて何で閉じられていたか不明なもの（42号墓）。
- B : 天井に多数の礫石を乗せていたと思われるもの。
- i : 蓋口を石積みで閉じ、その上からモルタルを掛けていると思われるもの（4・7・16号墓）。
- ii : 蓋口が崩されていて、何で閉じられていたか不明なもの（10号墓）。
- C : 天井に何を乗せていたか不明なもの。
- i : 蓋口が石積みで閉じていたと思われるもの（40号墓）。
- ii : 蓋口が崩されていて、何で閉じられていたか不明なもの（15・34号墓）。
- III類**：岩陰墓（1・33・36・39・41・49号墓）
- 天井に石灰岩の岩盤が迫り出たもの、岩陰を利用するもの。
- A : 自然の地形をそのまま利用しているもの。
- i : 岩陰内の一部に礫石で区分けした墓室を作るもの。
- a : 岩陰入口に砂を敷くもの（1号墓）。
- b : 岩陰入口に砂を敷かないもの（36号墓）。
- ii : 岩陰内で墓室を区分けしないもの。
- a : 人骨・遺物に多数の礫石を被せて隠すもの（33号墓）。
- b : 磕石を被せないもの（41号墓）。
- B : 岩盤を削って岩陰を作るもので、人骨・遺物に礫石を被せて隠すもの（39・49号墓）。
- IV類**：半地下式石積墓（5号墓）
- 地面を深く掘込み、石積みで石室をつくるもの。
- V類**：掘込み墓（3・6・38・50号墓）
- 石灰岩の岩盤を掘込み、墓口を礫石で閉じたり、囲ったりするもの。
- A : 小規模な墓
- i : 掘込みが浅い（3・6号墓）
- ii : 掘込みが深い（50号墓）
- B : 大規模な掘込み墓と思われるもの（38号墓）。
- VI類**：フィッシャー墓（12・48号墓）
- 石灰岩の岩盤の割れ目（隙間）を利用しているもの。
- VII類**：不明墓（54号墓）
- 調査終了後に、土中から人骨・遺物が出土。墓と思われるものだが、未調査。
- 性格不明造構：性格が不明瞭な造構。（11・17・20・21・35・37・47・51号）

第3節 葬法

当古墓群で発掘調査した36基の墓のうち、人骨がある程度の出土量を伴っている墓は12基（1・5・23・24・26・27・29・31・33・38・49・54号墓）であった。それ以外の墓は人骨の出土量が少ないので、あるいは全く出土しない墓もあり、これらの墓はおそらく発掘調査前に移転するため、墓の持ち主によって人骨等を持ち出したと思われる。しかし、人骨の出土量が少くとも墓室内あるいは岩陰内から藏骨器や転用した藏骨器、あるいは木棺で使用したと思われる釘などの遺物、そして遺構の規模で葬法をある程度類推できる墓も見られる。それ以外で葬法に関する藏骨器や釘などの遺物が墓室内あるいは岩陰内から出土しない墓、または遺構の規模等で類推できない墓は葬法不明とする。

37基のうち、洗骨前の一次葬で使用された墓（I類）、特に釘が出土した墓は点数が少数でも、一次葬の可能性を示唆するものとした。洗骨等で改葬後、二次葬として藏骨された墓（II類）、葬法不明（III類）に分類し、詳細は下記に記した。ただし、1号墓は原位置を保った一次葬の人骨と、改葬して転用藏骨器で藏骨している人骨、または岩陰内に散骨されている二次葬の人骨が検出された。また、54号墓については人骨の出土量が多いものの未調査のため、葬法は不明（III類）とした。

I類：一次葬

- A：遺骸を木棺等の木材構造物に納めたと思われる墓。木棺に使用したと思われる釘の出土有無で参考（1・2・4・5・7～10・14・15・26・36・38・41・49号墓）
- B：木棺等を使用せず、遺骸を安置しその上に石を積み上げたと思われる墓。ただし、頭蓋骨は原位置を保っていない（33号墓）。

II類：二次葬

- A：専用藏骨器（厨子甕）に藏骨された墓（27・36号墓）。
- 36号墓は納骨されていない藏骨器（厨子甕）が2点出土。
- B：大型の壺や甕を二次利用（転用藏骨器）し、藏骨した墓。
- a：転用器をそのまま使用した墓（6号墓）。
- b：沖縄産無釉陶器を上下半分、あるいは左右半分に打ち割り、片身を使用して藏骨した墓（1・24～26号墓）。
- C：改葬後、藏骨器を使用せず、墓室内または岩陰内に散骨した墓。人骨を墓室内に納めた後、土で埋めた墓も見られる（1・23・27・29・31号墓）。
- D：改葬後の使用方法は不明の墓（3・30・34・39・40・42・48・50号墓）。

一次葬が可能な規模を有していないこと、30号墓に関しては調査期間内に入骨等が移転され、その後調査した結果、一次葬の可能性を示唆する釘等が出土しないことから改葬後に使用と類推。

III類：葬法不明（12・13・16・22・28・53・54号墓）

第4節 遺物の分類

出土遺物は厨子甕、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、中国産の白磁、染付、色絵、瑠璃釉、褐釉陶器、タイ産褐釉陶器、肥前系磁器、本土産近現代磁器、土器、玉、錢貨、金属製品、ガラス瓶等がある。第4章で各墓の様相を述べるため、必要なものについて概要や分類概念を提示する。

1. 藏骨器

藏骨器は専用藏骨器と沖縄産無釉陶器の転用藏骨器が確認された。総数27点で、内訳は専用藏骨器及びその蓋がそれぞれ7点づつ、沖縄産無釉陶器転用藏骨器が20点である。沖縄産無釉陶器転用品には壺・鉢・水甕の器種が確認された。転用藏骨器には1個体の壺を分割して利用しているものもある。専用藏骨器の名称については安里進氏（安里1997）を参考にした。

2. 沖縄産施釉陶器

247点の沖縄産施釉陶器が被葬者への供品や葬送儀礼の道具として確認された。ほとんどが一部欠損するものの全形が把握できる遺物である。碗、小碗、皿、杯、壺、急須、酒器、四耳壺、火取、香炉が確認された。数量的には他の古墓群と同様に碗が多数を占め、遺物の中には成形や釉薬が明らかに優良な資料も存在する。

分類にあたっては山城直子氏（山城1998）を参考とした。

碗、小碗、皿、杯、瓶、壺、急須、酒器について分類を行う。方法と記号は以下のような基準で使用する。

器形の特長 ①外観的な器形は「I類、II類、III類・・・」のローマ数字。

②さらに、高台や口縁部の成形等の詳細な違いは「1、2、3・・・」の和数字。

釉薬の特徴 ③釉薬の種類や施釉方法は「A、B、C・・・」のローマ大文字。

④さらに、釉薬の施釉部位等の詳細な違いは「a、b、c、・・・」のローマ小文字。

文様の有無 ⑤文様の有無については特に記号を用いず記述し、詳細を分類する場合は「①・②・③・・・」の数字。

碗

I類：高台脇から斜めへ直線的に立ち上がり、そのまま口縁部へ至る。口縁部は直口し、口唇部は丸みを帯びる。幅広の高台を持ち、大きさは殆ど一定である。“フィガキー”と呼ばれる漬け掛けによって施釉されるため、腰部以下は露胎する。釉薬は灰釉と鉄釉の2種に大別される。灰釉では有文資料が1点確認された。

A：灰釉。ほとんどが無文だが、有文が1点確認された。白化粧に灰釉を施したものもある。

有文：飴釉で口縁外面を2ヶ所、口縁内面を1ヶ所縁取りする。

B：鉄釉。

II類：高台脇から丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は直口か僅かに外反させ、口唇部は丸みを帯びる。I類に比して高台の幅が小さくなり、ややスマートな観がある。I類のように“フィガキー”と呼ばれる漬け掛けによって施釉されるものと、疊付けを除き総釉されるもの等がある。釉薬は内外面一色の単掛けと内外面が異色の掛け分け方法があり、種類も全体に白化粧をして透明釉を施すものや鉄釉を施すものがあり細かく分類される。少量ながら有文も確認された。

A：白化粧に透明釉。すべて単掛け。白一色。疊付けを除き総釉。

a：見込みを蛇目状に釉剥。有文と無文がある。

有文：①呉須で巴文や草花文。

②赤絵付で丸文

③飴釉・緑釉で花文

b：見込みも総釉。高台外は白化粧せず、透明釉のみ。

B：外面鉄釉。掛け分けと単掛け。

a：鉄釉。単掛け。露胎する見込中央に丸とその周辺に帯状の円を描く。

b：鉄釉+白。掛け分け。外面は鉄釉を腰部まで、内面は白化粧して透明釉を施し、見込みは蛇目状に釉剥。高台は露胎。見込中央に丸とその周辺に帯状の円を描く。

c：鉄釉+灰。掛け分け。外面は鉄釉を腰部まで、内面は灰釉を施し、見込みは蛇目状に釉剥。高台は露胎。見込中央に丸とその周辺に帯状の円を描く。

III類：高台脇から丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は僅かに外反させ、口唇部は丸みを帯びる。II類と同様の器形だが、体部外面を2段に面取りする。疊付けを除き白化粧に透明釉を施し、見込みを蛇目状に釉剥する。1点のみ確認された。

IV類：高台脇から丸みを帯びて立ち上がり、口縁部を外反させ、口唇部は丸みを帯びる。釉薬は疊付けを除き白化粧に透明釉を総釉し、見込みは蛇目状に釉剥する。すべて同一構成の有文。文様は呉須と飴釉で印花文を施す。II類よりさらにスマートな観がある。

V類：蓋付碗。蓋とセットになる碗で、精巧な作りである。

身：高台は丸みを帯びて腰が張り、ほぼ垂直に立ち上がる。口縁部は直口し、口唇部は丸みを帯びる。白化粧に透明釉を総釉するが、口唇部・疊付けを釉剥、見込みを蛇目状に釉剥する。体部外面に濃緑色の釉で文様を施す。

蓋：外面に身と同様の施釉・文様を施す。帯状の取手を中央に貼り付ける。

小碗

器形、施文方法等が碗と類似するため、分類もそれに準ずる。

II類：高台脇から丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は直口か僅かに外反させ、口唇部は丸みを帯びる。見込みは蛇目状に釉剥する。單掛け（ただし、口唇部のみ鉄釉を施す。）と掛け分け方法があり、種類も白化粧に透明釉を施すものや鉄釉・灰釉がある。单掛けは総釉だが、掛け分けは腰部までしか施釉せず、高台は露胎。施釉方法によって2種に分類される。

A：白化粧に透明釉。白一色の単掛け。疊付けを除き総釉で、内面は蛇目状に釉剥。ただし、碗と異なり口唇部のみ鉄釉を施す。

B：外面鉄釉。掛け分け。釉は腰部まで。内面は総釉で蛇目状に釉剥。

b：鉄釉+白。外面は鉄釉を腰部まで、内面は白化粧に透明釉を施す。

c：鉄釉+灰。外面は鉄釉を腰部まで、内面は白化粧に透明釉を施す。

III類：高台脇から丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は僅かに外反させ、口唇部は丸みを帯びる。II類と同様の器形だが、体部外面を面取りする。碗のIII類と異なり面取りは1段。疊付けを除き白化粧に透明釉を施し、見込みを蛇目状に釉剥する。1点のみ確認された。

皿

I類：高台脇から斜めに開き、口縁部を折り曲げる。高台は幅広で高く、碗のI類と同様の成形方法で酷似する。灰釉を施すが、I類と同様漬け掛けによって施釉されるため、体部下半からは露胎する。

II類：輪花皿。釉薬は碗や小碗と同様に内外面を一色で单掛けするものや、内外面が異色の掛け分けをするものがある。施釉部位も見込みを釉剥することは共通だが、総釉とするものと、腰部まで施し高台を露胎させるものがある。施釉方法が同一でも口唇部を面取りするものと舌状に尖らせるものがあり、2種に分類される。

1：口唇部を舌状に尖らせる。

B：鉄釉+白。総釉。疊付けを除き総釉で、外面は鉄釉、内面は灰釉を施す。外面の鉄釉が内面に垂れないように白化粧と透明釉を鉄釉の後から施し、外面まで若干線取りする。

C：鉄釉+白。外底露胎。外面は鉄釉を口唇部から腰部まで、内面は白化粧に透明釉を施す。高台は露胎する。鉄釉を白化粧と透明釉の後から口唇部まで施すため、内面に垂れて装飾的な文様の効果を持たせている。

2：口唇部を面取りする。

A：白化粧に透明釉。白一色の単掛け。疊付けを除き総釉で、ただし、碗と異なり小碗と同様に口唇部のみ鉄釉を施す。

B：鉄釉+白。掛け分け。総釉。疊付けを除き総釉で、外面は鉄釉、内面は白化粧に透明釉を施す。外面の鉄釉が内面に垂れないように白化粧と透明釉を鉄釉の後から施し、外面まで若干線取りする。

C：鉄釉+白。掛け分け。外底露胎。外面は鉄釉を口唇部から腰部まで、内面は白化粧に透明釉を施す。高台は露胎する。鉄釉を白化粧と透明釉の後から口唇部まで施すため、内面に垂れて文様の効果を持たせている。

杯

腰部が丸みを帯びて立ち上がり、口縁部が外反する。白化粧に透明釉を施すもの、鉄釉を施すもの、色絵が確認された。

A：白化粧に透明釉。高台疊付けまで釉を施し、高台内側と外底面は露胎。

B：灰釉。腰部まで釉を施し、高台は露胎。内面は総釉。口唇部は釉剥ぎ。

C：色絵。高台外側まで釉を施し、疊付けから外底面は露胎。

董

大小の大きさがある。

I類：最大径が胴部の上位に位置する。方形状に内削りを行う明瞭な高台を持ち、高台脇から斜めに比較的シャープに立ち上がる。袖は腰部まで施し、高台は露胎する。有文が確認された。無文はすべて鉄袖で、有文は灰袖と白化粧に透明袖を施したものがある。大型の大半はI類である。

有文：①白化粧に透明袖を腰部まで施し、高台は露胎させる。文様は鉄袖を口縁部から胴部中央まで掛流す。

②灰袖を腰部まで掛かり、高台は露胎させる。文様は濃緑色の袖を肩部に配する。

II類：最大径が胴部の中央に位置する。袖は腰部まで施し、高台は露胎する。内削りを行う角形の高台をもつものと、高台外底が上底状を呈するものがあり、2種に分類される。袖の種類も鉄袖のみではなく、赤褐色の袖が確認された。大型が1点確認された他、すべて小型である。

1：内削りを行う角形の高台。鉄袖を施すものと、赤褐色の鉄袖を施すものがある。

A：鉄袖。

B：赤褐色の鉄袖。

2：高台外底が上底状。

III類：胸が強く張り、最大径が上位に位置する。底部に高台を作らず、基筒底状を呈する。鉄袖を底部下半まで施し、外底面は露胎する。小型が1点確認された。

IV類：胸が強く張り、最大径が中央に位置する。内削りを行う角形の高台を有する。高台脇から斜めに直線的に立ち上げ、胴中央から強く屈曲させて直線的に頸部に向かう。そのまま再び強く屈曲させ、外反する口縁部とする。袖は白化粧に透明袖で、胴部中央まで施す。胴部下半から高台は露胎する。小型が1点確認された。

V類：腰部が強く張る。比較的浅い内削りを行う角形の高台を有する。白化粧に透明袖を施すものと鉄袖を施すものがある。小型が2点確認された。

A：白化粧に透明袖。袖は高台近くまで施し、高台は露胎する。高台の成形が丁寧。

B：鉄袖。袖は高台外面まで難に施し、豊付けと外底面は露胎する。高台の成形がAと比較して難である。外底面に窓印が刻まれている。

瓶

大型と小型があり、大型は後述するI類1のみ。形状や袖薬の掛け方の組み合わせが豊富で多数に分類される。

I類：肩部と腰部の2ヶ所が丸みを帯びて膨らみ、胴部がくびれる瓢箪型。“嘉瓶（ゆしひん）”と呼ばれる。腰部・胴部・肩部の径の関係により3種に分類される。

1：腰（大）+胴（小）+肩（中）。最大径が腰部となり、肩部が2番目、胴部が最も小さい。袖は豊付けを除いて総袖とする。大型で鉄袖のみ。

2：腰（大）+胴（中）+肩（中）。最大径が腰部となり、胴部と肩部の径はほぼ同じ。胴部から肩部へ向かって、1のように再び膨らまず、垂直に立ち上がる。袖は高台脇付近まで施し、高台が露胎するものや豊付けを袖剥ぎするものがある。鉄袖のみ。

3：腰（大）+胴（中）+肩（小）。最大径が腰部となり、2番目が胴部、肩部が最も小さい。袖は腰部下半まで施し、残りは露胎する。胴部に4条の沈彫文が巡る。

II類：腰部がくの字に折れ曲がり、稜を持つ瓢箪型。“嘉瓶（ゆしひん）”と呼ばれる。腰部・胴部・肩部の径の関係により2種に分類される。

1：腰（大）+胴（小）+肩（中）。最大径が腰部の稜となり、2番目に肩部、胴部が最も小さい。胴部や腰部に数条の沈彫が巡るものもある。基本的に袖は高台脇まで施し、高台は露胎するが、外底面に袖を難に施すものもある。有文と無文がある。

有文：①腰部の稜から頸部の立ち上がり部にかけて幾何学的な文様を描く。白色袖。

②腰部と頸部の立ち上がり部に沈彫線を施し、胴部に草文を描く。鉄袖。前述した酒注

IV類と同様の袖を施すものがあり、外底面には墨書きが見受けられるものもある。

2：腰（大）+ 胸（中）+ 肩（中）。最大径が腰部の稜となり、胸部と肩部の径はほぼ同じ。胸部から肩部へ向かって、1のように再び膨らまず、垂直に立ち上がる。釉は高台脇まで施し、高台は露胎させる。鉄釉。

III類：肩部がくの字に折れ曲がり、稜を持つ瓢箪型。“渡名喜瓶（となきびん）”と呼ばれる。器形によって3種に分類される。胸部に釉は施さず露胎させるが、褐釉を流し掛けする。文様構成と施釉方法を組み合わせることによってバラエティーが豊富である。

1：腰部は膨らみ、胸部は折り曲げてほぼ垂直に立ち上げる。肩部で再び内側に折り曲げて稜を作り、頭部に至る。球形の腰部と円筒形の胸部を組み合わせて形成する。腰部の最大径が上位にくる。

腰部上方から胸部下方と肩部付近に1条～2条の沈圏線を施し区画する。胸部はすべて無文。

A：鉄釉（胸部上方から）+ 白（腰部）。口縁部から胸部上方まで鉄釉を、腰部から高台脇まで白化粧に透明釉を施す。豊付から外底面までは露胎。

B：灰釉（肩部から）+ 鉄釉（腰部）。口縁部から肩部の稜まで灰釉を、腰部からは高台は総釉。豊付けを釉剥。

2：1とほぼ同様の器形と成形方法だが、腰部の最大径が下位にくる点で異なる。すべて有文。口縁部から胸部上方まで鉄釉を、豊付けを除いて腰部から高台は灰釉を施す。腰部と胸部の境目及び胸部上方に2条の沈圏線を施し区画する。区画内の文様は斜位の刻目。

3：腰部下方が最大径を持って膨らみ、緩やかに内傾しつつ肩部に向かって垂直に立ち上げる。肩部で内側に折り曲げて稜を作り、頭部に至る。1や2と異なり、胸部をくの字に折り曲げず滑らかに移行させる。

A：沈圏線+文様。鉄釉（胸部上方から）+ 灰釉（腰部）。胸部の上方と下方に2条の沈圏線を施し区画する。区画内の文様は2種類の斜位の刻目。口縁部から胸部上方まで鉄釉を、腰部から高台まで灰釉を施す。豊付けは釉剥。

B：胸部の文様のみ。鉄釉（肩部から）+ 灰釉（腰部）。沈圏線による区画がない。文様は胸部から腰部上方まで格子文を施す。口縁部から肩部の稜まで鉄釉を、腰部から高台まで灰釉を施す。豊付けは釉剥。

C：胸部から腰部中央までの文様。鉄釉（胸部中央まで）+ 灰釉（腰部）。文様が胸部から腰部中央まで施される。口縁部から胸部中央まで鉄釉を、腰部から高台脇まで灰釉を施す。外底面、高台脇に釉薬が一部付着する。ここまで分類では文様の範囲や区画の中には施釉されず露胎させる規則性があったが、3Cタイプは文様範囲が腰部中央まで広がり、釉も文様範囲まで施される。

IV類：胸部と頭部が膨らむ瓢箪型。高台脇から直線的に立ち上がり、肩部で急激に頭部へ向かって縮まる。頭部への立ち上がりでくの字に折れて、再び袋状に膨らむ。

V類：高台脇から斜めに比較的直線的に立ち上がり、肩部で頭部へ向かって縮まる。胸部の最大径が肩部にくる。

VI類：高台脇から丸みを帯びて立ち上がり、緩やかに縮まって頭部へ至る。最大径が腰部にくる。高台成形の特徴から2種に分類される。

1：高台は内削りを行い角形。

2：高台外低が上底状。

VII類：貼付高台。筒状。貼付高台が取れて、再利用したものがある。

VIII類：胸部が袋状に丸く張り出し、比較的短頭。他の製品と比べて頭部が短い。高台を作らず、外底面はやや上底状。

IX類：底部からほぼ直線的に立ち上がり、肩部で頭部へ向かってゆるやかに縮まる。豊付外側から肩部へ直線的。高台を作らないが外底面は内削りを行い角形の豊付けを持つ。

X類：底部から丸みを帯びて立ち上がり、頭部へ向かってしだいに縮まる。直口口縁。大型。高台脇と腰部の区別がない。高台を作らないが外底面は内削りを行い角形の豊付けを持つ。

XI類：耳付瓶。外面に光沢を持つ瑠璃釉が掛かる。水注II類とセット関係がある。近年でも良く見られる新しいものである。2種に大別される。

1：高台脇に段を持ち垂直に立ち上がり、肩部で丸みを持たせて頸部に至る。

2：高台脇から丸みを持って立ち上がり、胴部が強く張り、頸部に向かう。高台はハの字に開く。

急須

I類：有文。外面に白化粧に透明釉を腰部まで施す。底部と内面は露胎する。底部には逆円錐状の脚が3つ付く。文様は体部を2条の線によって6つに区画し、区画内を何本もの縦線によって逆三角形を描く。文様を施した部分には緑灰色の釉を掛け、強調させる。

II類：無文。外面に光沢を持つ厚い瑠璃釉を腰部まで施し、底部は露胎する。内面は白化粧に透明釉を施す。底部に逆円錐状の脚が3つ付くものと、付かないものがある。瓶X類とセット関係がある。

酒器

方言で“カラカラ”と呼ばれる。釉は腰部まで施され、高台は露胎する。

I類：胴部が楕円形に膨らむもの。強い楕円形で背が低いものと、円形に近いものがある。高台の成形によって、3種に分類される。

1：疊付けが細い。高台は浅い内削を行い角形。胴部は強い楕円形で背が低い。有文と無文がある。
無文：鉄釉。

有文：体部上面に縱位の線彫文を巡らせる。白化粧に灰色釉を腰部まで施す。

2：高台外底を上底状に成形した後、浅い内削りを行う。疊付けが太く、内縁へ向かって斜めにせり上がる。接地面は外縁のみである。鉄釉。

3：方形の疊付けがなくなり、外底面が上底状を呈する。2の成型方法から高台内削りをやめたものと思われる。鉄釉。

II類：腰部が丸みを持って立ち上がり、上部で明瞭な稜を持ち、強く屈曲して頸部に至る。高台の成形によって、2種に分類される。

1：疊付けが細い。高台は内削りを行い角形。有文も確認された。
無文：鉄釉。

有文：灰釉。鉄釉を流し掛けする。

3：高台外底面が上底状を呈し、内削りを行わない。釉は白化粧に透明釉を施すものと、鉄釉を施すものが確認された。I類3と高台の成型方法が同じ。

A：白化粧に透明釉。

B：鉄釉。

IV類：高台脇から水平に段を持ち、腰部に稜を持って垂直に屈曲して立ち上がる。そのまま円を描くよう頸部に至る。光沢を持つ赤褐色の釉を腰部まで厚く施す。釉には黒斑が浮き出ている。高台は露胎する。高台外底を上底状成形し、小さく浅い内削りを行う。疊付けは太く、内縁へ向かって斜めにせり上がるため、接地面は外縁のみである。瓶II類1の有文資料と同様の釉薬。

油壺

肩部に4つの耳が付くタイプの壺である。胴部が丸みを持ち、頸部が太いため、やや寸胴の印象を受ける。蓋も確認されている。

火取

方言で“ヒートウイ”と呼ばれる煙草等の火種入れ。胴部が直線的に立ち上がる円筒型。

I類〈碗〉			II類			
A-無文	A-有文	B	Aa-有文①	Aa-有文②		
II類						
Aa-有文③	Aa-無文	Ab	Ba	Bb	Bc	
III類	IV類	V類	II類〈小碗〉			
I類〈皿〉	II類					
I類〈杯〉			I類〈壺〉			
A	B	C	大-有文①	大-有文②	大-無文	小

第4図 沖縄産施釉陶器分類模式図①

II類〈壺〉			III類	IV類	V類	
1-A小	1-B小	2-大	小	小	A小	B小
I類〈瓶〉				II類		
1	2	3		1-有文①	1-有文②	1-無文
II類		III類				
2	1-A	1-B	2	3-A	3-B	
III類		IV類		V類	VI類	
3-C		1	2		1	2
VII類		IX類		X類	XI類	
1	2				1	2

第5図 沖縄産施釉陶器分類模式図②

I類〈急須〉	II類	I類〈酒器〉			
		1-有文	1-無文	2	3
II類					III類
1-有文	1-無文	2-A	2-B		

第6図 沖縄産施釉陶器分類模式図③

3. 沖縄産無釉陶器

183点の沖縄産無釉陶器が確認された。器種には、壺、大型花瓶、擂鉢、水甕、火炉がある。その内、173点が壺で大多数を占めている。

壺のみ分類し、その概念は以下のとおりである。概ね口縁部の成型方法に違いが見られ注目する。

I類：方形の口縁部がL字状に折れ曲がる。中・小型。底部から斜めに立ち上がり、胴部に丸みを持たせる。頸部に向かって収縮し、屈曲して稜を持ってほぼ垂直に立ち上がり、頸部をなす。胴部の長さや成形の丁寧さによって2種に大別される。

A：胴部が長く、肩が張る。頸部の立ち上げや口縁部の折り曲げ等の成形が丁寧でシャープな印象を持つ。中型が多い。

B：胴部が低く、寸胴である。頸部の立ち上げや口縁部の折り曲げ等の成形が雑なものが多い。小型が多い。

II類：口縁部を玉縁状に肥厚させる。中・小型。底部から斜めに立ち上がり、胴部に丸みを持たせる。頸部に向かって収縮し、屈曲して稜を持って立ち上がる。胴部の長さや成形の丁寧さによって2種に大別される。

A：胴部が長く、肩が張る。肩部から緩やかに収縮し、頸部に至る。I類のように、頸部の立ち上がりに明瞭な稜をもたない。丁寧な成形である。中型が多い。

B：胴部が低く、寸胴である。成形が雑なものが多い。小型が多い。

III類：小型で最も雑な成形である。底部から斜めに立ち上がり、稜を持って円筒形の胴部に至る。再び稜を持って肩部を作り、斜めに頸部に至る。頸部は垂直に立ち上がり、口縁部を外反させる。

IV類：底部から丸みを持って立ち上がり、緩やかに頸部に至る。頸部中央を最も細くさせ外反して口縁部に至る。瓶に似た器形である。

V類：胴部が長く肩が張る。肩部から頸部にかけて明瞭な稜をもって屈曲し、垂直に立ち上げる。台形状の口縁部がL字状に折れ曲がる。口縁部の形態によって2種に大別される。外面の器形はI・II類に似るが大型である。

- A : 口縁部の上部を長く、下部を短く成形するため、口唇部が斜めになる。
 B : 口縁部が方形。

VI類：全体的な器形はV類に似るが、口唇部の下方に沈線が1条巡る。口縁部の形態によって2種に大別される。

- A : 口縁部の上部を長く、下部を短く成形するため、口唇部が斜めになる。口唇部に沈線が巡り、口唇部下方が強調される。
 B : 口縁部が方形。口唇部に沈線。

VII類：底部から斜めに立ち上がり胴部中位から上位に最大経を持たせる。頸部向かって収縮し、そのまま外反させて口縁部に至る。成型により2種に大別される。

- A : 口縁部の成形がシャープで明瞭な稜を持ち、丁寧である。
 B : 口縁部の成形がルーズで丸みを持つ。

VIII類：底部から斜めに立ち上がり胴部中位から上位に最大経を持たせる。頸部に向かって収縮し、ほぼ直に立ち上げ、口縁部に至る。口縁部が鉢錐状に肥厚する。肩部に耳を持つ。

IX類：底部から丸みを持って立ち上がり、胴中位に最大経を持たせ、半円形を呈する。細い頸部を持つが口縁部の形状は不明である。胎土が異質でやや重い。八重山産の可能性が高い。

I類〈壺〉		II類		III類	IV類	V類	
A	B	A	B			A	B
VI類		VII類		VIII類	IX類		
A	B	A	B				

第7図 沖縄産無釉陶器分類模式図

4. 染付

染付は完形品が多く、18世紀～19世紀の徳化窯系を中心に出土している。総数は28点出土している。器種は、碗・小碗・皿・小壺・小杯が出土しており、碗が大半を占める。

5. 白磁

白磁は18世紀～19世紀の徳化窯系を中心に出土している。総数11点出土している。出土しているもの全て型成形で、小杯が大半を占める。

6. 色絵

色絵は18世紀～19世紀の徳化窯系を中心に出土している。総数9点出土している。碗・皿・杯・小杯が出土している。

7. その他の中中国産磁器

青磁染付：小碗1点のみ出土。

瑠璃釉：瑠璃釉は全て型成形で、直口口縁の小杯である。外面のみ瑠璃釉を施釉する。総数7点出土している。

中国産磁器：瓶が2点（1個体か？）出土している。

8. 肥前系系磁器

染付と白磁が出土している。肥前産を中心に出土しており、17世紀中頃～19世紀中頃の間で収まる。染付は完形品が多く、総数9点出土。器種は碗・皿・瓶・蓋が出土している。白磁は総数5点出土。小碗と瓶が出土している。

9. 本土産近・現代磁器

瀬戸・美濃系の杯を1点、產地不明の猪口1点のみ図示した。本土産近・現代磁器は総数183点出土した。

10. 煙管

煙管は総数で28点得られ、いずれも墓室内、あるいは岩陰内から出土している。雁首は11点で、その内完形品は8点、形状が一部欠損するなどの破損品が3点である。吸口は17点で、吸口が欠損した2点を除き、全て完形品である。材質はいずれも銅製であるが、1点だけ円筒が表面は銀で、内部は銅の二重構造をなす吸口（第25図2）がある。

11. 菓

菓は墓室内外、あるいは岩陰内から総数34点が得られた。頭部の形態により花型（I類）・耳かき型（II類）・匙型（III類）に分類した。最も多いのが花型（I類）15点であるが、そのうち完形は3点で残り12点は破損品（竿と花の基部が付いた状態、あるいは花のみ）で出土する。耳かき型（II類）は10点で完形は8点、破損品は2点である。匙型（III類）は9点で全て完形である。材質はいずれも銅製と思われる。

12. 釘

釘は16基の墓で総数946点が得られ、庭などの室外からも出土するものの、そのほとんどが墓室内、あるいは岩陰内から出土している。材質は鉄製で丸釘が大多数を占めるが、角釘も見ることができる。本体には木質が付着しているものが多く、木棺などの木材構造物に使用されていたと思われる。墓から出土した釘はその墓が少なくとも一次葬で使用された可能性を示唆するものであり、葬法にも関わる遺物である。釘の大きさ、出土状況については各墓によって様相が異なるため、特徴的な例をいくつかの墓で下記に紹介する。

（1）2、5、9号墓

ともに墓室内から200点以上出土した。出土状況から見ると、人骨は大部分持ち出されているものの、使用されたと思われる木棺の大きさがある程度平面で読める状況であり（第13、24図参照）、両墓とも一次葬に使用したと見てほぼ間違いないであろう。釘は両墓とも丸釘を使用し、頭部から先端部まで残る完形品は少なく、欠損品が多数を占めるため、実際には200点以上釘を使用しているわけではない。欠損品を見ても頭部から胴部途中で欠けたもの、胴部から先端部まで残るものがあり、釘が分断される理由として木棺収納後、時間の経過により、木材が自然に朽ちる過程で分断されたか、あるいは洗骨、移転等で人骨を持ち出す際に木棺を打ち壊して釘が分断されたかのどちらかのケースが考えられる。また、完形品から見ると、長さの異なる釘を2、9号墓は2種類、5号墓は3種類使用している。

(2) 1号墓

1号墓からは岩陰内外から101点出土し、丸釘が多いが、角釘も見ることができる。1号墓では原位置を保った一次葬の人骨や、転用器に納骨されたもの、あるいは周辺に散骨されたものなど岩陰内に複数体分の人骨が検出されたことから、1号墓には複数回、木棺に納めた可能性が考えられる。釘自体も2号墓、9号墓と同様完形品は少ないが、完形品の中にはL字に曲げられたものが出土している。

(3) 7号墓

7号墓からは墓室内から93点出土し、全て丸釘である。完形品で見ると7種類の長さの釘が使用されており、他の墓では見られない使用状況といえる。

13. ガラス製品

ガラス製品は総数98点が出土した。コップが出土した4点を除き、全て瓶である。瓶は製品自体に銘があるものや浮き文字などから用途を判別する材料となり、分かる物としてはビール瓶、清涼飲料水の瓶である。他には形態や大きさなどからワイン瓶、酒瓶のほか、化粧品、薬品の瓶などに類するものと思われるが、これらの瓶は無記銘、あるいは浮き文字等も見られないので用途不明とした。

ビール瓶

現代における小型および中型のビール瓶とほぼ同様の大きさである。肩部、または底部付近の浮き文字から分かる物として、「キリンビール」、「大日本麥酒株式會社」、「日本麥酒麒麟泉株式會社」などが見られる。色調は茶色が多数を占めるが、無色透明のものも何点か見られる。また、ガラス内部に気泡があるものや形態がわずかに歪んでいるものも見られる。

清涼飲料水の瓶

清涼飲料水の瓶は銘のあるもの、肩部、底部付近、あるいは底面に浮き文字を持つものがある。銘があるものとしては「コカコーラ」、「サンコーラ」、「マリヤ」、浮き文字があるものとしては「コカコーラ」の他に「別府麒麟泉株式會社」、「帝国麒麟泉株式會社」、「布引麒麟泉株式會社」、「ヌノビキタンサン」等がそれである。

14. 玉

玉は石製と、ガラス製の2点のみ出土している。

15. 玉製耳杯

中国産の青玉耳杯（酒杯）が1点のみ出土している。

第4章 古墓群の様相

ここでは、古墓群と性格不明の遺構の様相を遺構ごとに記述する。37基（1基は未調査・1基は調査区外）の古墓群と8基の性格不明の遺構がある。古墓や性格不明の遺構については調査進行の過程で通し番号を付けていったため、調査区外で確認されたものや遺構として成立しなかったものについては報告しない。このため、本報告書には番号について欠番とした。出土遺物の大半は特徴的な遺物を抜き出して図化しているが、本土産近現代磁器と近代瓦、ガラス製品については今回割愛し、集合写真のみとした。ただし、集計については本土産近現代磁器も瓦も行っているため参考とされたい。

第1節 1号墓

1. 遺構

観察一覧（第3表）に示す。

2. 出土遺物

岩陰内と岩陰外合わせて193点の遺物が確認され、その大半は岩陰内からである。種類は磁器骨器転用品、沖縄産施釉・沖縄産無釉陶器、中国産陶磁器、タイ産陶器、肥前系染付、本土産近現代磁器、金属製品、ガラス製品、鉄製品等がある。遺物の大半が釘、煙管、ガラス製品等の金属製品で、特に釘は多量に確認された。沖縄産施釉陶器の火取が確認されているが、本古墓で確認されたのみである。タイ産陶器の壺もここから確認されたのみである。近世～近現代にかけて長期的に使用された古墓と考えられる。



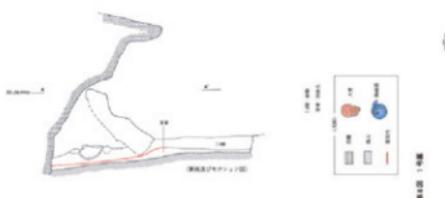
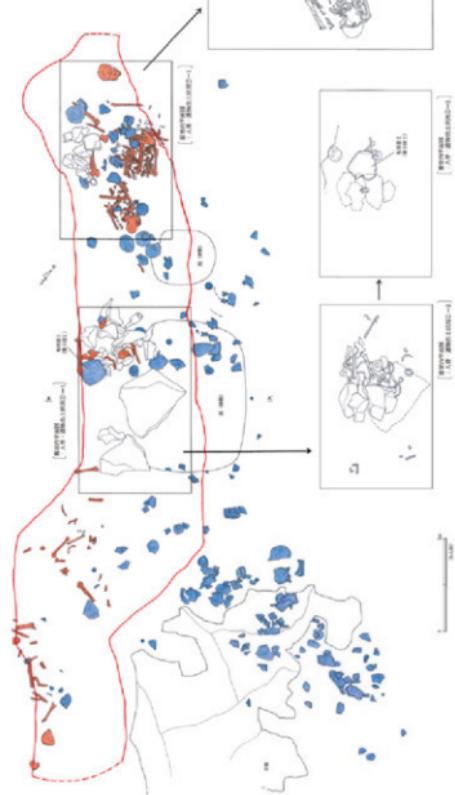
図版2 1号墓出土遺物集合

第3表 1号墓観察一覧

挿図番号	第8図
図版番号	図版3・4
立地	調査区東側の石灰岩の岩盤が露出している緩やかな斜面地。
構造	分類 岩陰墓(III類A i a)
	規模 縦(北東ー南西軸)約1.2m×横(北西ー南東軸)約8m×岩陰内高さ約0.2~1.2m
	工法 地表から大きく露出している石灰岩の岩盤をそのまま利用し、地面を少し掘り下げて整地。岩陰中央部に石で囲う墓室がある。
	天井 露出している石灰岩の岩盤をそのまま利用。
	床 旧表土(III層)直上を利用。
	墓口 閉じていない。 墓口の方位:北東
人骨・遺物 出土状況	岩陰内から大量に人骨が検出され、釘も出土していることから木棺を使用していたと思われる。 岩陰内右:人骨は原位置を保っているものが見られる。人骨にともなう遺物は状態が良い。 岩陰内中央:1個の沖縄産無釉陶器(壺)を二つに分けて、二つとも納骨器転用品として使用している。 岩陰左:人骨が散在していることから、合葬されたものと思われる。
葬法分類	岩陰内右:一次葬(I類A) 岩陰内中央:二次葬(II類B-b) 岩陰内左:二次葬(II類C)
砂敷(1d層)	岩陰中央部の岩陰内から岩陰外にかけて二カ所砂に敷かれており、庭を形成していると思われる。
時期	近世～近・現代
備考	岩陰の外に、沖縄産無釉陶器の破片が多く散在している。

第4表 1号墓遺物出土状況

出土地 種類	岩陰内 床面													岩陰外 表土					合計
	転用 縦骨器	沖縄產 施釉陶器	沖縄產 無釉陶器	染付	白磁	珊瑚釉	施釉 陶器	肥前系 染付	本土產 古・現代 磁器	金属 製品	ガラス 製品	小計	沖縄產 施釉陶器	沖縄產 無釉陶器	金属 製品	陶質	小計		
甌	I類 A 無文		3									3				0	3		
	A a 無文		1									1	1			1	2		
	A b		1									1				0	1		
	分類なし		2									2				0	2		
	B a		1									1	1			1	2		
	B b		1									1				0	1		
	c		1									1				0	1		
	分類なし			5				1	4			10				0	10		
	II類 A											0	1			1	1		
	分類なし								2			2				0	2		
小碗	II類 2 B		1									1				0	1		
小皿												1				0	1		
杯					1						3	4				0	4		
小杯						1						1					0	1	
甌	I類 A		1									1				0	1		
	B		2									2				0	2		
	A		1									1				0	1		
	B		2									2				0	2		
	V類 A		1									1	1			1	2		
	VII類 A	2	1									3				0	3		
	分類なし		9					1				10				6	16		
瓶	II類 I 無文		1									1				0	1		
	VII類 I											0	1			1	1		
	IX類		1									1				0	1		
	分類なし		1					1				2				0	2		
酒器	I類 I 有文		1									1				0	1		
火取			1									1				0	1		
煙管	雁首										2	2				0	2		
	雁首か										1	1				0	1		
	吸口										2	2				0	2		
	II類										1	1				0	1		
簪	III類										1	1				0	1		
	完形										25	25				0	25		
	破片	頭有り									16	16		1	1	17			
	頭無し										57	57		2	2	59			
用途不明											8	8			3	3	11		
ガラス瓶											6	6				0	6		
近代鏡											0			1	1	1			
合計	Z	16	17	5	1	1	1	2	10	113	6	174	4	8	6	1	19	193	





墓全景〔東より〕



岩陰内：人骨・遺物出土状況〔北より〕



岩陰内：人骨・遺物出土状況①-1〔北東より〕

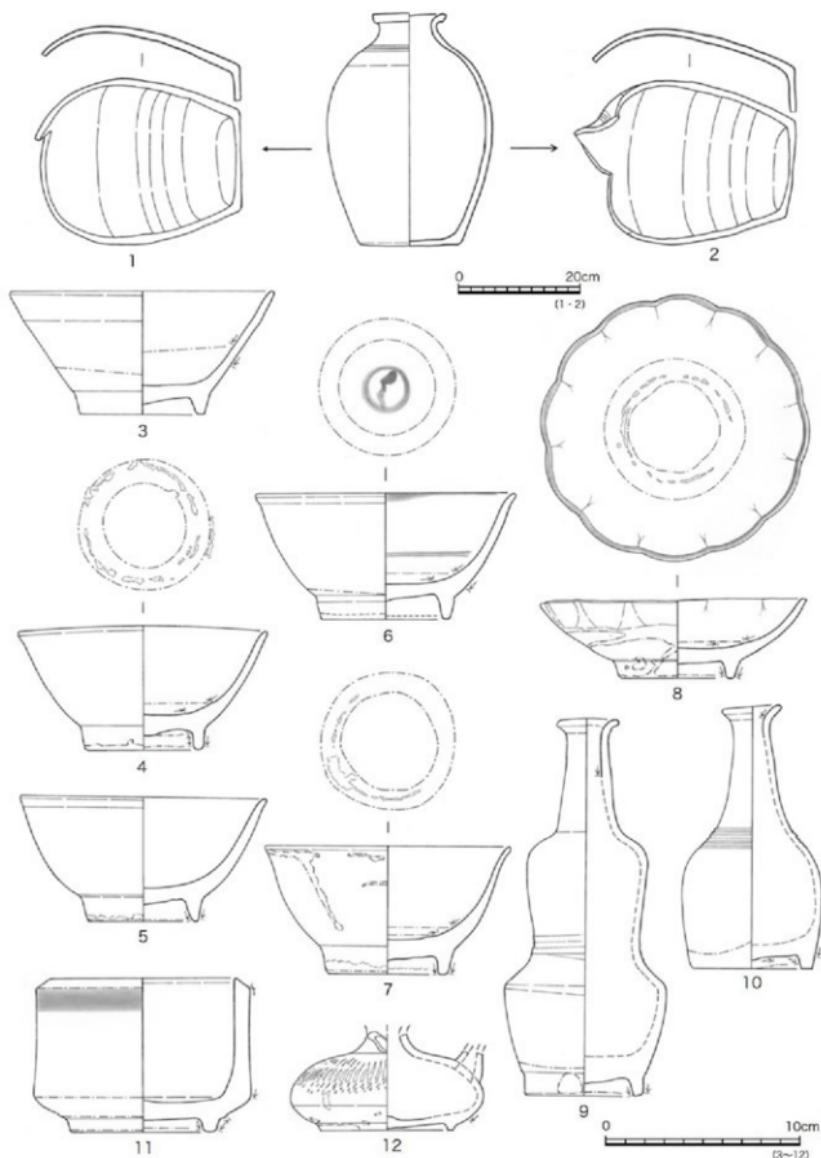


岩陰内：人骨・遺物出土状況①-2〔北東より〕



岩陰内：人骨・遺物出土状況①-3〔北西より〕

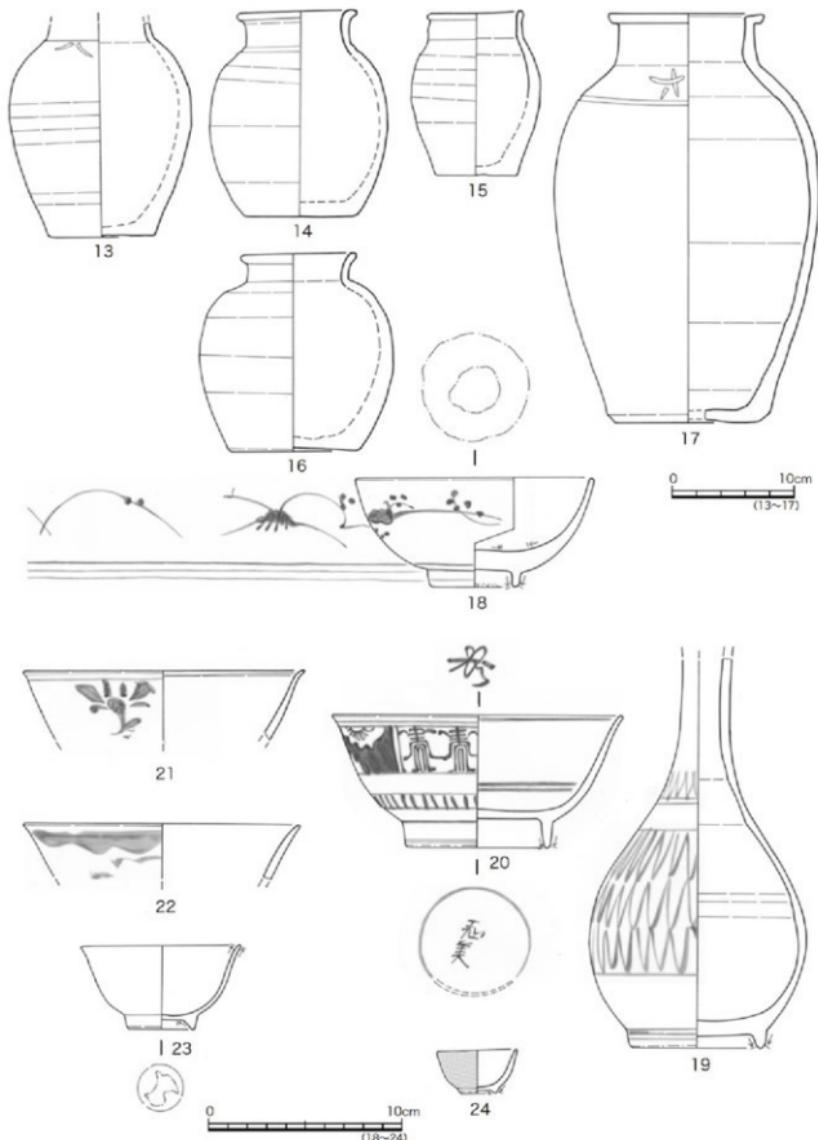
図版4 1号墓(2)



第9図 1号墓出土遺物① 転用藏骨器（1・2）、沖縄産施釉陶器（3～12）



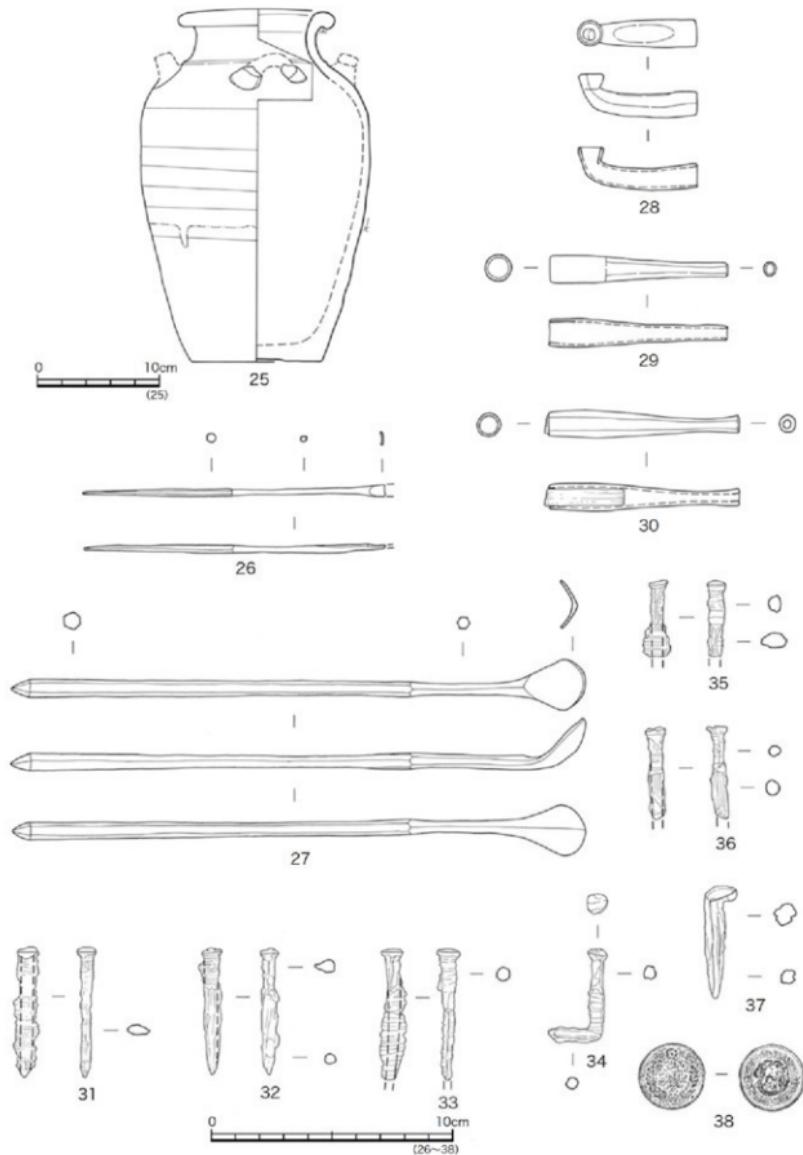
图版5 1号墓出土遗物①



第10図 1号墓出土遺物② 沖縄産無釉陶器（13～17）、染付（20～22）、白磁（23）、瑠璃釉（24）、肥前系染付（18・19）



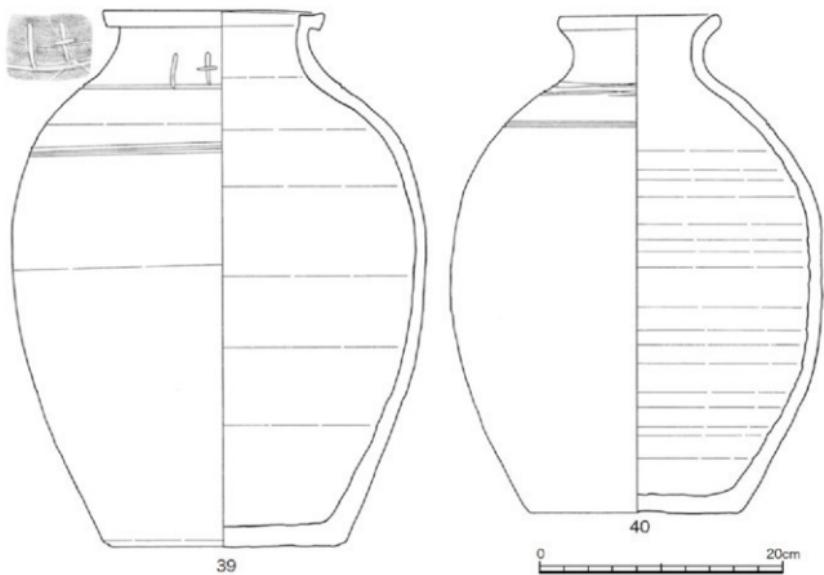
図版6 1号墓出土遺物②



第11図 1号墓出土遺物③ タイ産褐釉陶器(25)、煙管(28~30)、簪(26・27)、釘(31~37)、錢貨(38)



图版7 1号墓出土遗物③



第12図 1号墓出土遺物④ 沖縄産無釉陶器



図版8 1号墓出土遺物④

第5表a 1号墓出土遺物観察一覧

単位: cm

挿図番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径 / 長さ 器高 / 幅 底径 / 厚さ	分類	観察所見	出土地
第9 図・ 図版 5	転用 蔵骨器	1	壺	肩~底	— 33.8 16.0	VII-A	沖縄産無釉陶器の転用蔵骨器である。1つの壺を割り、2つの蔵骨器として転用している。素地は赤褐色で、微粒子。	岩陰内 床面
		2			— 36.1 16.0	"	"	
	沖縄産 施釉陶器	3	碗	口~底	13.6 6.3 6.4	I-A	灰釉。釉色は濃緑灰色で、濃淡のムラがある。素地にはぶい橙色で、細粒子。	
		4			12.8 6.3 6.1	II-A a	白化粧に透明釉。縁釉だが、呪付けは釉剥ぎ。見込みは蛇目状に釉剥ぎ。細かい買入が見られる。呪付けにアルミニナが付着。素地は淡黄色で細粒子。	
		5			12.6 6.5 5.7	II-A b	白化粧に透明釉。縁釉がた、外底面は白化粧せず、透明釉のみ。細かい買入が見られる。呪付けにアルミニナが付着。見込みを蛇目状に釉剥ぎしないめずらしいタイプ。素地は灰色で細粒子。	
		6			13.4 6.5 6.6	II-B c	外表面は白釉。見込み中央に鉄釉で丸、体部に帯状の線を描く。見込みは蛇目状に釉剥ぎ。呪付けにアルミニナが付着。外底面に顯著なひび割れがある。	
		7			12.5 6.55 6.4	II-B b	外表面は光沢がない飴色釉で縁釉。内面は白化粧に透明釉。外面口縁部付近に光沢のある飴色釉を流し掛けする。見込みは蛇目状に釉剥ぎ。呪付けにアルミニナが付着。素地は白灰色で細粒子。7と同一の技法で制作されており、セット関係がある。	
		8			13.6 4.1 6.0	II-2 B	外表面は光沢がない飴色釉で縁釉。内面は白化粧に透明釉。外面口縁部付近に光沢のある飴色釉を流し掛けする。見込みは蛇目状に釉剥ぎ。呪付けにアルミニナが付着。素地は白灰色で細粒子。7と同一の技法で制作されており、セット関係がある。	
		9			3.2 19.35 6.1	II-1	無文。黒色釉を高台脇まで施す。外底面にも黒色釉を雜に塗る。腰のくびれ部に2条の太い沈圧線。素地にはぶい橙色で細粒子。	
	沖縄産 無釉陶器	10	瓶	口~底	3.05 13.45 6.2	IX	削りだし高台。呪付けは太い。褐色釉を底部付近まで施す。外底面にも褐色釉を雜に塗る。頸部と肩部の境界付近に7条の細い沈圧線。素地は明褐色で細粒子。	
		11			9.5 7.9 7.5	-	高台脇から大きく斜めに開き、屈曲して垂直に立ち上がる円筒形を呈する。口唇部は内側に向かって斜めに形成する。釉は外体部と高台の内外側面、外底部に白化粧で透明釉を施す。口縁部直下に須頭で太い帶状に線を描く。素地は淡橙色で微粒子。1号墓のみで確認。	
		12	火取	口~底	- - 6.8	I-1	白化粧に灰色釉を腰部まで施す。胴部に縱位の線彫文を細かく巡らせる。成形がとても丁寧。素地は灰色で微粒子。	
		13	壺	頭~底	- - 9.5	I-A	体部に明瞭な纏繩成形痕が残る。肩部に「ハ」の字様の判。素地は、明褐色で細粒子、大粒の砂粒が目立ち、外面に露出する。	岩陰内 床面
		14		口~底	10.55 8.2 9.9	I-B	口縁部をL字状に折り曲げる。寸胴。体部に明瞭な纏繩成形痕が残る。素地は微粒子。頸部と肩部の境界に2条の沈圧線を巡らせる。	
第10 図 図版 6	沖縄産 無釉陶器							

第5表 b 1号墓出土遺物観察一覧

単位: cm

捕団番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径 / 長さ 器高 / 幅 底径 / 厚さ	分類	観察所見	出土地
第10図・図版6	沖縄産 無釉陶器	15	壺	口～底	8.5 9.6 7.1	II-A	口縁部を玉縁状に肥厚させる。外面に繊維成形痕の凹凸が残る。素地は細粒子で微砂粒が混入する。	岩陰内 床面
		16			9.5 16.3 10.5	II-B	口縁部を僅かに玉縁状に肥厚させ、口唇部を舌状とする。寸胴。素地は細粒子で、大粒の砂粒が目立つ。	
		17			13.7 36.05 14.3	V-A	肩部に1条の沈圧線とその上に「大」字様の印がある。素地は赤褐色で微粒子。	
		18	碗	口～底	12.2 5.6 4.6	-	波佐見焼の丸形碗。通称くらわんか碗。1750年代～1770年代。腰部が丸く張り、口縁部が直口する。外面に折枝梅文。高台脇に二条、腰部に一条の團線が入る。全体に灰白色の釉が掛かる。見込みは蛇目釉剥ぎで、釉剥ぎ部に薄いアルミナを塗布。豊付けは釉剥ぎ。細かい貫入が入る。素地は灰色微粒子。	
	肥前系 染付	19	瓶	頸～底	- - 5.9	-	肥前産で、17世紀中頃～18世紀頃。外面頭部文様帶に鶴文、胴部文様帶に網目文が入る。外面頭部、胴部、高台脇に二条ずつ團線が入る。全体に白灰色の釉が掛かる。豊付けは釉剥ぎ。素地は灰白色微粒子。	
		20	碗	口～底	14.8 6.8 7.4	-	徳化窯系。高台脇が大きい。腰部は丸みを帯び、口縁部は弱く外反。文様は外面に寿字梅文花。腰部に簡略化された蓮瓣文。見込み中央に不明文。外底面に「和美」。両面口縁部・高台脇・外底面に一条ずつ、見込みに二条の團線が入る。外面高台下部に沈線が廻る。全体に青みを帯びた透明釉が掛かる。豊付けは釉剥ぎ。素地は灰白色微粒子。	
	染付	21			14.4 - -	-	口縁部は弱く外反。外面に簡略化された草花文(?)が掛かれていると思われる。明緑色の釉が掛かる。口唇部は口禿げ。素地は白黄色微粒子。	
		22			14.2 - -	-	徳化窯系。口縁部は弱く外反。外面に草花文。両面口縁部に一条ずつ團線が入る。青みを帯びた透明釉が掛かる。素地は灰白色微粒子。	
		23	杯	口～底	8.2 4.35 3.5	-	徳化窯系。型成形。腰部が丸みを帯び、口縁部は弱く外反。全体に透明釉が掛かる。口唇部は口禿げ。外底面を一部釉剥ぎ。素地は白色微粒子。	
第11図・図版7	白磁	24	小杯		4.15 2.3 1.9	-	型成形。口縁部は直口。外面のみ瑠璃釉、内面は透明釉が掛かる。口唇部は口禿げ。豊付けは釉剥ぎ。素地は白色微粒子。	岩陰内 床面
		25	壺	口～底	12.8 28.9 10.5	-	本古墓群で1点のみ確認されたタイ産褐釉陶器。褐釉を体部下方まで施す。肩部に4つの横耳が付く。頭部と肩部の境に1条の凸帯を付ける。素地は、暗灰色で砂粒を多く含む。	
	簪	26	-	破損	12.3 0.5 0.4	II	竿の断面は先端から6.2cmのところまで六角形。そこから耳かき(カブ)までは円形。重量4.5g。銅製。	
		27	-	完形	23.6 2.0 0.7	III	竿の断面は六角形で、先端から16.4cmの所で面が互い違いになり、竿幅は先端部に向かって若干太くなる。先端部は六角錐となる。重量50.6g。銅製。	

第5表c 1号墓出土遺物観察一覧

単位: cm

捕団番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径 / 長さ 器高 / 幅 底径 / 厚さ	分類	観察所見	出土地
第11図・ 図版7	煙管	28	樺首	完形	4.8 — —	—	火皿外径1.05cm、火皿内径0.8cm。羅字接続部外径0.95cm、羅字接続部内径0.7cm。重量9.4g。胴部は上面だけ平坦に形成し、断面で見ると半円形となる。火皿は緩やかなラッパ状。銅製	岩陰内 床面
		29	吸口	完形	7.3 — —	—	吸口外径0.6cm、吸口内径0.4cm。羅字接続部外径1.1cm、羅字接続部内径0.85cm。重量10.0g。胴部は段を有して狭まる。銅製。	岩陰内 床面(転用器2内)
		30			7.8 — —	—	吸口外径0.7cm、吸口内径0.3cm。羅字接続部外径0.9cm、羅字接続部内径0.7cm。重量13.7g。内部には竹と思われる羅字が残存。吸口は若干ラッパ状に広がる。銅製	
	釘 (丸釘)	31	—	完形	5.4 — —	—	頭部径0.9cm、胴部径0.5cm、重量2.7g。頭部から先端部付近まで横方向に走る木質が付着。	
		32			5.2 — —	—	頭部径0.8cm、胴部径0.6cm、重量3.3g。頭部から約1.5cmまで横方向、そこから先端まで縦方向に走る木質が付着。板材の組み合わせに使用か。	
		33	—	破損 (頭付き)	5.2 — —	—	頭部径0.8cm、胴部径0.6cm、重量2.9g。先端部欠損。頭部から約1.5cmまで横方向、そこから先端まで同じく横方向に走る木質が付着するが、上面から見ると角度が異なる。	
		34			3.8 — —	—	頭部径0.8cm、胴部径0.5cm、重量3.2g。頭部から約3.8cmで下部をL字に曲げる。頭部から約1.5cmまで横方向、そこから先端まで同じく横方向に走る木質が付着するが、上面からみると角度が異なる。	
		35	—	破損 (頭付き)	3.15 — —	—	頭部径0.8cm、胴部径0.6cm、重量2.0g。胴部途中から先端部まで欠損。付着する木質はともに横方向に走る木質が2個付着。	
		36			3.8 — —	—	頭部径0.8cm、胴部径0.5cm、重量2.3g。胴部途中から先端部まで欠損、付着する木質は頭部から約1.5cmまで横方向、そこから下部は縦方向に走る。	
	釘 (角釘)	37	—	完形	4.6 — —	—	頭部径1.4cm、胴部径0.8cm、重量6.0g。頭部から胴部はL字状を呈し、頭部の上面観は方形である。胴部は縦方向にヒビ割れ数箇所走る。縦方向に走る木質が付着。	
	錢貨	38	—	—	— — —	—	竜1銭銅貨。明治十八年発行 重量6.5g。	岩陰外 表土
第12図 図版8	沖縄産 無釉陶器	39	壺	口～底	18.2 44.1 19.9	V-A	肩部に2条の沈圓線。頭部下方に1条の沈圓線。頭部に不明の判がある。素地は赤褐色で微粒子。	岩陰外 表土
		40			13.3 41.0 17.2	VII-B	肩部に2条、頭部下方に2条の沈圓線。素地は明赤褐色で、微粒子。細砂粒が混入し、目立つ。	

第2節 2号墓

1. 遺構

観察一覧（第6表）に示す。

2. 出土遺物

墓室内外合わせて262点の遺物が確認され、その大半は墓室からである。種類は沖縄産施釉陶器、本土産近現代磁器、金属製品、プラスチック製品等がある。遺物の大半は墓室内から確認された針である。



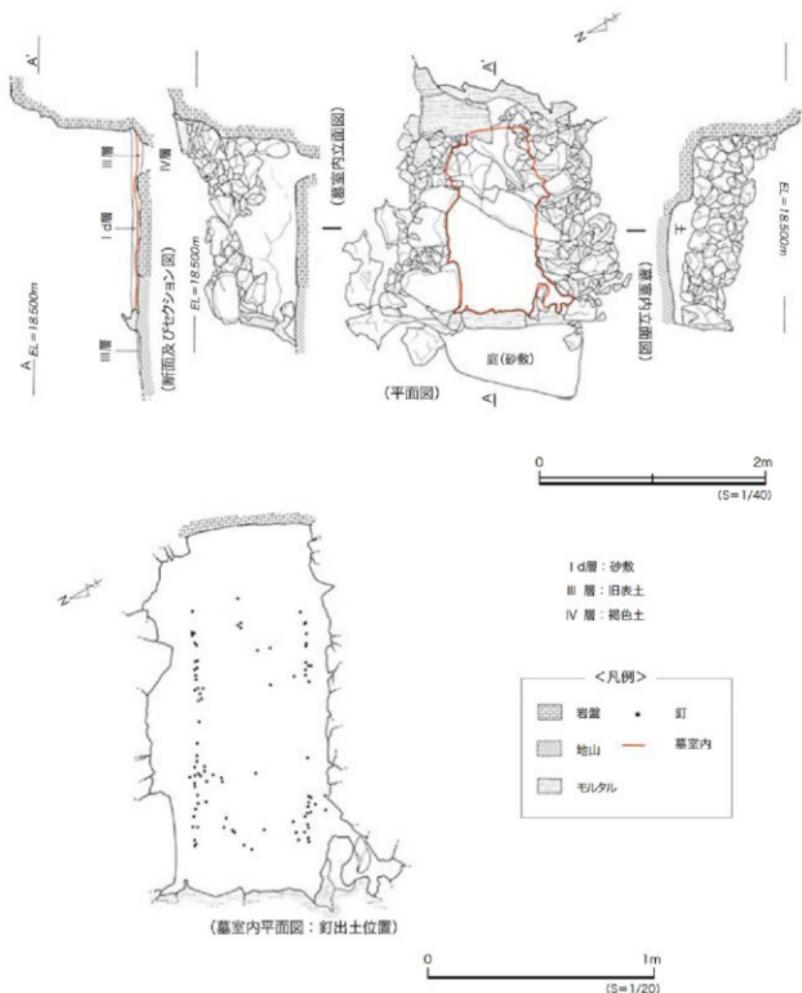
図版9 2号墓出土遺物集合

第6表 2号墓観察一覧

挿図番号	第13表
図版番号	図版10
立地	調査区東側の石灰岩の岩盤が広範囲に露出している緩やかな斜面地。
構造	分類 モルタルが掛かる墓(II類A ii)外觀は亀甲墓に似る。
	規模 縦(北西-南東軸)約2.1m×横(北東-南西軸)約1.9m 墓室内: 縦約1.6m×横約0.8m×高さ約0.7~0.9m(残存状況から類推)
	工法 地表から大きく露している石灰岩の岩盤を、墓室内にかかる部分を削り、地面を少し掘り下げて整地。石積みで補足する。 墓室内左壁: 岩盤を削平して壁面を形成し、その上に石積みで補足。 墓室内右壁: 地面の上にそのまま石積み。
	天井 蓋石(石灰岩)を乗せていたと思われ、その上からモルタルを掛けている。
	床 旧表土(Ⅲ層)直上を利用。
	墓口 石積みで閉じて、その上からモルタルを掛けていると思われる。 墓口の方位: 北西
	人骨・遺物 出土状況 墓室内から人骨・遺物がほとんど出土しないことから、持ち主により移転されていると思われる。 墓室内から釘が大量に出土していることから、木棺を使用していたと思われ、最低でも59個(完形品5点・頭部付破損54点)の釘を使用している。 釘の出土位置から、木棺の大きさがおおまかではあるが、把握出来る状態で出土した。長軸約1m×短軸約0.5m(第13図-1出土地図参考)。
葬法分類	一次葬(I類A)
砂敷(Ⅰd層)	墓室内から墓口前に砂が敷かれている。墓口前には砂敷で庭を形成。
時期	近・現代
備考	墓の破損状況が著しい。 岩盤続きの西部に3号墓がある。

第7表 2号墓遺物出土状況

出土地 種類 箇種・分類	室内 床面					室外 表土			底	合計
	沖縄産 施釉陶器	本土産 近・現代 磁器	金属 製品	鉄製 品	小計	本土産 近・現代 磁器	プラスチック 製品	小計		
磯					0	1		1	1	2
小甕	B C 分類なし	1			1			0		1
小皿			1		1			2		2
瓶				0				0		1
煙管	吸口			1	1			0		1
簪	B類			1	1			0		1
釘	完品	0	0	5	5			0		5
	破片	遺有り 遺無し		54 166	54 166			0		54 166
用途不明				25	25			0		25
近代鉄				3	3			0		3
合計		1	1	252	3 257	3	1	4	1	262



第13図 2号墓



墓全景 [北西より]



墓庭 (敷砂) 検出状況 [南西より]



墓室内：釘出土位置 [北西より]



墓室内：人骨・遺物出土状況 [北西より]

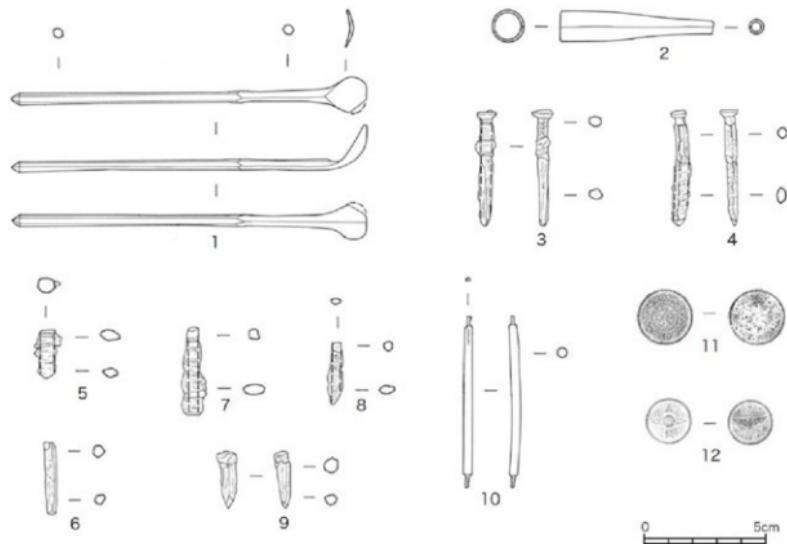


調査前状況 [北西より]

第8表 2号墓出土遺物観察一覧

単位: cm

排列番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	長さ 幅 厚さ	分類	観察所見	出土地	
第14 図・ 図版 11	釘 (丸釘)	簪	1	—	完形	14.7 1.5 0.45	III	重量14.0g。竿の断面は六角形で、先端から9.6cmの所で面が互い違いになり、竿幅は先端部に向かって若干太くなる。先端部は六角錐となる。カブは一部欠損している。全体に赤鉛付着。銅製。	室内 床面
		煙管	2	吸口	完形	6.2 — —	—	吸口外径0.6cm、吸口内径0.4cm、羅字接続部外径1.3cm、羅字接続部内径1.1cm。重量11.8g。胸部は羅字接続部から2.2cmの所まで何重もの沈線が走る。胸部には接合痕が残り、吸口はほぼ直口。銅製。	
		3	—	完形	4.7 — —	—	頭部径0.8cm、胸部径0.6cm。重量1.8g。頭部から約1.9cmまで横方向、そこから先端まで縱方向に走る木質がそれぞれ付着。		
		4	—		4.75 — —	—	頭部径0.7cm、胸部径0.4cm、重量2.2g。頭部から約1.9cmまで木質付着せず。そこから先端までは横方向に走る木質が付着。胸部は緩やかに屈曲。		
		5	—	破損 (頭付き) 破損 (頭なし)	2.0 — —	—	頭部径0.6cm、胸部径0.5cm、重量0.9g。胸部途中から先端まで欠損。頭部から横方向に走る木質が付着。板材の組み合わせ部に使用したもので、板材が朽ちる際に折れたものか。		
		6	—		3.0 — —	—	胸部径0.4cm、重量1.3g。頭部欠損。縱方向に走る木質が一面に付着。5と同じく板材の組み合わせ部に使用したもので、板材が朽ちる際に折れたものか。		
		7	—		3.6 — —	—	胸部径0.4cm、重量1.7g。頭部と先端部欠損。横方向に走る木質が一面に付着。		
		8	—		2.6 — —	—	胸部径0.3cm、重量0.6g。頭部欠損。木質がやや斜めに走る。		
		9	—		2.55 — —	—	胸部径0.55cm、重量0.8g。頭部から胸部途中まで欠損。胸部途中から0.5cmまで横方向、そこから先端まで縱方向に走る木質がそれぞれ付着。		
		10	—		7.0 — —	—	重量11g。銅線か。6.2cmに亘ってゴム製と思われる被覆で覆われ、両端に銅線が剥き出しえどなる。銅線の一方はやや長方形の断面をなし、もう一方はねじれている。		
		11	—		— — —	—	桐1錢青銅貨。鋸が齧食し、発行年の読み取りは不可。重量3.6g。		
		12	—		— — —	—	5錢アルミ貨。昭和十七年発行。重量1.0g。		



第14図 2号墓出土遺物 煙管(2)、簪(1)、釘(3~9)、金属製品(10)、錢貨(11・12)



図版11 2号墓出土遺物

第3節 3号墓

1. 遺構

観察一覧（第9表）に示す。

2. 出土遺物

墓室外の表土から9点の遺物が確認された。種類は本土産近現代磁器とビール瓶等のガラス製品である。



図版12 3号墓出土遺物集合

第9表 3号墓観察一覧

挿図番号	—
図版番号	図版13
立地	調査区東側の石灰岩の岩盤が広範囲に露出している斜面地。
構造	分類 挖込み墓（V類A-i）
	規模 小規模。縦（東—西軸）約0.65m×横（北—南軸）約0.5m×墓室内高さ約0.5m（残存状況から類推）
	工法 地表から大きく露岡している石灰岩の岩盤の一部を雜ではあるが、少し掘込み、墓室内を形成。
	天井 掘り込まれている岩盤。
	床 掘り込まれている岩盤。
	墓口 残存状況から石積みで閉じていたと思われる。 墓口の方位：北西
人骨・遺物 出土状況	使用されなくなった墓か、持ち主によって人骨・遺物が移転された墓。 墓室内：出土遺物無し。 墓室外：近・現代の遺物が出土。
葬法分類	二次葬（II類D）
砂敷（1d層）	無し。
時期	近・現代
備考	墓の破損状況が著しい。 岩盤続きの東部に2号墓がある。

第10表 3号墓遺物一覧

出土地	室外 表土			
種類	本土産近・現代磁器		ガラス製品	
器種	碗	小碗	瓶	ガラス瓶
個数	2	2	1	4



遠景（左奥：2号墓・右：3号墓）
[北より]



全景 [北西より]



完掘状況 [北西より]

図版 13 3号墓

第4節 4号墓

1. 遺構

観察一覧（第11表）に示す。

2. 出土遺物

墓室内外合わせて25点の遺物が確認された。種類は沖縄産陶器、本土産近現代磁器、金属製品、錢貨等がある。大半は墓室外から確認された本土産近現代磁器である。



図版14 4号墓出土遺物集合

第11表 4号墓観察一覧

掲番号	—
図版番号	図版15
立地	調査区東側の石灰岩の岩盤が露出している斜面地。
構造	モルタルの掛けかる墓（II類B1）外觀は亀甲墓に似る。
	規模 縱(北西-南東軸)約2.3m×横(北東-南西軸)約2.1m 墓室内: 縦約1.4m横約0.65m×高さ不明
	地表から大きく露出している石灰岩の岩盤を、墓室内にかめる部分を削り、地面を少し掘り下げて整地。 開口を石積みで補足する。
	墓室内奥・右壁: 岩盤を削平して壁面を形成し、その上に石積みで補足。 墓室内左壁: 奥側は岩盤を削平して壁面を形成し、その上に右積み。手前側は地面から石積み。
	天井 残存状況から、煉瓦を積んで、その上からモルタルを掛けている。
	床 旧表土（III層）直上を利用。
墓口	残存状況から石積みで閉じ、その上からモルタルを掛けていたと思われる。 墓口方位: 北西
人骨・遺物 出土状況	墓室内から人骨・遺物がほとんど出土しないことから、持ち主により移転されていると思われる。 釘が少量だが、出土していることから、木棺を使用していたと思われる。
葬法分類	一次葬（I類A）
砂敷（I d層）	墓室内から墓口前に敷かれている。墓口前に砂を敷いて、庭を形成。
時期	近・現代
備考	墓の破損状況が著しい。

第12表 4号墓遺物出土状況

出土地 種類 器種・分類	室内 床面				室外 表土				底	合計
	沖縄產 無釉陶器	金屬 製品	銭貨	小計	沖縄產 無釉陶器	沖縄產 無釉陶器	中國產 不明磁器	本土產 近・現代 磁器		
碗				0					1	1
小瓶				0					2	2
杯				0					0	1
壺	VII類 A			0					1	1
	分類なし			0	1	2			3	3
瓶				0			2	6	8	8
蓋	1		1						0	1
香炉				0				1	1	1
煙管	烟首	1	1						0	1
	吸口	1	1						0	1
釘	頭有り	1	1						0	1
	頭無し	1	1						0	1
近代鉢				3	3				0	3
合計	1	4	3	8	1	3	2	10	16	1



全景〔北西より〕



墓室内：遺物出土状況〔北西より〕



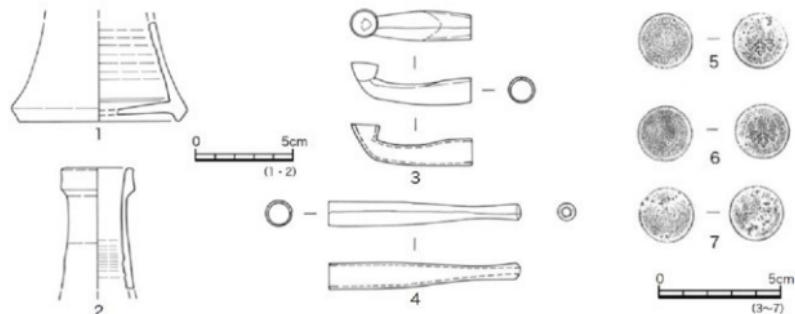
墓室内：煙管出土状況〔北東より〕

図版15 4号墓

第13表 4号墓出土遺物観察一覧

単位:cm

拂岡番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径/長さ 器高/幅 底径/厚さ	観察所見	出土地
第15図 ・ 図版 16	中国産 磁器	1	瓶	底	— — 9.0	不明磁器。底部から胴部に向かって窄まる。内面に撻轆痕が見られる。素地は灰白色微粒子。	室外 表土
		2		口	3.7 — —	不明磁器。内面口縁部付近にのみ白濁した軸が掛かる。内面頸部に撻轆痕が見られる。素地は灰白色微粒子。上の1と同一個体か。	
		3	雁首	完形	4.95	火皿外径1.1cm、火皿内径0.9cm。羅宇接続部外径1.0cm、羅宇接続部内径0.85cm、重量6.7g。胴部は上面だけ平坦に形成し、断面で見ると半円形となる。火皿は緩やかなラッパ状。銅製。	
	煙管	4	吸口	完形	7.85	吸口外径0.7cm、吸口内径0.25cm。羅宇接続部外径1.1cm、羅宇接続部内径0.85cm、重量7.9g。接合痕が見られ、羅宇接続部から吸口に向かって、約3cm僅かに剥離している。吸口は若干ラッパ状に広がる。銅製。	室内 床面
		5	—	—	— — —	桐1錢青銅貨。大正九年。重量3.6g	
	銭貨	6	—	—	— — —	桐1錢青銅貨。大正十年。重量3.6g	室内 床面
		7	—	—	— — —	桐1錢青銅貨。大正〇年。年号の□の部分は鉛膨れで読み取り不可。重量3.6g	



第15図 4号墓出土遺物 中国産磁器(1・2)、煙管(3・4)、銭貨(5~7)



図版16 4号墓出土遺物

第5節 5号墓

1. 遺構

観察一覧（第14表）に示す。

2. 出土遺物

墓室内外で168点の遺物が確認された。種類は沖縄産陶器、本土産近現代磁器、金属製品、ガラス製品等がある。沖縄産施釉陶器の碗IV類はこの古墓から確認されただけである。



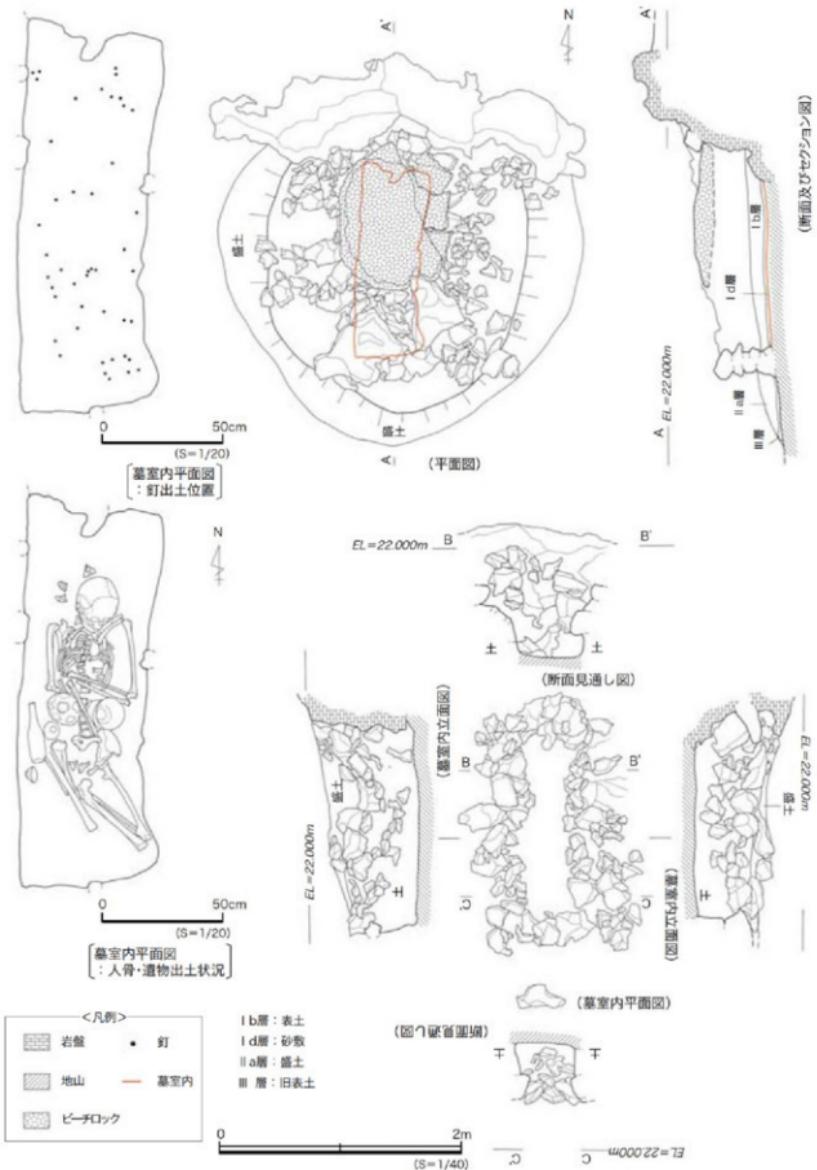
図版17 5号墓出土遺物集合

第14表 5号墓観察一覧

挿図番号	第16図
図版番号	図版18
立地	調査区東側の石灰岩の岩盤が露出している斜面地。
構造	半地下式石積み墓(IV類)
	規模 縦(北-南軸)約2.6m×横(東-西軸)約3m 墓室内: 縦約1.5m×横約0.5m×深さ約0.3~0.4m
	地表から露出している石灰岩の岩盤に沿って地山まで深く掘り下げて整地。木棺を収めた後、墓室内の隙間に長方形形状の石積み。石積みの周りは盛土で固めている。 墓室内北壁: 岩盤を利用して、石積みで補足。 墓室内東・西・南壁: 地面上の上に石積みをし、その石積みを盛土で補強している。
	天井 大きな蓋石(ビーチロック)で墓室を閉じる。
	床 地山直上を利用。
	墓口 墓口が天井しかないので、蓋石の位置にあたる。
	人骨・遺物 出土状況 墓室内から人骨が一体分出土。供献品として、本土産近・現代磁器3点、沖縄産施釉陶器2点、ガラス瓶1点。 人骨の周囲から釘が出土していることから、木棺を使用していたと思われる。 木棺の大きさは、墓室内の大きさとほぼ一概と思われる。 木棺には最低でも長さの異なる3種類の釘を使用。 人骨の検出状況から、頭位が北向きで、首から上を木棺にもたれかけさせるようにし、足は屈折させて収めていたと思われる。
葬法分類	一次葬(I類A)
砂敷(I d層)	墓室内に薄くだが、砂が敷かれている。
時期	近・現代
備考	

第15表 5号墓遺物出土状況

出土地 種類 器種・分類	室内 床面					室外 表土					合計
	沖縄産 施釉陶器	本土産 近・現代 磁器	金属 製品	ガラス 製品	小計	沖縄産 施釉陶器	沖縄産 無施釉陶器	ガラス 製品	小計		
碗 IV類 有文	2				2	1			1	3	
小碗		1			1				0	1	
皿		1			1				0	1	
小杯		1			1				0	1	
壺					0		16		16	16	
釘	完品		22	22					0	22	
	頭有り		24	24					0	24	
	頭無し		78	78					0	78	
用途不明			20	20					0	20	
ガラス瓶				1	1			1	1	2	
合計	2	3	144	1	150	1	16	1	18	168	



第16図 5号墓



墓全景 [南より]



蓋石 (ビーチロック) [南より]



墓室内：人骨・遺物出土状況 [西より]



墓内：砂敷検出状況 [西より]



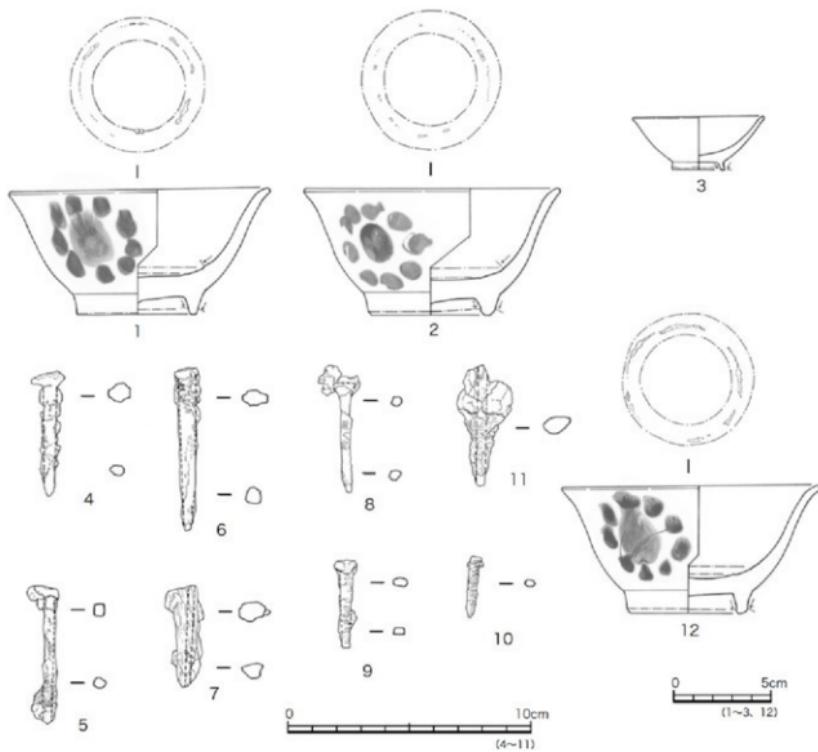
墓室内：完掘状況 [西より]

図版 18 5号墓

第16表 5号墓出土遺物觀察一覧

単位:cm

検査番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径/長さ 器高/幅 底径/厚さ	分類	観察所見	出土地
第17 図 ・ 図版 19	沖縄産 施釉陶器	1	碗	口～底	13.4 6.5 6.1	IV	白化粧に透明釉で総釉。見込みは蛇目状に釉剥ぎ。疊付けにはアルミナが付着。外体面に船色釉と呉須で印花文を3つ施す。素地は鈍い橙色で微粒子。2・12と同一製品。	室内 床面
					13.1 6.5 6.4		白化粧に透明釉で総釉。見込みは蛇目状に釉剥ぎ。疊付けにはアルミナが付着。外体面に船色釉と呉須で印花文を3つ施す。素地は鈍い橙色で微粒子。2・12と同一製品。	
	本土産 近・現代 磁器	3	杯	口～底	6.75 2.7 2.7	—	瀬戸・美濃産と思われる。型成形。高台脇から口縁部にかけて逆ハの字状に開く。高台はハの字状に少し開く。口縁部は弱く外反する。全体に白黄色の釉が掛かる。疊付けは釉剥ぎ。素地は白色微粒子。	
	釘 (丸釘)	4	—	完形	5.1 — —	—	頭部径0.8cm、胸部径0.55cm、重量2.7g。頭部から先端部付近まで横方向に走る木質が付着。	
		5	—		5.7 — —	—	頭部径0.7cm、胸部径0.45cm、重量3.3g。頭部から約3.0cmまで横方向、そこから先端まで同じく横方向に走る木質が付着するが、上面から見ると角度が異なる。木材の付着する長さから厚さ約3cmの板材を使用か。	
		6	—		6.7 — —	—	頭部径0.9cm、胸部径0.7cm。頭部から約2.9cmまで横方向、重量5.0g。そこから先端まで縱方向にそれぞれ走る木質が付着。5号墓出土の釘では最長。木質の付着する長さから5と同じ板材に打ち込まれたものか。	
		7	—	破損 (頭なし)	4.2 — —	—	胸部径0.45cm、重量4.7g。頭部欠損。縱方向に走る木質が厚めに付着。	
		8	—	完形	4.7 — —	—	頭部径0.8cm、胸部径0.45cm、重量2.5g。頭部から先端まで横方向に走る木質が付着。	
		9	—	破損 (頭付き)	3.6 — —	—	頭部径0.7cm、胸部径0.4cm、重量1.3g。胸部途中から先端まで欠損。頭部から横方向に走る木質が付着。	
		10	—	破損 (頭なし)	2.5 — —	—	胸部径0.4cm、重量0.5g。頭部欠損。先端まで横方向に走る木質が付着。	
		11	—		4.9 — —	—	胸部径0.4cm、重量5.7g。頭部欠損。先端まで縱方向に走る木質が付着。	
	沖縄産 施釉陶器	12	碗	口～底	13.2 6.6 6.1	IV	白化粧に透明釉で総釉。見込みは蛇目状に釉剥ぎ。疊付けにはアルミナが付着。外体面に船色釉と呉須で印花文を3つ施す。素地は鈍い橙色で微粒子。1・2と同一製品。	室外 表土



第17図 5号墓出土遺物 沖縄産施釉陶器（1・2・12）、本土産近・現代磁器（3）、釘（4～11）



図版19 5号墓出土遺物

第6節 6号墓

1. 遺構

観察一覧（第18表）に示す。

2. 出土遺物

墓室内外で21点の遺物が確認された。種類は沖縄産施釉陶器、中国産磁器、陶質土器、本土産近現代磁器、金属製品、錢貨、ガラス製品がある。大半は墓室外から確認され、本土産近現代磁器が主体を占める。陶質土器は泥軸が掛けられて特徴的であり、転用藏骨器として利用された可能性がある。本遺跡から1点のみ確認された。



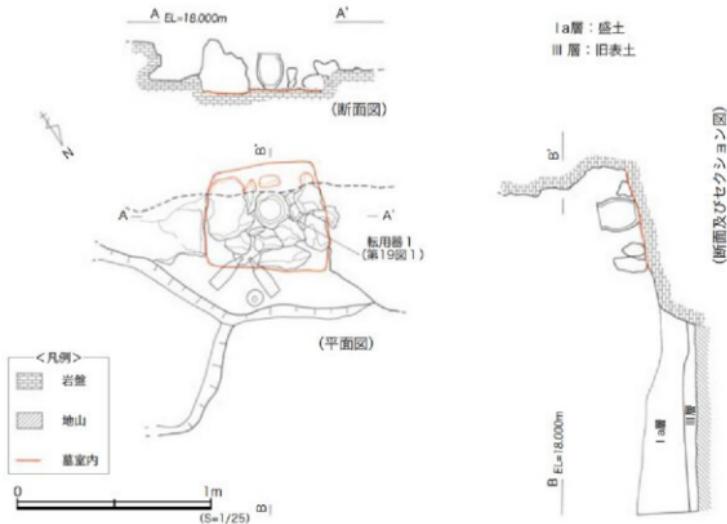
図版20 6号墓出土遺物集合

第17表 6号墓観察一覧

挿図番号	第18図
図版番号	図版21
立地	調査区東側の岩盤が露出している傾斜地
構造	分類 挖り込み墓(V類A-i)
	規模 縦(北西—南東軸)約0.8m、横(北東—南西軸)約0.7mで小規模。
	工法 石灰岩の岩盤をほぼ方形に掘り込み、墓室を形成。墓室の中心には転用藏骨器と思われる陶質土器が置かれ、藏骨器の周囲を石灰岩礫で埋う。
	天井 何で閉じられていたかは不明。
	床 岩盤を削平し、床面を形成。
	墓口 墓口前には石灰岩礫が散乱しており、これらの礫は本来、天井や墓口を塞ぐものとして使用されたものか。墓口の方位:北東
人骨・遺物 出土状況	転用藏骨器内からは人骨は検出されず、周囲の石圓いの下からは本土産近現代磁器やガラス瓶が出土した。以上のことから、墓を移転する際に持ち主によって本来使用していた形から改変されたものと思われる。
葬法分類	転用藏骨器をそのまま使用(II類B-A)
砂敷	なし。
時期	近・現代
備考	墓外は現代の盛土が施されていたが、周辺を見ると盛土は広範囲で、墓の規模を考えると構築時のものとは考えにくい。

第18表 6号墓遺物出土状況

出土地 種類 器種・分類	室内 床面			室外 表土						庭	合計	
	転用 藏骨器	金属 製品	小計	沖縄産 施釉陶器	染付	白磁	本土産 近・現代 磁器	ガラス 製品	錢貨	小計		
碗	0		0				2			2		2
小碗	0		0			1			1		1	
筒碗	0		0			1			1		1	
皿	0		0			1			1		1	
小杯	0		0	1	1					2		2
猪口	0		0			1			1		1	
甕	1	1	2						0		1	
急須	0		0			2			2		2	
袋物	0		0			1			1		1	
香炉	0		0	1					1		1	
鉄片	1	1	2						0	1	2	
ガラス瓶	0		0				4		4		4	
近代罐	0		0						2	2	2	
合計	1	1	2	1	1	1	9	4	2	18	1	21



第18図 6号墓

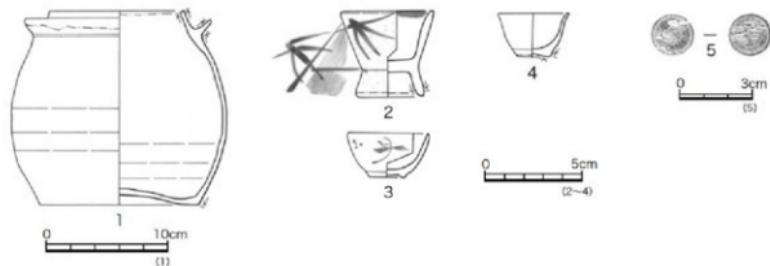


図版21 6号墓

第19表 6号墓出土遺物觀察一覧

単位:cm

擲出番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察所見	出土地
第19 図 ・ 図版 22	転用 藏骨器	1	壺	口～底	10.9 16.0 12.95	底部から丸みを帯びて立ち上がり、奥部中央がもっとも膨らみ、口縁部に内傾する。底部は上底状を呈する。胴部中央付近に轆轤成形痕が顕著に残る。口縁部直下に内傾する蓋受けが付く。内外面に泥袖が掛けられる。素地は明赤褐色で微粒子。	室内 床面
	本土產 近・現代 磁器	2	猪口	口～底	4.8 4.4 3.5	高台が高く、ハの字に開く。外面に篆文が描かれている。全体に暗灰黄色の釉が、口唇部には銷釉が掛かる。疊付けは釉剥ぎ。素地は、灰白色微粒子で、黒い粒が混じる。	室外 表土
	染付	3	小杯	口～底	4.2 2.3 2.0	徳化窯系。型成形。直口口縁。外面に草花文と不明文が交互に三つ折り配置。全体に青味を帯びた透明釉が掛かる。素地は観察出来ず。	
	白磁	4	小杯	口～底	3.65 2.3 1.8	徳化窯系。型成形。口縁部が弱く外反する。全体に白濁した釉が掛かる。疊付けは釉剥ぎ。素地は白色微粒子。	
	錢貨	5	—	—	— — —	カラス1銭アルミニウム貨。直径17.5mm、重量0.9g。昭和十〇〇。表面は磨耗し、一部欠損している箇所あり。	



第19図 6号墓出土遺物 染付(3)、白磁(4)、本土産近・現代磁器(2) 転用藏骨器(1)、錢貨(5)



図版22 6号墓出土遺物

第7節 7号墓

1. 遺構

観察一覧（第20表）に示す。

2. 出土遺物

墓室内外で218点の遺物が確認された。種類は沖縄産施釉陶器、本土産近現代磁器、金属製品、銭貨、ガラス製品、プラスチック製品、木棺片等がある。遺物の大半は釘で、その他は本土産近現代磁器が目立つ。プラスチック製品の櫛や髪留め（？）もめずらしい。



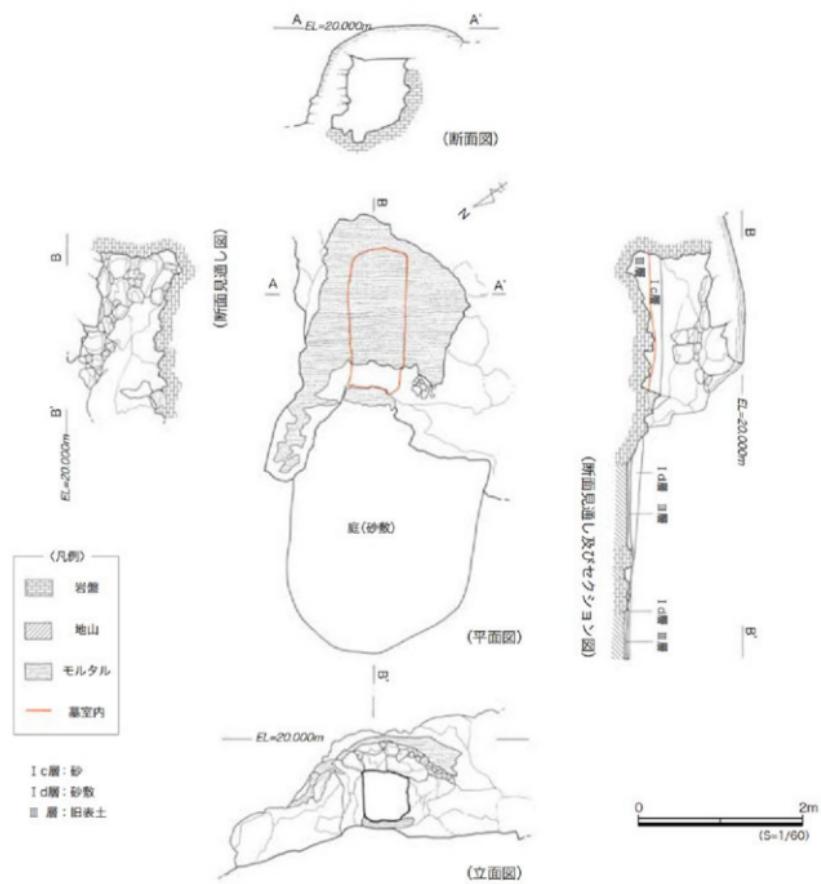
図版23 7号墓出土遺物集合

第20表 7号墓観察一覧

挿図番号	第20図
図版番号	図版24・25
立地	調査区北側の石灰岩の岩盤が広範囲に露出している斜面地。
構造	モルタルの掛かる墓（II類B i）外観は亀甲墓に似る。
	縦（西北—南東軸）約2.4m×横（北東—南西軸）約1.9m 墓室内：縦約1.7m×横約0.7m×高さ約0.8m（残存状況から類推）
	地表から大きく露出している石灰岩の岩盤を、墓室内にかかる部分を削り、地面を少し掘り下げて整地。墓室内の間を石積みで補足する。
	墓室内奥壁：岩盤を削平して壁面を形成。 墓室内右・左壁：岩盤を削平して壁面を形成し、その上に石積みで補足。
	天井 石積みの上からモルタルを掛けている。
床	旧表土（III層）直上を利用。
墓口	残存状況から、石積みで閉じ、その上からモルタルを掛けていると思われる。 墓口の方位：北西
人骨・遺物 出土状況	墓室内からは人骨・遺物は少量出土。 墓室内から、長さの異なる7種類の釘と、板状木製品が出土していることから、木棺を使用していたと思われる。 人骨・遺物が、砂層（I c層）を取り除いた後に検出したことから、これらの上から大量の砂が被せている。
葬法分類	一次葬（I類A）
砂敷（I d層）	墓口前に広範囲に砂が敷かれおり、庭を形成。
時期	近・現代
備考	町民からの聞き取りによると、調査する前に、持ち主が人骨・遺物を移転したこと。

第21表 7号墓遺物出土状況

器種・分類	出土地 種類	室内 休面							室外 表土					庭			合計	
		沖縄產 施釉陶器	本土產 近・現代 磁器	プラスチック 製品	金属製品	ガラス 製品	銭貨	木棺片	小計	沖縄產 施釉陶器	本土產 近・現代 磁器	金属製品	ガラス 製品	小計	本土產 近・現代 磁器	銭貨	小計	
		I類	A 無文	分類なし														
瓶									0	1				1		0	1	
小瓶									0					0	4	4	4	
四輪									1	3				3	3	3	7	
皿									0		1			1		1	1	
杯									0		1			1		0	1	
急須	I類	1							4					0	2	2	6	
茶碗									1					0	0	0	1	
香炉			1						0		1			1		0	1	
製留め					2				2					0	0	0	2	
櫛				1					1					0	0	0	1	
釘	完品				15				15					0	0	0	15	
	破片	頭あり			22				22					0	0	0	22	
		頭無し			56				56					0	0	0	56	
鉄片					47				47					3	3	0	50	
ガラス瓶					2				2					4	4	0	6	
近代銭								7	7				0		4	4	11	
木棺片								32	32				0		0	0	32	
合計		1	6	3	140	2	7	32	191	1	5	3	4	13	10	4	14	218



第20図 7号墓



遠景 [北より]



墓室内砂堆積状況 [北西より]

図版24 7号墓①



近景〔北西より〕



モルタル付着部〔南西より〕



墓室内：人骨・遺物出土状況〔北西より〕



墓室内：完掘状況〔北西より〕

図版25 7号墓②

第22表 7号墓出土遺物觀察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径/長さ 器高/幅 底径/厚さ	分類	観察所見	出土地
第21 図 ・ 図版 26	沖縄産 施釉陶器	1	碗	口～底	13.5 5.8 6.8	I-A	白化粧に灰釉を施す本古墓群ではめずらしいタイプである。素地は灰色で微粒子。	室外 表土
		2	櫛	破損	17.4 4.15 0.7	-	重量12.4g。表面はひび割れが無数にはしり、歯は大部分が折れている。	
	プラスチック製品	3	髪留め	完形	7.7 1.9 0.2	-	やや楕円形の基部から約2cm波状に屈曲させ、そこから先端まではほぼストレート。基部の部分はひび割れが目立つ。重量0.9g。	
		4			9.8 1.4 0.3	-	U字状の基部から先端までほぼストレート。ひび割れも見られず、保存状態は良好。重量1.8g。	
	釘 (丸釘)	5	-	完形	4.1 — —	-	頭部径0.9cm、胴部径0.3cm、重量1.0g。頭部下から2.2cmまで横方向に走る木質が付着。	
		6	-	破損 (頸付き)	2.1 — —	-	頭部径0.7cm、胴部径0.3cm、重量0.4g。先端部欠損。頭部下から1.8cmまで横方向に走る木質が付着。	
		7	-	完形	2.3 — —	-	頭部径0.6cm、胴部径0.2cm、重量0.5g。頭部から先端まで横方向に走る木質が付着。7号墓出土の完形品では最短。	
		8	-		2.75 — —	-	頭部径0.5cm、胴部径0.3cm、重量0.7g。頭部下から0.6cmまで木質は付着せず、そこから先端まで縱方向に走る木質が付着。	
		9	-		6.2 — —	-	頭部径0.8cm、胴部径0.5cm、重量3.1g。頭部下から1.7cmまでは横方向に、そこから先端までは縱方向にそれぞれ走る2個の木質が付着。板材の組み合わせに使用か。	
		10	-		5.15 — —	-	頭部下から2.0cmまでは横方向に、そこから先端までは縱方向にそれぞれ走る2個の木質が付着。重量2.6g。	
		11	-		7.7 — —	-	頭部径1.0cm、胴部径0.6cm、重量6.4g。頭部下から1.6cmまでは横方向にそこから先端までは縱方向にそれぞれ走る2個の木質が付着。7号墓出土の完形品では最長。頭部下に付着する木質の厚さは9とほぼ一緒。	室内 床面
		12	-		3.7 — —	-	頭部径0.9cm、胴部径0.4cm、重量1.3g。頭部下から2.0cmまでは横方向に、そこから先端までは縱方向にそれぞれ走る2個の木質が付着。頭部下に付着する木質の厚さは10とほぼ一緒。	

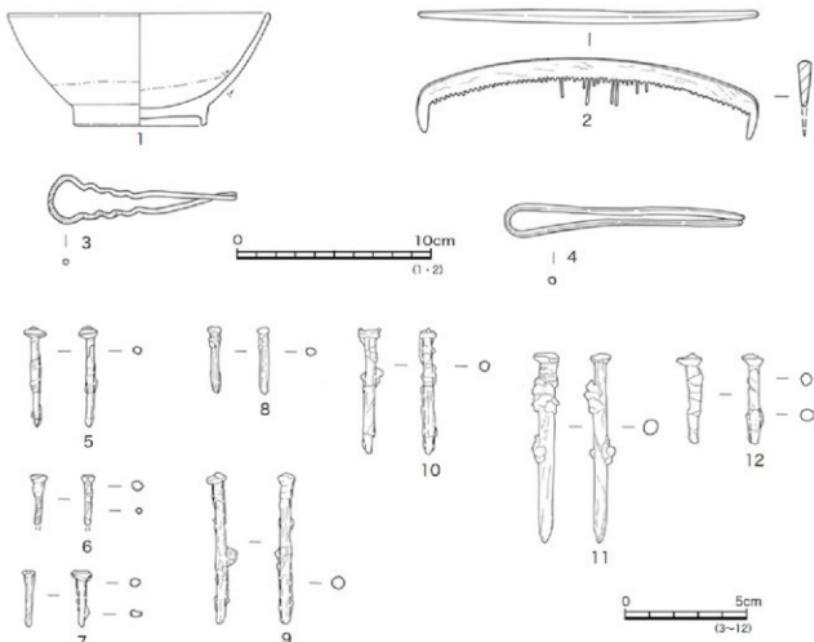
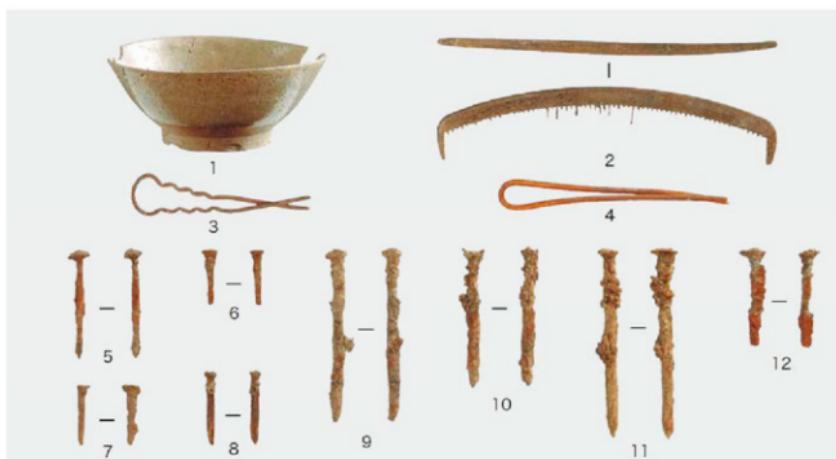


図21図 7号墓出土遺物 沖縄産施釉陶器(1)、プラスチック製品(2~4)、釘(5~12)



図版26 7号墓出土遺物

第8節 8号墓

1. 遺構

観察一覧（第23表）に示す。

2. 出土遺物

墓室内外や庭から60点の遺物が確認された。種類はマンガン釉が掛けられた専用蔵骨器、沖縄産陶器、肥前系染付、本土産近現代磁器、金属製品、ガラス製品等がある。墓室外から蓋付で専用蔵骨器が確認されていることは特徴的であるが、その他は本土産近現代磁器やガラス瓶が目立つ。



図版27 8号墓出土遺物集合

第23表 8号墓観察一覧

挿図番号	第22図
図版番号	図版28
立地	調査区北側の緩やかな傾斜地に石灰岩の岩盤が広範囲に露出する。
構造	分類 石積石室墓（I類A i c）
	規模 縦（北西—南東軸）が約2m、横（北東—南西軸）が約2.4m。 墓室内：縦約1.3m、横約0.6～0.7m、高さは約0.8mを測る。
	工法 地表に大きく露出している石灰岩の岩盤を墓室内にかかる部分を削って、墓室内の圍いを石積みで補足。 墓室内右壁：岩盤を削平し、壁面を形成。 墓室内右壁：地面から石積みを立ち上げる。大きさは大小様々で墓口付近は大型の石灰岩を使用する。 墓室内左壁：削平された岩盤の上に石積みで補足。
	天井 大型の蓋石（石灰岩）を使用。調査時には崩落していた。
	床 岩盤と地山を平坦に掘削し、直上に床石（石灰岩）を敷く。
	墓口 のような形で閉じていたかは不明。 墓口の方位：北西
人骨・遺物出土状況	墓室内では人骨の出土はごく少量で、持ち主によって移転されたと思われる。床石直上から本土産近現代磁器やガラス瓶などが出土。
葬法分類	墓室内から釘が少量出土することから一次葬に使用された（I類A）
砂敷	墓口前に砂が敷かれ庭を形成する。庭の縁辺部に砂敷きが楕円形に落ち込んでいる箇所があり、そこからは玉（第23図5）や、簪（第23図6）等が出土した。
時期	近・現代
備考	室外から専用蔵骨器（第23図1～4）が割れた状態で出土したが、周辺は墓が多数分布する区域のため、他の墓で使用され、廃棄された可能性も考えられる。



墓全景 [北西より]



石積み状況 [南西より]



墓室内：遺物出土状況 [北より]

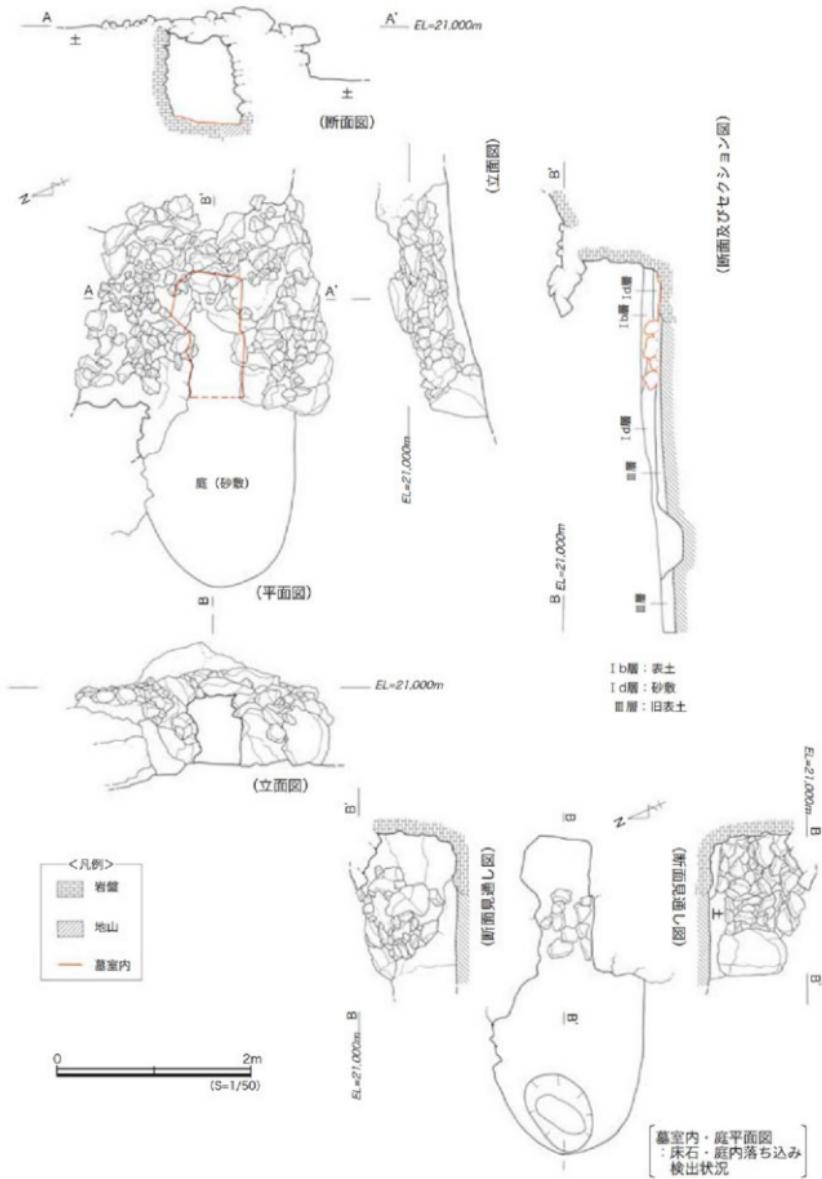


北東壁面 [西より]



調査前状況 [北西より]

図版28 8号墓



第22図 8号墓

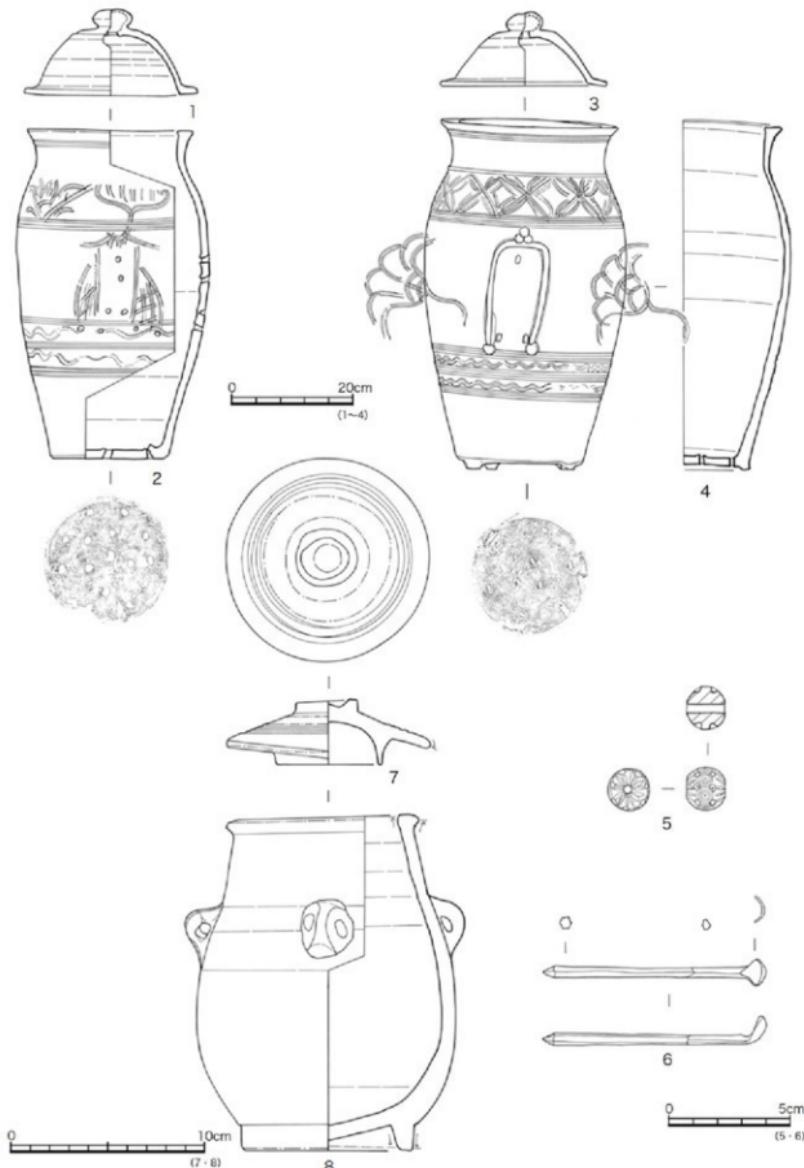
第24表 8号墓遺物出土状況

出土地 種類	室内 床面					室外 表土					底					合計
	沖縄產 無釉陶器	本土產 近・現代 磁器	金銅 製品	ガラス 製品	小計	専用 蔵骨器	沖縄產 施釉陶器	本土產 近・現代 磁器	ガラス 製品	小計	肥前系 柒付	本土產 近・現代 磁器	金銅 製品	玉	小計	
鏡背器					0	2				2					0	2
鏡背器の蓋					0	2				2					0	2
鏡	2				2		2			2	1			1	5	
小鏡	1				1		5			5	1			1	7	
皿	1				1		0			0				0	1	
杯	1				1		0			0	2			2	3	
瓶					0		0		1	1				1	1	
油壺					0		1			1				0	1	
壺	1				1		0			0				0	1	
急須					0		0			0	1			1	1	
蓋					0		1			1				0	1	
簪	Ⅲ類				0					0		1		1	1	
釘	完品				0					0		3		3	3	
	頭有り				0					0		1		1	1	
	破片				3		3			0		12		12	15	
ガラス瓶					3	3				10	10			0	13	
玉					0					0				1	1	
器種不明					0					0		1		1	1	
合 計	1	5	3	3	12	4	2	7	10	23	1	6	17	1	25	60

第25表 8号墓出土遺物観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径/長さ 器高/幅 底径/厚さ	分類	観察所見	出土地
第 23 図 ・ 図 版 29	専用 蔵骨器	1	蓋	口～底	28.4 14.3 —	—	マンガン掛蔵骨器の蓋。卵形のつまみが付く。体部高 が比較的高く丸みがある。	室外 表土
		2	身	口～底	27.3 54.15 19.45	—	マンガン掛蔵骨器。口縁部が三角形でバチ形に開く。 口唇部は平坦。文様はすべて線描きによる。肩部文様 帶に葉文。胴下部文様帶に2条の沈線波文。尾門は線画 き唐破風。	
		3	蓋	口～底	27.4 12.1 —	—	マンガン掛蔵骨器の蓋。卵形のつまみが付く。つま み台から跨までが直線的。4の身に比べてやや小さい。	
		4	身	口～底	29.3 57.2 20.9	—	マンガン掛蔵骨器。口縁部が三角形でバチ形に開く。 口唇部は平坦。底部に足が3つ付く。肩部文様帶に沈 線葉文。胴下部文様帶に2条の沈線波文。尾門はア ーチ形で上に3つの玉飾、基部に玉飾。沈線による連花 文。	
	玉	5	石	—	— — —	—	外面中央部に円形状に四重の沈線があり、傍に直径4 mmの孔が二列に7つずつ穿たれている。紐を通す部か ら放射状に沈線が入る。最大幅1.8cm、孔径0.3cm、重 量3.5g。	庭
	簪	6	—	完形	9.2 1.1 0.5	III	竿の断面は六角形で、先端から6.0cmの所で面が互い 違いになる。竿幅は先端部に向かって若干大きくなり、先 端部は六角錐となる。当古墓群出土のⅢ類の簪では最 小。重量32g、銅製。	室外 表土
	沖縄產 施釉陶器	7	蓋	口～底	3.4 3.6 5.9	—	上部に褐色釉を施すが、上部中央付近は露胎させ、白 化粧する。蓋の裏面も露胎。素地は暗赤褐色で、微粒 子。	
	沖縄產 施釉陶器	8	油壺	口～底	10.65 18.6 9.4	—	内外面に褐色釉を絶釉するが、口唇部と豊付けは釉剥 する。口唇部に白化粧を施す。素地にはぶい褐色で微 粒子。	



第23図 8号墓出土遺物 専用蔵骨器（1～4）、沖縄産施釉陶器（7・8）、簪（6）、玉（5）



图版29 8号墓出土遗物

第9節 9・42号墓

1. 造構

観察一覧(第26表)に示す。

2. 出土遺物

A) 9号墓

墓室内外や庭から259点の遺物が確認された。種類は沖縄産無釉陶器、中国産染付、本土産近現代磁器、金属製品、銭貨、ガラス製品等がある。大半は墓室内で確認された釘である。その他は本土産近現代磁器やガラス瓶が目立つ。



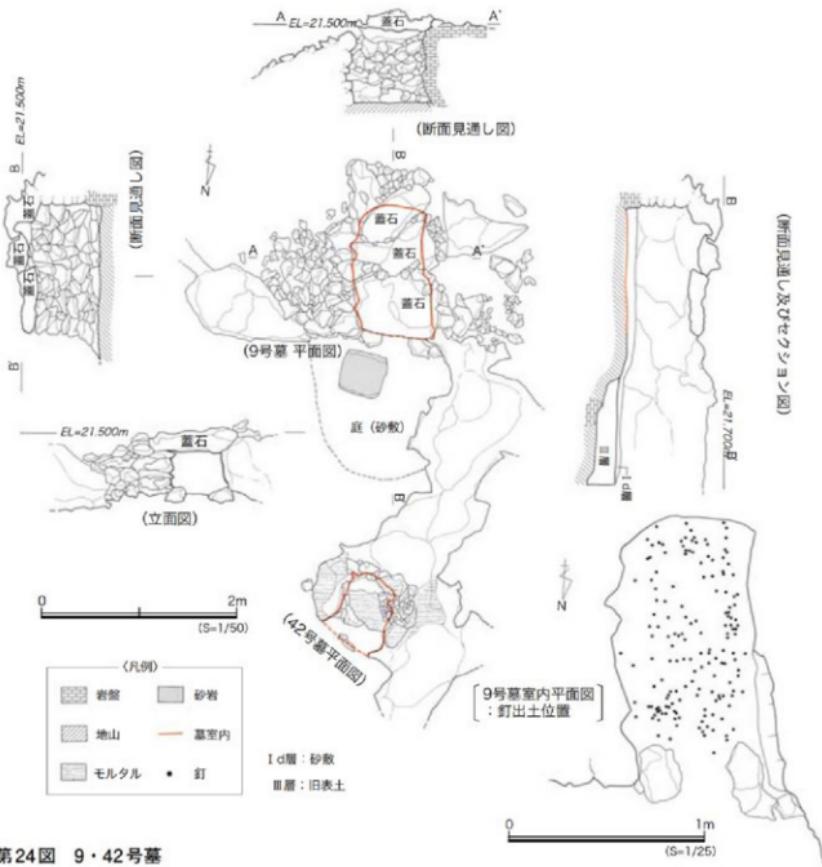
図版30 9号墓出土遺物集合

第26表 9号墓観察一覧

挿図番号	第24図
図版番号	図版31・32・33
立地	調査区北側の平坦地に岩盤が露出する。
分類	石積石室墓(I類A ii)
規模	縱(北-南軸)約2.0m、横(東-西軸)約1.8m。 墓室内: 縦約1.3m、横0.8m、高さ約0.6~0.8m。
構造	地表に露出している石灰岩の岩盤を墓室内にかかる部分を削って、墓室内の凹いを石積みで補足。 墓室内右壁: 岩盤を削平し、壁面を形成。 墓室内奥・左壁: 地面から石積みを立ち上げる。
天井	3枚の蓋石(大形でやや板状の石灰岩)を並列に乗せ、蓋石の隙間を石灰岩縫で塞いでいる。
床	地山直上を床として利用。
墓口	墓口前にはほぼ方形に成形された板状の砂岩が置かれていたことから、この板状の砂岩を蓋石として利用か。 墓口の方位: 北
人骨・遺物	墓室内は人骨の出土は少量のため、すでに移転済みと思われる。遺物は釘が多数出土することから、木棺等に使用されたものと思われ、最低でも59個(完形品14点・頭部付破損54点)の釘を使用している。
出土状況	釘の出土位置から、木棺の大きさがおおまかではあるが、把握出来る状態で出土した。長軸約1.2m×短軸約0.5m(第24図-釘出土位置図参考)。
葬法分類	一次葬(I類A)
砂敷	墓室内から墓口前まで砂が敷かれており、庭を形成していると思われる。
時期	近・現代
備考	

第27表 9号墓遺物出土状況

器種・分類	出土地 種類	室内床面				室外表土				底	合計		
		染付	本土産 近・現代 磁器	金属 製品	銭貨	小計	沖縄産 無釉陶器	本土産 近・現代 磁器	金属 製品	ガラス 製品			
碗			2		2			1		1	3		
小瓶					0			3		3			
皿		1			1					0	1		
杯					0			1		1	2		
壺					0	1				1	1		
煙管	吸口		1		1					0	1		
釘	完品			14	14				0		14		
	破片			43	43				0		43		
	頭有り 頭無し			163	163				0		163		
用途不明			18		18			1		1	19		
鉄片			2		2			1		1	3		
ガラス瓶					0				4	4	4		
近代瓶					2	2			0		2		
合計		1	2	241	2	246	1	5	2	4	12	1	259



第24図 9・42号墓



左：9号墓・右：42号墓【北東より】



釘出土状況【北より】

図版31 9・42号墓①



9号墓：正面 [北より]



9号墓：墓室内 [北より]



9号墓：人骨・遺物出土状況 [北より]

図版32 9・42号墓(2)



9号墓：人骨・遺物出土状況
〔北東より〕



42号墓：墓室内〔北より〕



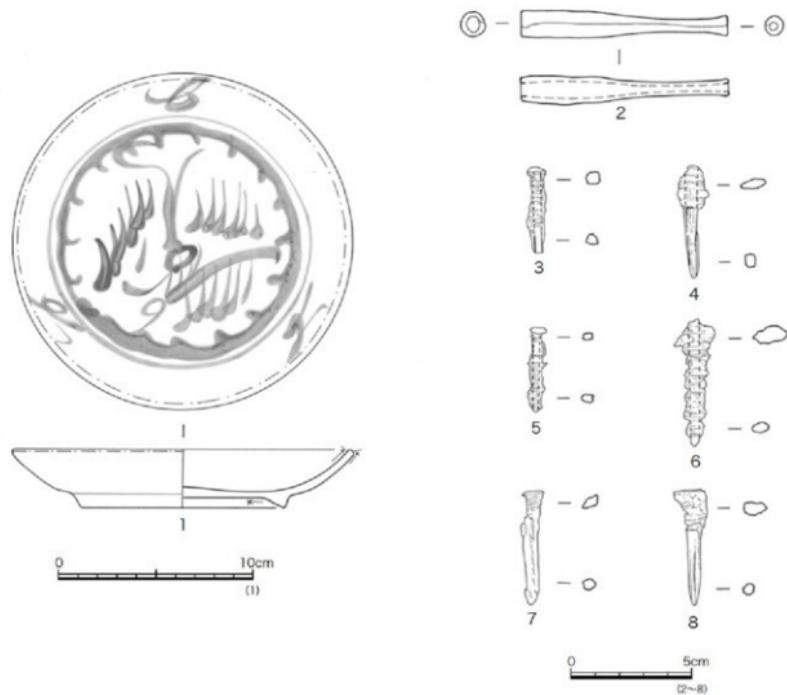
42号墓：遺物出土状況〔北より〕

図版33 9・42号墓③

第28表 9号墓出土遺物觀察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径/長さ 器高/幅 底径/厚さ	観察所見	出土地
第25図 ・ 図版 34	染付	1	皿	口～底	17.5 3.05 10.4	徳化窯系(?)。頸部が丸く張り、直口口縁を呈する。内面に不明文が三つ等間隔に配置。見込みに玉取獣子文(?)が描かれている。内面口縁部・見込みに一条ずつ圓線が入る。全体に青みを帯びた透明釉が掛かる。口唇部・外底面を釉剥ぎ。素地は灰白色微粒子。	室内 床面
		2	吸口	完形	8.35 — —	吸口外径0.8cm、吸口内径0.35cm。羅字接続部外径1.0cm、羅字接続部内径0.65cm、重量16.8g。円筒の表面は銀、内部は銅の二重構造。胴部は羅字接続部から3.5cmの所まではボストレーで、段を有している。吸口は緩やかにラッパ状となる。	
		3	—	完形	3.5 — —	頭部径0.7cm、胴部径0.5cm、重量1.9g。頭部下から先端部まで横方向に走る木質が1個付着。	
	釘 (丸釘)	4	—	破損 (頭なし)	4.7 — —	頭部欠損。胴部径0.6cm、重量2.1g。頭部下から1.6cmの所まで横方向に、そこから先端までは縦方向にそれぞれ走る2個の木質が付着。板材の組み合わせに使用。	
		5	—	完形	3.5 — —	頭部径0.6cm、胴部径0.4cm、重量1.0g。頭部下から先端まで横方向に走る木質が1個付着。3と同様。	
		6	—	破損 (頭なし)	5.2 — —	頭部欠損。胴部径0.6cm、重量2.5g。頭部下から先端まで横方向に走る木質が1個付着。	
		7	—	完形	4.7 — —	頭部径0.8cm、胴部径0.5cm、重量1.8g。頭部下から0.8cmの所まで横方向に、そこから先端までは縦方向にそれぞれ走る2個の木質が付着。板材の組み合わせに使用。	
		8	—		4.7 — —	頭部径0.8cm、胴部径0.5cm、重量2.4g。頭部下から1.6cmの所まで横方向に、そこから先端までは縦方向にそれぞれ走る2個の木質が付着。板材の組み合わせに使用。長さは7と一緒であるが、付着する木質の厚さから7とは別の板材に打ち込まれたもの。	



第25図 9号墓出土遺物 染付(1)、煙管(2)、釘(3~8)



図版34 9号墓出土遺物

B) 42号墓

墓室内からガラス瓶2点が確認された。



図版35 42号墓出土遺物

第29表 42号墓觀察一覧

挿図番号	第24図
図版番号	図版33・36
立地	調査区北側の石灰岩の岩盤が露出した緩やかな傾斜地。
構造	分類 モルタルが掛かる墓(II類Aiii)
	規模 縦(北東-南西軸)0.8m、横(北西-南東軸)1.2m。 墓室内: 縦0.7m、横約0.5m。
	工法 地表に露出している石灰岩の岩盤を墓室内にかかる部分を削り、墓室内の廻いを石積みで補足している。外面にはモルタルが残っていることから全てモルタルで覆われていたと考えられる。 墓室内奥、右壁: 岩盤を削平し、壁面を形成。 墓室内左壁: 長方形に加工した石灰岩を使用し、外面にはモルタルが掛かる。
	天井 モルタルで覆われた蓋石(石灰岩)を使用。調査時には崩落していた。
	床 旧表土(III層)直上を床として利用。
	墓口 何で閉じていたかは不明。墓口の方位: 北東。
人骨・遺物 出土状況	墓室内からは人骨はほとんど出土せず、すでに移転済みと思われる。遺物はガラス瓶と鉄片が出土。
葬法分類	遺構の規模で類推すると二次葬で使用か(II類D)。
砂敷	なし。
時期	近代以降か
備考	



図版36 42号墓 正面より [北より]

第10節 10号墓

1. 遺構

観察一覧（第30表）に示す。

2. 出土遺物

墓室内外や庭から98点の遺物が確認された。種類は本土産近現代磁器、金属製品、銭貨、ガラス製品等がある。墓室内から確認された遺物は釘と鉄片、青銅製品のみで、残りの種類の全てが墓室外や庭から確認されたのは特徴的である。遺物の多くは釘と特徴的な金属製品である。他は本土産近現代磁器やガラス瓶が目立つ。



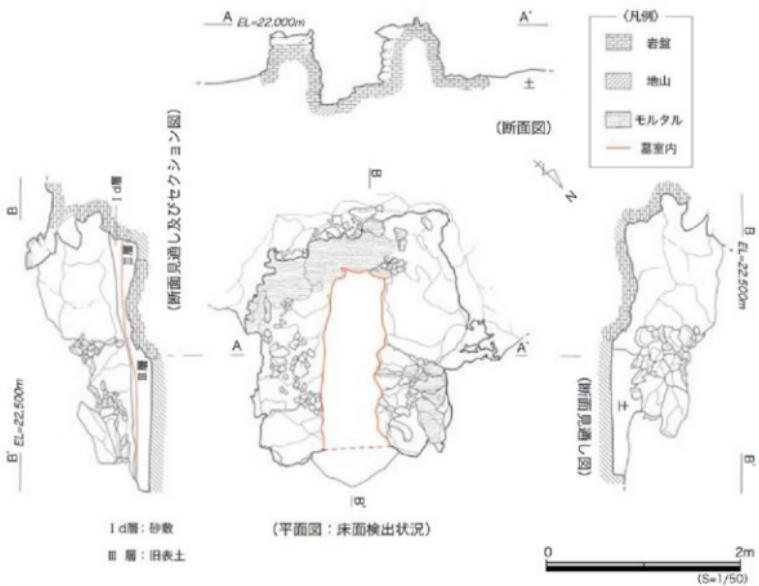
図版37 10号墓出土遺物集合

第30表 10号墓観察一覧

挿番号	第26図
図版番号	図版38
立地	調査区北側の石灰岩の岩盤が広範囲に露出している斜面地。
構造	モルタルの掛かる墓（II類Bii）。外観は亀甲墓に似る。
分類	縦（北東—南西軸）約2.4m×横（北西—南東軸）約2m 墓室内：縦約1.8m×横約0.5m×高さ約0.7m（残存状況から類推）
規模	地表面から大きく露している石灰岩の岩盤を、墓室内にかかる部分を削り、地面を少し掘り下げて整地。墓室内の周囲を石積みで補足する。 墓室内右壁：岩盤を削平して壁面を形成。 墓室内左壁：岩盤を削平して壁面を形成し、その上から石積みで補足。
工法	天井 石積みの上からモルタルを掛けている。
天井	床 旧表土（Ⅲ層）直上を利用。
床	墓口 何で閉じられていたか不明。 墓口の方位：北東
墓口	人骨・遺物 出土状況 墓室内から人骨・遺物がほとんど出土しないことから、持ち主により移転されていると思われる。 釘が出土していることから木棺を使用していたと思われる。 墓室外から種類の異なるボタンが6点出土しているが遺骸に着せていた服に付いていたもの、または、一緒に収められた副葬品か。
人骨・遺物	非法分類 一次葬（I類A）
出土状況	砂敷（Ⅰd層） 墓口前に砂が敷かれており、庭を形成。
非法分類	砂敷（Ⅰd層）
時期	近・現代
備考	墓の破損状況が著しい。

第31表 10号墓遺物出土状況

器種・分類	出土地 種類	室内 底面	室外 表土						庭	合計
			金属 製品	本土產 近・現代 磁器	金属 製品	骨製品	ガラス 製品	銭貨		
碗			3					3		3
小碗			2					2		2
皿			1					1		1
杯			4					4		4
小杯			1					1		1
釘	完品	1						0	6	7
	頑有り	1		2				2	21	24
	頑無し	12						0	1	13
その他の金属製品		2	18					18	4	24
用途不明								0	2	2
鉄片		1						0		1
ガラス瓶					9			9		9
ボタン			3	3				6		6
近代製						1		1		1
合計		17	11	23	3	9	1	47	34	98



第26図 10号墓



完掘状況〔北東より〕



モルタル付着部〔南より〕



墓室内〔北西より〕



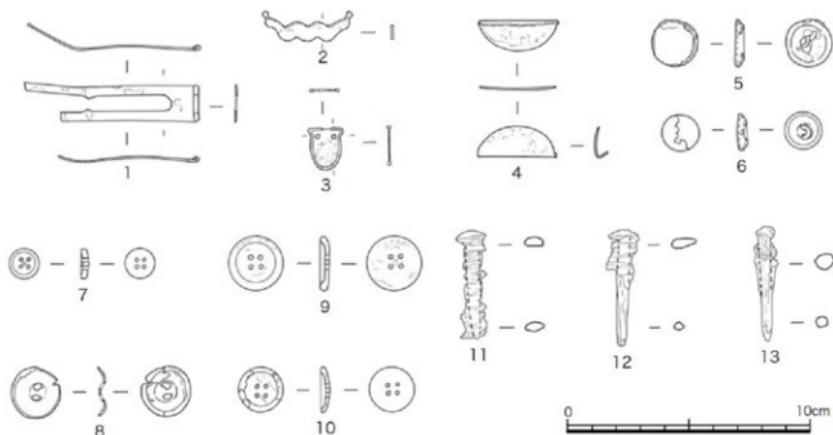
墓室内〔南東より〕

図版38 10号墓

第32表 10号墓出土遺物觀察一覧

単位:cm

辨団番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	長さ 幅 厚さ	重量	觀察所見	出土地
第27 図 ・ 図版 39	金属 製品	1	蝶番か	破損	7.1 1.5 0.3	3.0g	円形の軸部と心棒も見られることから蝶番の一部と思われる。軸部から約5cmのところで、屈曲する。表面には鍍金が残存している箇所あり。材質不明	室外 表土
		2	調度品 の金具	完形	3.7 1.3 0.15	1.6g	引き手金具と思われる。両端には金具に差し込む円形の溝みが見られる。銅製か。	
		3	足袋の こはぜ	完形	1.6 1.3 0.15	0.6g	足袋で使用されるこはぜと呼ばれる留め金具。紐を通す円形の孔が2個(直径0.25cm)。同様のものが10個10号墓から出土。銅製か。	
		4	用途 不明	完形	3.3 1.3 0.1	2.0g	半円形をなし、直徑部から0.5cm程の幅で鋭角に屈曲させている。屈曲した直徑部の先端はやや鋭く尖らせた蓄形状をなしている。留め金具の一種か。	
		5	ボタン	破損	1.5 — 0.4	1.2g	表面はほぼフラットに形成。裏側は縁辺部が膨らみ、中心部は一部欠損しているが、僅んでいる。内部は空洞で、留め金の一部が内部に残存。銅製。	
		6		完形	1.5 — 0.45	1.0g	ボタンの表面はやや膨らみをもつ。裏面は縁辺部から1度段を有して膨らみ、中心部は僅んでいる。中心部にはU字状の留め金具が付く。	
	骨製品	7	ボタン	完形	1.5 — 0.35	0.5g	表は縁辺部が厚く中心部は段を有して窪む。中心部は円形の孔を5個有し、中央の1個を除き、全て貫通している。裏面はややふくらみを持たせ、丁寧に成形。	庭
	金属 製品	8	ボタン	破損	2.0 — 0.4	0.7g	ボタンの裏側のみ残存。縁辺部は膨らみ中心部は窪んでいる。中心は止め金具を引っ掛けた梢円形の孔が2箇所。5と同タイプのものか。銅製。	
	骨製品	9	ボタン	完形	2.2 — 0.4	1.6g	ボタンの表は縁辺部が厚みをもち、段を有して窪む。中心部は円形の孔を4個有する。裏面は縁辺部のみふくらみを持たせ、残りはほぼフラットになる。表、裏とともに丁寧に研磨して成形。	
		10			1.85 — 0.4	1.1g	ボタンの表は縁辺部が厚みをもち、段を有して窪む。中心部は円形の孔を4個有する。裏面は中心に向かって緩やかにふくらむ。他の骨製ボタンと比べて粗雑な作り。	
釘 (丸釘)	-	11	完形	-	4.5 — —	2.2g	頭部径1.0cm、胴部径0.5cm。頭部下から先端まで横方向に走る木質が1個付着。	庭
		12			4.8 — —	2.0g	頭部径1.0cm、胴部径0.4cm。頭部下から1.9cmの所まで横方向に、そこから先端までは縱方向にそれぞれ走る2個の木質が付着。板材の組み合せに使用。	
		13			4.8 — —	2.2g	頭部径0.8cm、胴部径0.45cm。頭部下から1.5cmの所まで横方向に、そこから先端までは縱方向にそれぞれ走る2個の木質が付着。板材の組み合せに使用。	



第27図 10号墓出土遺物 金属製品（1～6・8）、骨製品（7・9・10）、釘（11～13）



図版39 10号墓出土遺物

第11節 11号遺構・12号墓

1. 遺構

観察一覧（第33表）に示す。

2. 出土遺物

A) 11号遺構

11号遺構周辺から39点の遺物が確認された。種類はマンガン釉が掛けられた専用蔵骨器、沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器、中国産白磁、本土産近現代磁器、ガラス瓶がある。専用蔵骨器が確認された数少ない遺構だが、暮らしい遺構が確認されなかった。完全に廃棄され遺物だけ残された可能性がある。本土産近現代磁器やガラス瓶が目立つため、本古墓群の中でも新しい様相を呈する。



図版40 11号遺構出土遺物集合

第33表 11号遺構・12号墓観察一覧

挿図番号	第29・30図
図版番号	図版43・44・45
立地	調査区北側のほぼ平坦地に石灰岩の岩盤が露出。
分類	11号遺構(不明遺構)、12号墓: フィッシャー墓(VI類)
規模	露出する岩盤の割れ目(フィッシャー)に礫石が詰め込まれた遺構が2箇所並列しており、北西側から11号、12号(第29図)とした。礫石が詰め込まれた範囲は11、12号合わせて縦(北東—南西軸)約2m、横(北西—南東軸)約3.5mとなる。
構造	両遺構に掛かる礫石を撤去後、11号には何も確認できず岩盤を検出したのみで、加工痕は見られなかった。一方、12号は墓口前に掛かるフィッシャー部分の岩盤を一部削っている。
工法	12号は1枚の蓋石(石灰岩)で閉じられている。
天井	12号は1枚の蓋石(石灰岩)で閉じられている。
墓口	やや小型の石灰岩礫を積み上げ、塞いでいる。12号墓の墓口の方位: 北東
床	フィッシャーの奥まで礫石と土が堆積し、床の位置は不明。
人骨・遺物 出土状況	人骨は出土せず、墓口付近から本土産の近現代磁器等が出土。
葬法分類	12号の葬法は不明(III類)
砂敷	12号の墓口前には砂が敷かれ、庭を形成する。
時期	近・現代
備考	11、12号の室外からは専用蔵骨器(第31図1)が出土したが、周辺に墓が多数分布することから他の墓で使用された可能性も考えられる。

第34表 11号遺構遺物出土状況

出土地 種類 器種・分類	遺構外 表土						合計
	専用 蔵骨器	沖縄産 施釉陶器	沖縄産 無釉陶器	色塗	本土産 近・現代 磁器	ガラス 製品	
蔵骨器	2						2
蔵骨器の蓋	1						1
碗	I類 A 無文		2				2
	II類 A a 有文①		1				1
	分類なし				6		6
杯					4		4
小坪				1			1
	VII類 B			1			1
	漆類			1			1
	分類なし			3			3
瓶	I類 I		1				1
	漆類		2				2
水差				1			1
ガラス瓶						10	10
器種不明					3		3
合計	3	6	6	1	13	10	39

B) 12号墓

墓室内外から11点の遺物が確認された。種類は沖縄産無釉陶器転用蔵骨器、沖縄産施釉陶器、本土産近現代磁器、ガラス瓶がある。沖縄産施釉陶器瓶は光沢がある厚い瑠璃色の釉薬が掛けられたもので、現代でも見られるものである。本古墓群の中でも新しい様相を呈する。

第35表 12号墓出土遺物一覧

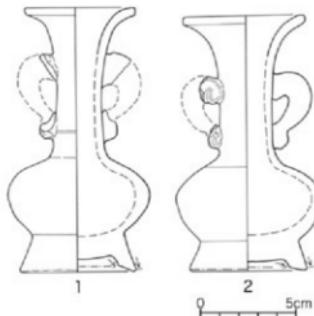
出土地	室内 床面		室外 表土		
	本土産 近・現代磁器	転用 蔵骨器	沖縄産 施釉陶器	本土産 近・現代磁器	ガラス製品
器種	碗	盞	瓶	X I類-2	
分類				杯	ガラス瓶
個数	3	2	2	1	3



図版41 12号墓出土遺物集合

第36表 12号墓出土遺物観察一覧

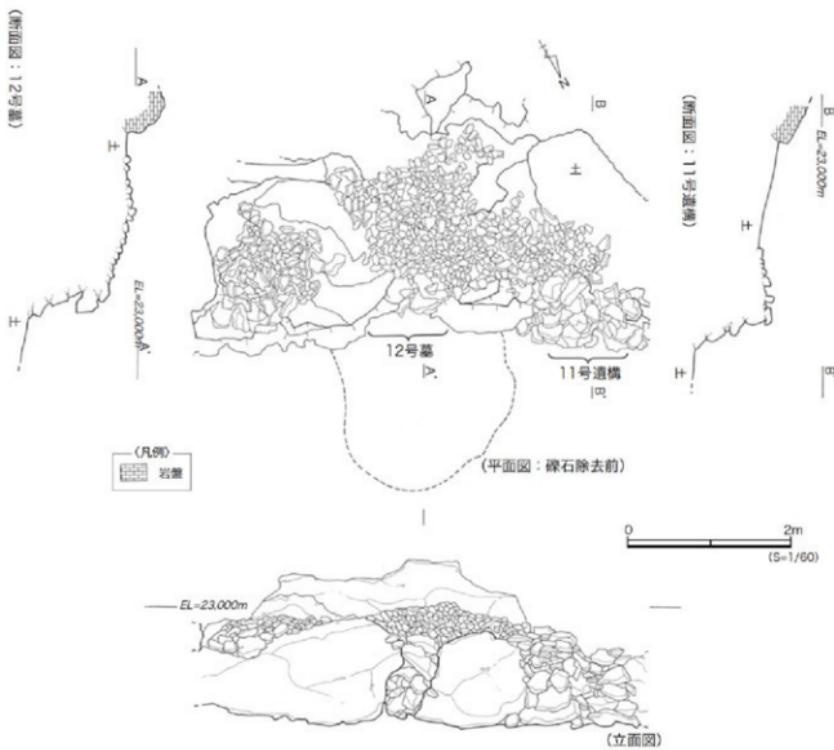
捕団番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径 器高 底径	分類	観察所見		出土地
							1	2	
第28図 図版42	沖縄産 施釉陶器	1	瓶	口～底	6.1 14.55 6.4	X I-2	縦耳が左右対称に2つ付く。ハの字に聞く高台が付く。蓋付けは太く内側に向かって斜めに形成するため、接地面は外縁のみ。肩部は梢円形で細長い頸部に至る。口縁部は大きく外反する。光沢を持つ瑠璃色釉が内面は頸部まで、外面は全面に施されるが、蓋付けは露胎とする。素地は乳白色で微粒子。1・2は同一品である。		
		2			6.7 14.0 6.5	X I-2			



第28図 12号墓出土遺物 沖縄産施釉陶器



図版42 12号墓出土遺物



第29図 11号遺構・12号墓

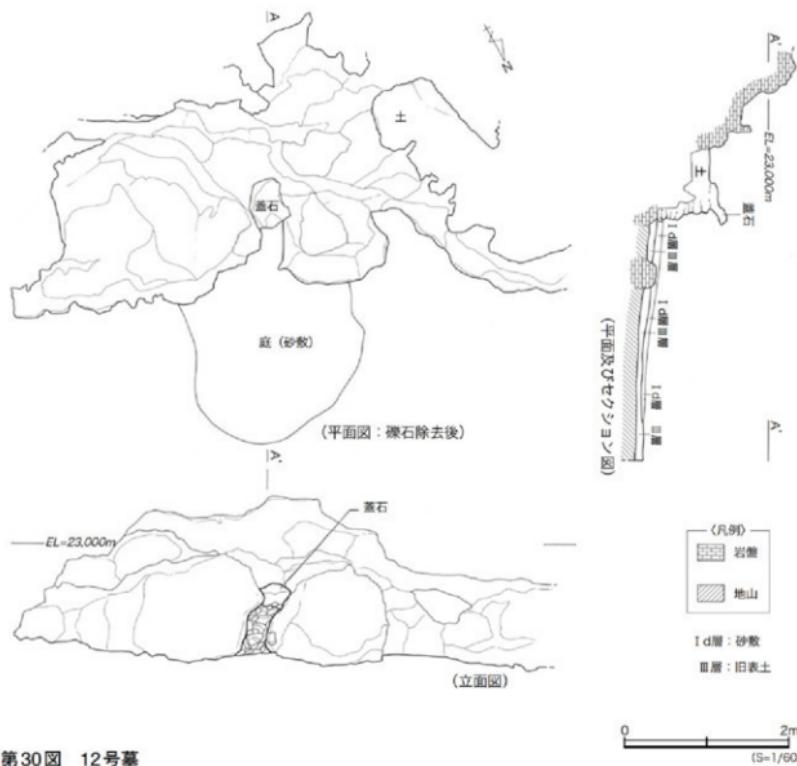


12号墓 砕石群 [南西より]



左 : 12号墓・右11号遺構 [北東より]

図版43 11号遺構・12号墓



第30図 12号墓



12号墓 墓室内 [北東より]



庭 (砂敷) 検出状況 [北より]

図版44 12号墓①



完掘状況〔北より〕



完掘状況〔南西より〕



蓋石検出状況〔南西より〕



蓋石除去後〔北東より〕



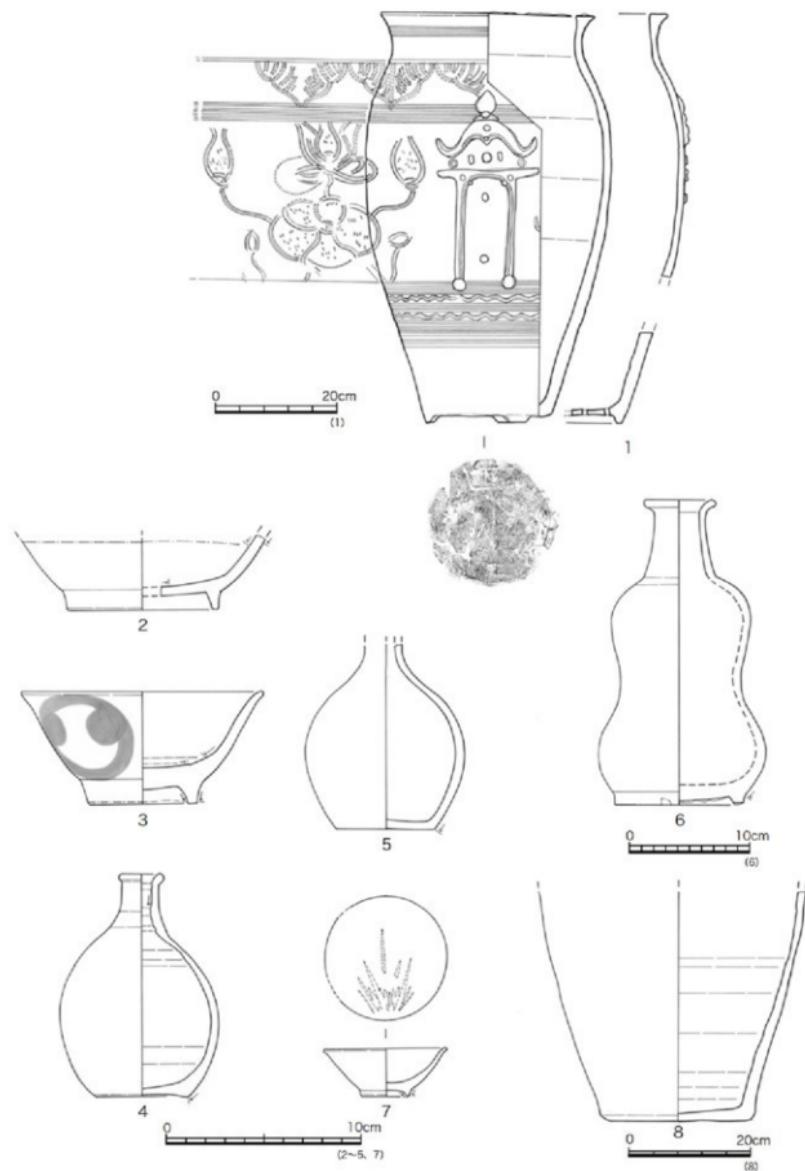
墓室内：遺物検出状況〔北東より〕

図版45 12号墓②

第37表 11号遺構出土遺物観察一覧

単位: cm

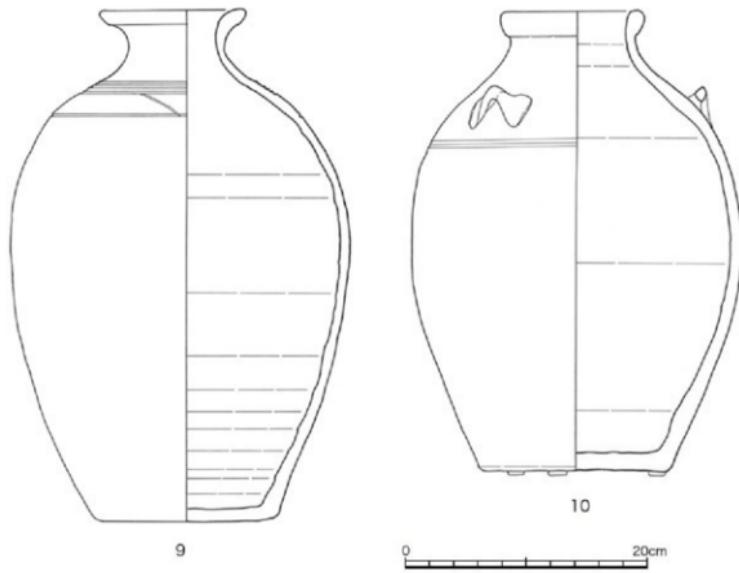
擇図番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径 器高 底径	分類	観察所見	出土地	
第31図 ・ 図版46	沖縄産 施釉陶器	専用 蔵骨器	1	身	口～底	34.9 67.4 21.0	—	口縁部が三角形でバチ型に開く。底部には足が3つ付く。肩部文様帯は沈線葉文。胴部文様帯は沈線蓮花文。屋門は唐破風形で、屋根の上は宝珠か。柱基部は玉飾。胴下部文様帯は2つの沈線波状文。	遺構外 表土
		2	碗	腰～底	— — 7.8	I-A	釉は灰白色。素地は灰白色で微粒子。		
		3		口～底	12.4 5.8 5.4	II-Aa 有文①	内外面に白化粧で透明釉を施す。見込みは蛇の目釉剥ぎ。豊付けにアルミニナが付着。器面は細かい貫入が目立つ。外面に呉須で巴文を3つ。		
		4	瓶	口～底	2.3 11.4 4.7	VII	泥釉を施すが、底部は露胎。素地は暗赤褐色で細粒子、細かい砂粒が目立つ。		
		5			— — 5.0	VII	口縁部が丸みを帯びて肥厚する。外面と内面頸部に褐色釉を施すが、底部は露胎。素地は暗赤褐色で微粒子。		
		6			6.0 25.0 10.6	I-1	大型。口縁部が外反し、口唇部は丸みを帯びる。黒色釉を内面頸部、外面に施す。豊付けは露胎させ、外底面には薄く塗る。豊付け、外底面に砂が多量に付着。		
		7	杯	口～底	6.3 2.5 2.4	—	型成形。高台脇から口縁部にかけて逆ハの字状に開く。口縁部は弱く外反する。内面の繪付けした色が剥げ落ちているが、草文が描かれていたと思われる。全体に白濁した釉が掛かる。豊付けは釉剥ぎ。素地は白色微粒子。		
		8	水甕	底	— — 25.2	—	底部から垂直に近く斜めに立ち上がる。外面の成形は丁寧である。内面は釉種成形痕が顕著に残る。マンガン釉が施される。		
第32図 ・ 図版47	沖縄産 無釉陶器	9	壺	口～底	12.0 42.1 15.3	VII-B	口縁部から胴部上方にかけて淡黄色の自然釉が掛かる。肩部と頸部の境に5条の沈園線、肩部に1条の園線。素地は明褐色で微粒子。	遺構外 表土	
		10			11.7 38.2 15.8	VII	肩部に3つの横耳が付く。底部に3つの足が付く。外面にマンガン釉が施される。胴部上方に2条の沈園線。素地は暗赤褐色で微粒子。		



第31図 11号遺構出土遺物① 専用蔵骨器(1)、沖縄産施釉陶器(2～6)、沖縄産無釉陶器(8)、色絵(7)



图版46 11号遗构出土遗物①



図版47 11号造構出土遺物② 沖縄産無釉陶器



図版47 11号造構出土遺物②

第12節 13号墓

1. 遺構

観察一覧（第38表）に示す。

2. 出土遺物

墓室外と庭から10点の遺物が確認された。種類は沖縄産陶器、本土産近現代磁器、鉄片、ガラス瓶がある。鉄片以外は墓室外から確認された。



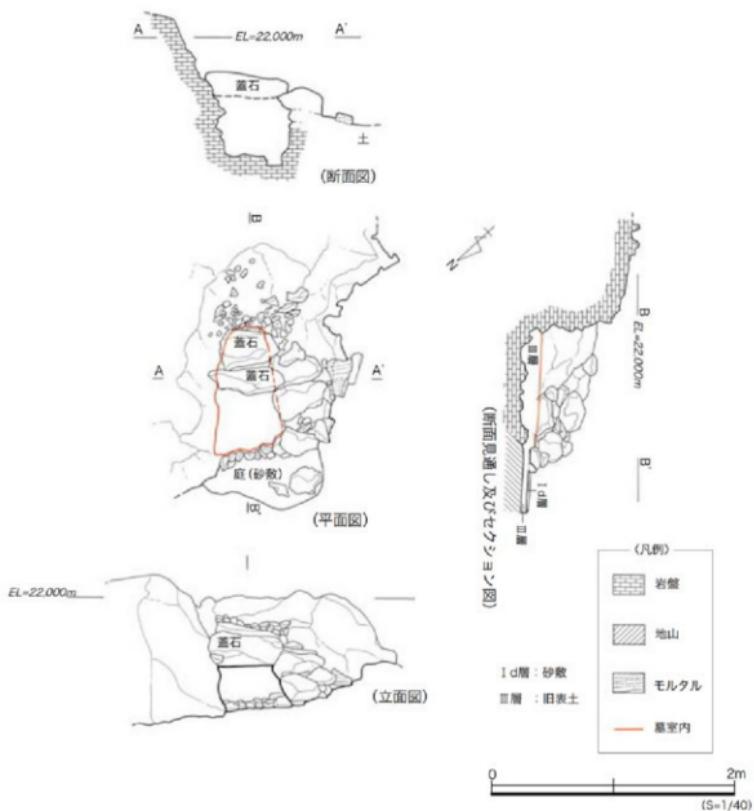
図版48 13号墓出土遺物集合

第38表 13号墓観察一覧

挿図番号	第33図
図版番号	図版49・50
立地	調査区北側の石灰岩の岩盤が広範囲に露出している緩やかな斜面地。
構造	モルタルの掛かる墓（II類A i）
	規模 縱（北西—南東軸）約1.2m×横（北東—南西軸）約1.2m 墓室内：縦約1m×横約0.5m×高さ約0.4m（残存状況から類推）
	工法 地表から大きく露出している石灰岩の岩盤を、墓室内にかかる部分を削り、地面を掘り下げて整地。墓室内の匂いを石積みで補足する。 墓室内奥壁：雑ではあるが、岩盤を削平して壁面を形成。 墓室内右壁：奥側は岩盤を削平して壁面を形成・手前側は地面の上に石積みを補足。 墓室内左壁：岩盤を削平して壁面を形成し、岩盤の一部に段をつけ、蓋石を受ける部分を設ける。
	天井 残存状況から、蓋石（石灰岩）を並べて、その上からモルタルを掛けていたと思われる。
	床 旧表土（III層）直上を利用。
	墓口 残存状況から、石積みで閉じていたと思われるもの。 墓口の方位：北西
人骨・遺物出土状況	墓室内から人骨・遺物が出土しないことから、持ち主によって移転されていると思われる。 墓室外から沖縄産施釉陶器・無釉陶器、本土産近・現代磁器等が出土。
葬法分類	葬法不明（III類）
砂敷（1d層）	墓口前に小規模だが、砂が敷かれており、庭を形成。
時期	近・現代
備考	

第39表 13号墓遺物出土一覧

出土地	室外 表土					庭
種類	沖縄産施釉陶器			沖縄産無釉陶器	本土産近・現代磁器	ガラス製品 金属製品
器種	瓶	急須	急須の蓋	壺	碗	ガラス瓶 鉄片
	II類-1-有文②	II類	II類	I類-B		
個数	1	1	1	1	3	1 2



第33図 13号墓



底(砂敷)検出状況 [北より]



完掘状況 [北西より]

図版49 13号墓①

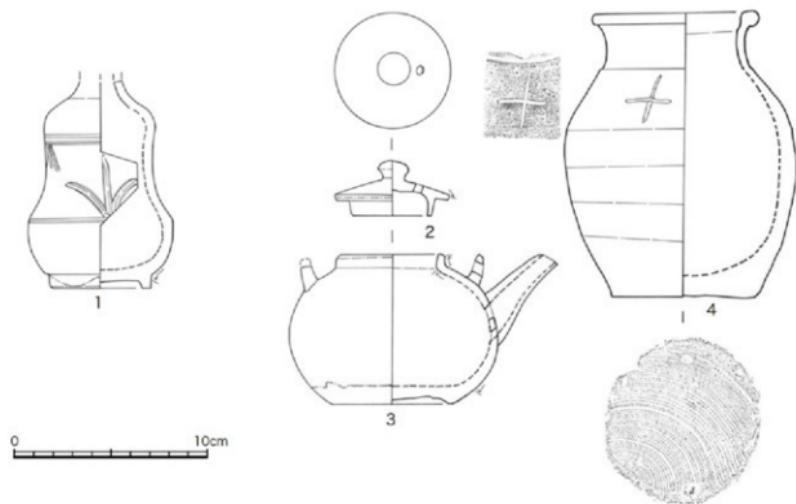


図版50 13号墓② 墓室内右側壁石積み [北より]

第40表 13号墓出土遺物観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径/長さ 器高/幅 底径/厚さ	分類	観察所見	出土地
第 34 図 ・ 図 版 51	沖縄産 施釉陶器	1	瓶	頭～底	一 5.6	III-1 有文②	腰部に1条、肩部下方に2条の沈圓線。外面高台脇まで飴色釉を施す。高台は露胎とする。豊付け・外底面に砂が付着する。素地は灰色で微粒子。	室外 表土
		2	急須 蓋	口～底	6.3 3.05 4.4	—	蓋上部に光沢がある瑠璃釉を施すが、下部は白化粧を施す。鶴の先端部のみ露胎とする。	
		3	急須 身	口～底	6.0 8.2 6.4	II	外面は光沢のある瑠璃釉、内面は白化粧に透明釉を施す。腰部から底部は露胎とする。底部は上底状を呈するが、中央を膨らませる。素地は灰色で微粒子。	
	沖縄産 無釉陶器	4	壺	口～底	9.1 15.9 7.8	I-B	I-B類は成形が雑なものが多いが、A類のように丁寧である。口縁部をし字状に折り曲げ、口唇部は丸みを持たせる。素地は鈍い橙色で微粒子、微砂粒が目立つ。肩部に「十」字の印がある。	



第34図 13号墓出土遺物 沖縄産施釉陶器（1～3）、沖縄産無釉陶器（4）



図版51 13号墓出土遺物

第13節 14・38号墓

1. 遺構

38号墓の使用後に新しく14号墓が構築され使用されたため、切り合い関係がある。

詳細は観察一覧（第41表）に示す。

2. 出土遺物

A) 14号墓

墓室内外から57点の遺物が確認された。種類は沖縄産施釉陶器、中国産染付、本土産近現代磁器、金属製品、錢貨、ガラス瓶等がある。沖縄産施釉陶器は現在でも良く見られる2点の同型の瓶である。大半の遺物は墓室内で確認された釘である。



図版52 14号墓出土遺物集合

第41表 14・38号墓観察一覧

挿図番号	第35図
図版番号	図版53・54
立地	調査区北側の石灰岩の岩盤が広範囲に露出している斜面地。
分類	14号墓 石積石室墓(Ⅰ類C)
	38号墓 挖込み墓(Ⅴ類B)
	14号墓 縦(北西—南東軸)約2m×横(北東—南西軸)約1.7m 墓室内:縦約1.4m×横約0.5m×高さ約0.7m(残存状況から類推)
	38号墓 大規模。縦(北西—南西軸)約1m×横(北東—南西軸)約1.3m×墓室内高さ約0.7m
構造	元々38号墓が形成されていた場所に、礫石で墓室内を囲うように積んで補足する。墓室の周りは多くの礫石を小高く積んでいる。 14号墓 墓室内奥壁: 元々掘込まれている岩盤。 墓室内右壁: 地面の上に石積み。 墓室内左壁: 地表に露出している岩盤と地面の上に石積み。
	38号墓 地表から大きく述べていてる石灰岩の岩盤の一部を大きく掘込み、地面を地山まで掘り下げて整地。
	14号墓 蓋石(石灰岩)で閉じていたと思われる。
	38号墓 掘り込まれている岩盤。
天井	14号墓 旧表土(Ⅲ層)を利用していたと思われる。
	38号墓 地山直上を利用する。
床	14号墓 14・38号墓ともに何で閉じられていたか不明。 墓口の方:北西
人骨・遺物出土状況	14号墓 墓室内から人骨・遺物がほとんど出土しないことから、持ち主により移転されていると思われる。 丸・角釘が出土していることから、木棺を使用していたと思われるが、角釘は38号墓にともなう遺物の可能性がある。
	38号墓 14号墓の石積みの下より人骨の一部が検出。
	墓室内から角釘が出土していることから、木棺を使用していたと思われ、墓室内から白磁(小碗・小杯)、染付(碗)等が出土。
葬法分類	14・38号墓ともに一次葬(Ⅰ類A)
砂敷(Ⅰd層)	14・38号墓ともに無し。
時期	14号墓:近・現代 38号墓:近世～近代
備考	墓の使用に時期差がある。最初に38号墓を形成して使用しており、38号墓が使用されなくなった後に、同位置に形状の異なる14号墓を形成している。

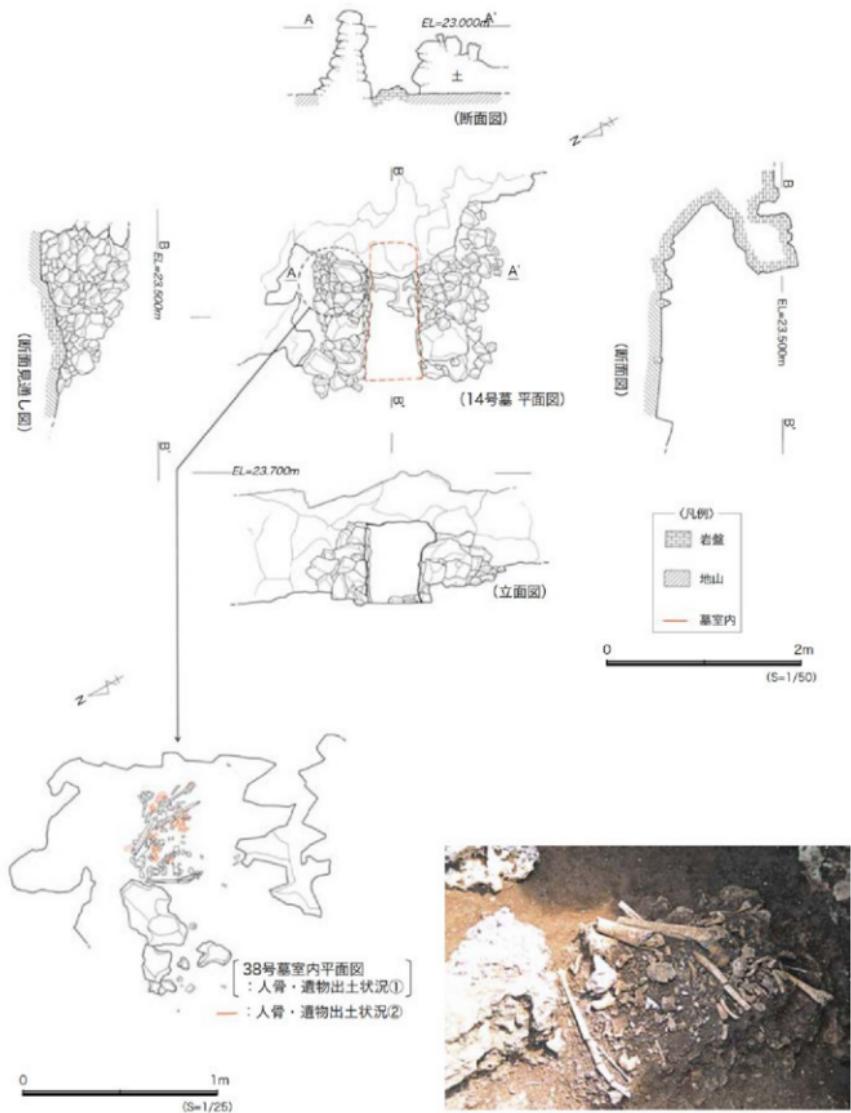
第42表 14号墓遺物出土状況

出土地 種類	室内 床面						室外 表土				合計	
	沖縄産 施釉陶器	染付	本土産 近・現代 磁器	金属 製品	ガラス 製品	錢貨	小計	沖縄産 施釉陶器	本土産 近・現代 磁器	ガラス 製品	小計	
碗		1					1	1	1		2	3
杯			1				1		1		1	2
壺	B類	I A 小					0	1			1	1
瓶	X I類	I	2				2				0	2
	完品			3			3				0	3
釘	頭有り 破片	b		11			11				0	11
		d		17			17				0	17
	鉄片			13			13				0	13
ガラス瓶				1			1				1	1
近代鉢					3	3					0	3
合計		2	1	1	44	1	3	52	2	2	1	57

第43表 14・38号墓出土遺物観察一覧

単位:cm

出土地	種類	番号	器種	部位	口径×長さ 器高/幅 底径/厚さ	分類	観察所見		出土地			
							内面	外面				
第36図 図版55 (14号墓)	沖縄産 施釉陶器	1	瓶	口～底	7.2 15.0 7.0	X I - 1	高台付けが太く、内側に向かって斜めに形成するため、接地面は外縁のみ。高台脇に段を持ち円筒形の胸部に至る。肩部で屈曲して頸部に至る。口縁部は外反する。頸部に左右対称に突手が付き、動物の顔(?)が彫り込まれる。光沢を持つ珊瑚種が内面頸部、外面全面に施されるが、疊付けが露呈する。素地は乳白色で微粒子。1・2は同一品である。			室内 床面		
					6.8 15.1 7.2	X I - 1	徳化窯系(?)。高台径が大きく、高台が高い。高台脇から腰部にかけて丸みを帯びるが、腰部から頭部に向かってやや急に立ち上がる。外面に草花文が彫られていて、見込みには不明文。外面高台脇、腰部に一条ずつ圓線が入る。見込みに二条の圓線が入る。全体に青みを帯びた透明釉が掛かる。疊付けは釉剝ぎ。素地は灰白色微粒子。					
	染付	3	碗	刷～底	— 6.6	—	頭部径0.7cm、胴部径0.45cm、重量2.2g。頭部下から1.6cmの所まで横方向に、そこから先端までは縱方向にそれぞれ走る2個の木質が付着。板材の組み合わせに使用。					
	釘 (丸釘)	4	完形	—	4.8 — —	—	頭部径0.8cm、胴部径0.5cm、重量2.3g。頭部下から1.8cmの所まで横方向に、そこから先端までは縱方向にそれぞれ走る2個の木質が付着。板材の組み合わせに使用。					
					4.7 — —	—	頭部径0.7cm、重量6.0g。頭部と先端は欠損し、緩やかにS字状に折れ曲がる。頭部付近は剥離が著しい。木質は横方向に走るもののが1個付着。38号墓使用時のものか。					
	釘 (角釘)	6	—	破損 (頸なし)	4.1 — —	—	頭部欠損。頭部径0.5cm、重量4.2g。頭部と先端は欠損し、緩やかにS字状に折れ曲がる。頭部付近は剥離が著しい。木質は横方向に走るもののが1個付着。38号墓使用時のものか。					
					4.4 — —	—	頭部径0.7cm、重量6.0g。頭部と先端は欠損。若干湾曲している。木質はほぼ一面に横方向に走るもののが1個付着。38号墓使用時のものか。					
第37図 図版57 (38号墓)	簪	1	完形		16.0 0.5 0.3	II	竿の断面は先端から10.3cmの所までは六角形、そこから下部までは円形となる。先端は六角錐であるが、磨耗して丸みを帯びる。重量6.0g。銅製。			室内 床面		
					11.5 — —	I	竿と花の基部が残存。花は花弁が6枚と思われるが、一部欠損している。最大径は2.3cm。下部は首、ムディー、竿からなり、首は径0.45cmの六角形。ムディーは径0.3cmの円形で、次ぐ大きくなればねじれが見られる。竿は径0.4cmの四角形で先端に向かって若干太くなる。先端部は四角錐であるが、磨耗して丸みを帯びる。重量13.7g。銅製。					
	釘 (角釘)	3	—	破損 (頸なし)	4.8 — —	—	頭部径0.6cm、重量5.0g。頭部は欠損し、頭部から先端まで残存。頭部の上部と先端付近で緩く折れる。木質は一面に横方向に走る木質が1個付着。					



第35図 14・38号墓

図版53 14・38号墓①



14号墓：正面【北西より】



14号墓：石積み状況【北東より】



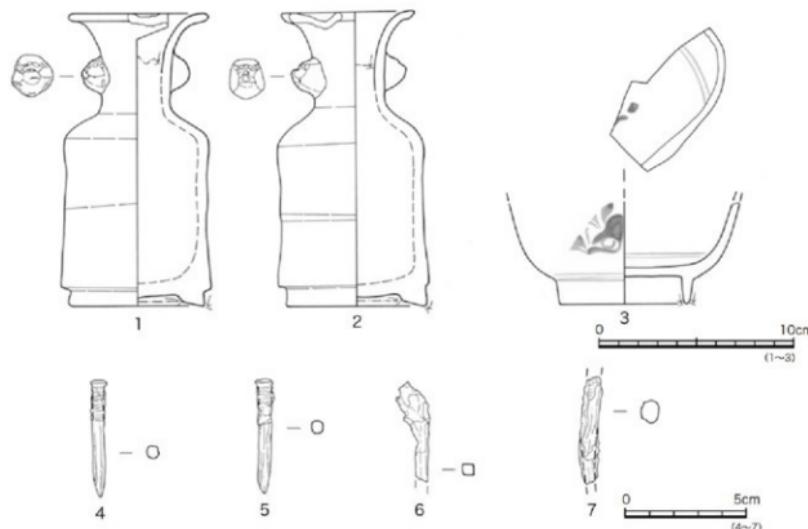
14号墓：石積み状況【南西より】



14号墓：石積み下部人骨出土状況【北東より】



38号墓：人骨・遺物出土状況【北西より】



第36図 14号墓出土遺物 沖縄産施釉陶器(1・2)、染付(3)、釘(4~7)



図版55 14号墓出土遺物

B) 38号墓

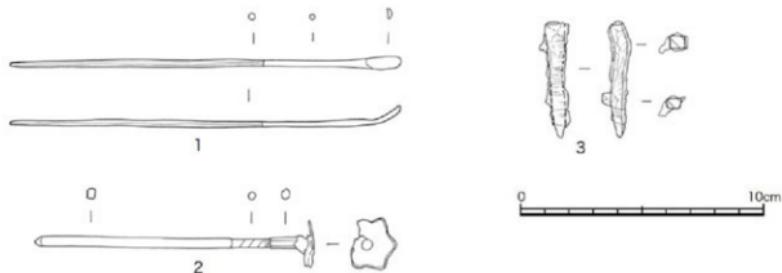
墓室内から16点の遺物が確認された。種類は沖縄産施釉陶器、中国産白磁・染付、金属製品等がある。本土産近現代磁器やガラス瓶等を含んでおらず、本古墓群でも古式の様相を呈する。

第44表 38号墓遺物出土一覧

出土地	室内 床面							
	沖縄産 施釉陶器		染付		白磁		金属製品	
種類	瓶	碗	小碗	小杯			釘	簪
					完品	破損・頭無し	I類	II類
個数	1	2	1	1	1	8	1	1



図版56 38号墓出土遺物集合



第37図 38号墓出土遺物 簪(1・2)、釘(3)



図版57 38号墓出土遺物

第14節 15号墓

1. 遺構

観察一覧(第45表)に示す。

2. 出土遺物

墓室内外から30点の遺物が確認された。種類は本土産近現代磁器、釘・近代瓦である。近代瓦27点を除きすべて1点確認されたのみである。



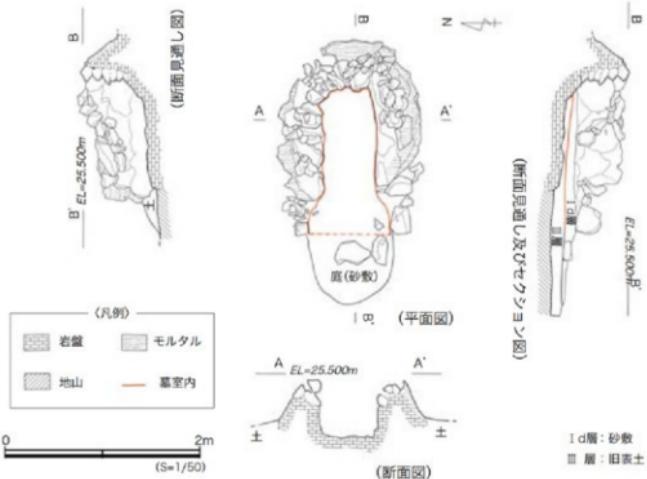
図版58 15号墓出土遺物集合

第45表 15号墓観察一覧

挿図番号	第38図												
図版番号	図版59												
立地	調査区中央の岩盤が露出しているやや平坦地。												
構造	<table border="1"> <tr> <td>分類</td><td>モルタルが掛かる墓(Ⅱ類C ii)</td></tr> <tr> <td>規模</td><td>縱(東-西軸)約2m×横(北-南軸)約1.4m 墓室内:縱約1.4m×横約0.5m×高さ約0.5m(残存状況から類推)</td></tr> <tr> <td>工法</td><td>地表から少し露出している石灰岩の岩盤を、墓室にかかる部分を削り、地面を少し掘り下げて整地。墓室内の圓い石積を積んで補足する。 墓室内奥壁:段が付くように削平した岩盤の上に石積みで補足。 墓室内右・左壁:岩盤を削平して壁面を形成し、その上に大小様々な石積みで補足。</td></tr> <tr> <td>天井</td><td>何を乗せていたかは不明だが、上からモルタルは掛けっていたと思われる。</td></tr> <tr> <td>床</td><td>墓室内奥側は削平した岩盤で、手前側は旧表土(Ⅲ層)直上を利用。</td></tr> <tr> <td>墓口</td><td>何で閉じられていたか不明。 墓口の方位:西</td></tr> </table>	分類	モルタルが掛かる墓(Ⅱ類C ii)	規模	縱(東-西軸)約2m×横(北-南軸)約1.4m 墓室内:縱約1.4m×横約0.5m×高さ約0.5m(残存状況から類推)	工法	地表から少し露出している石灰岩の岩盤を、墓室にかかる部分を削り、地面を少し掘り下げて整地。墓室内の圓い石積を積んで補足する。 墓室内奥壁:段が付くように削平した岩盤の上に石積みで補足。 墓室内右・左壁:岩盤を削平して壁面を形成し、その上に大小様々な石積みで補足。	天井	何を乗せていたかは不明だが、上からモルタルは掛けっていたと思われる。	床	墓室内奥側は削平した岩盤で、手前側は旧表土(Ⅲ層)直上を利用。	墓口	何で閉じられていたか不明。 墓口の方位:西
分類	モルタルが掛かる墓(Ⅱ類C ii)												
規模	縱(東-西軸)約2m×横(北-南軸)約1.4m 墓室内:縱約1.4m×横約0.5m×高さ約0.5m(残存状況から類推)												
工法	地表から少し露出している石灰岩の岩盤を、墓室にかかる部分を削り、地面を少し掘り下げて整地。墓室内の圓い石積を積んで補足する。 墓室内奥壁:段が付くように削平した岩盤の上に石積みで補足。 墓室内右・左壁:岩盤を削平して壁面を形成し、その上に大小様々な石積みで補足。												
天井	何を乗せていたかは不明だが、上からモルタルは掛けっていたと思われる。												
床	墓室内奥側は削平した岩盤で、手前側は旧表土(Ⅲ層)直上を利用。												
墓口	何で閉じられていたか不明。 墓口の方位:西												
人骨・遺物	墓室内から人骨・遺物がほとんど出土しないことから、持ち主によって移転されていると思われる。 墓室外から多数の瓦片が出ている。												
葬法分類	一次葬(Ⅰ類A)												
砂敷(Ⅰd層)	墓室内から墓口前まで砂が敷かれており、墓口前に砂敷して庭を形成していると思われる。												
時期	近・現代												
備考	墓口前には上面を平坦に仕上げた石灰岩の石があるが、供物か香炉を置く台石か。 聞き取りによると墓の関係者が近年、墓室から人骨を取り出し、その後に天井を壊して廃棄したとのことである。												

第46表 15号墓遺物出土一覧

出土地	室内 床面	室外 表土		
種類	金属製品	本土産近・現代磁器		瓦
器種	釘	筒碗	器種不明	
分類	破片・頭有り			
個数	1	1	1	27



第38図 15号墓



正面〔西より〕



モルタル付着部〔南より〕



墓室内〔南より〕



完掘状況〔西より〕

図版59 15号墓

第15節 17号遺構

1. 遺構

観察一覧（第47表）に示す。

2. 出土遺物

墓室内外から18点の遺物が確認された。種類は沖縄産陶器、中国産染付、本土産近現代磁器、鉄片、ガラス瓶、近代瓦等がある。沖縄産無釉陶器の擂鉢が1点墓室内で確認された他はすべて墓室外から確認された。

1は沖縄産施釉陶器の碗である。分類はⅡ-A a 有文①。白化粧に透明釉を施す。呉須で草文を施す。口縁部直下に砂が多量に付着する。素地は橙色で微粒子。口径14.0cm。遺構外表土より出土。

2は沖縄産施釉陶器の酒器である。分類はⅢ。光沢を持つ赤褐色の釉を腰部まで施し、高台は露胎とする。釉に黒斑が浮き出ている。本古墓群から出土した沖縄産施釉陶器の中ではこのような釉は少ない。素地は配色で微粒子。底径6.6cm。遺構外表土より出土。

第47表 17号遺構観察一覧

挿図番号	第39図
図版番号	図版61
立地	16号墓から南西に約450mの位置にある平坦地。
構造	性格不明遺構。
	規模 竪(北-南軸)約5.7m×横(東-西軸)約4m 遺構内縦約4.1m×横約2m×高さ不明
	工法 一部石灰岩の岩盤と地面の上に、長方形状に石積みを組む。
	天井 不明。
	床 旧表土(Ⅲ層)直上を利用していたと思われる。
	入口 残存状況からは判別不可。
遺物出土状況	遺構外から本土産近・現代磁器を中心に遺物が散在していた。
時期	近・現代
備考	町民からの聞き取りでは家畜小屋があった位置のこと。

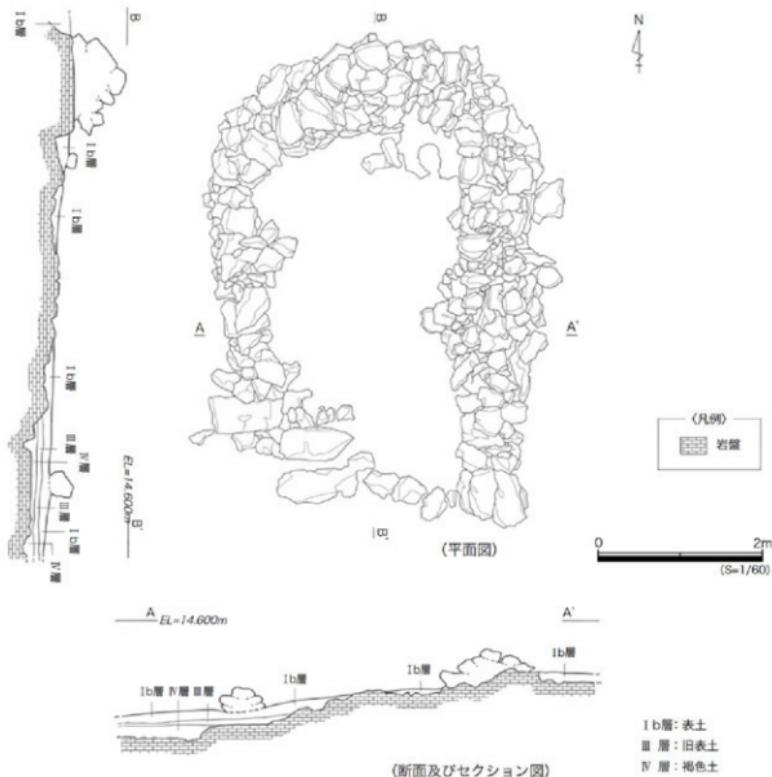
第48表 17号遺構遺物出土状況

器種・分類	出土土地種類	遺構内床面			遺構外						合計	
					表土							
		沖縄産無釉陶器	瓦	小計	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	染付	本土産近・現代磁器	金属製品	ガラス製品	瓦	
碗	Ⅱ類A・a 有文①	0	1	1							1	1
	分類なし	0						2			2	2
小碗		0						1			1	1
筒碗		0						1			1	1
皿		0					1	2			3	3
壺		0		1							1	1
擂鉢	1	1									0	1
酒器	Ⅲ類	0	1	1							1	1
鉄片		0						1			1	1
ガラス瓶		0							1		1	1
瓦		1	1	2						4	4	5
合計		1	1	2	2	1	1	6	1	1	4	18



図版60 17号遺構出土遺物集合

(断面及びセクション図)



第39図 17号造構



近景〔南西より〕



西壁面〔南東より〕

図版61 17号造構①

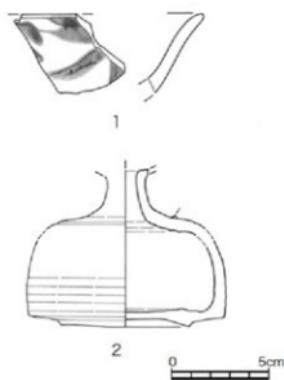


全景【南より】

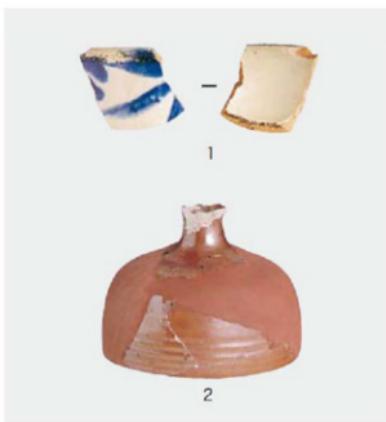


全景：奥はティンダバナ【西より】

図版62 17号遺構②



第40図 17号遺構出土遺物 沖縄産施釉陶器



図版63 17号遺構出土遺物

第16節 20・21号遺構

1. 遺構

観察一覧（第49表）に示す。

第49表 20・21号遺構観察一覧

挿図番号	—
図版番号	図版64
立地	調査区北西側の斜面地。
構造	分類 二つとも性格不明遺構(集石遺構)。
	規模 20号遺構: 縦(北東ー南西軸)約3.8m×横(北西ー南東軸)約3.7m×高さ約0.1~0.5m 21号遺構: 縦(東ー西軸)約2.8m×横(北ー南軸)約1.2m×高さ約0.2~0.3m
	工法 二つとも斜面地に多くの躰石を小高く積む。
遺物出土状況	二つとも出土遺物無し。
時期	二つとも不明
備考	二つとも立地条件が似ており、近くに位置する。



20号遺構：遺構断面状況〔西より〕



21号遺構：全景〔南より〕

図版64 20・21号遺構

第17節 22号墓

1. 遺構

観察一覧（第50表）に示す。

2. 出土遺物

墓室内外や庭から22点の遺物が確認された。種類は沖縄産無釉陶器、中国産染付、肥前系染付、本土産近現代磁器、金属製品、ガラス瓶がある。墓室内からは中国産、肥前系染付、沖縄産施釉陶器が主体的に確認されているが、すべて小破片のためこの古墓に伴うものかは疑問である。



図版65 22号墓出土遺物集合

第50表 22号墓観察一覧

挿図番号	第41図
図版番号	図版66
立地	調査区西側の石灰岩の岩盤が露出している斜面地。
構造	石積石室墓（I類Bii b）
	規模 縱（北東—南西軸）約6.6m×横（北西—南東軸）約3m 墓室内：縦約1.6m×横約1.1m×高さ約0.4～0.7m（残存状況より類推）
	工法 地表から露出している石灰岩の岩盤をそのまま利用し、墓室内の開いを石積みで補足する。 墓室内奥・右・左壁：自然に突き出ている岩盤の上に石積みで補足。
	天井 清掃段階で墓室内に大きな石（石灰岩）が崩落していたので、蓋石を乗せていたと思われる。
	床 旧表土（III層）直上を利用している。
	墓口 何で閉じられていたかは不明。 墓口の方位：南西
人骨・遺物 出土状況	人骨・遺物が少量しか出土しないことから、これらは持ち主によって移転されていると思われる。
葬法分類	葬法不明（III類）
砂敷（I d層）	墓室内から墓口前にかけて砂が敷かれている。 沖縄で良く見られる近・現代の墓のように、墓口前には石積みによる墓庭を形成しており、砂敷もこの墓庭の範囲内で広がりが見られる。
時期	近世～近・現代
備考	破損状況が著しい。 墓口付近にある石組は隙間に砂が盛られており、その上には使用後の線香がたまっていたことから、砂に線香を立てて、周りを石で囲う香炉代わりのようなものか。そうすると、墓室内の範囲は図示したものよりも狭まる可能性が出てくる。 墓の位置を確認した時は墓庭を形成している石組みや砂敷（庭）には盛土が被っていた。



第41図 22号墓



墓全景〔南西より〕



盛土範囲〔南東より〕



墓室内：正面〔南西より〕



墓室内：平面〔南西より〕



墓室内砂：炭集中部〔南西より〕

図版66 22号墓

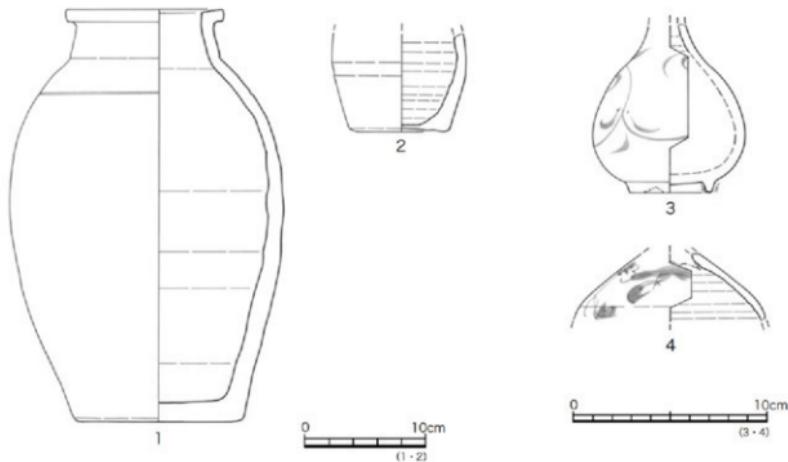
第51表 22号墓遺物出土状況

器種・分類	出土地 種類	室内 床面				室外 表土						庭				合計	
		沖縄産 施釉陶器	染付	肥前系 染付	小計	沖縄産 施釉陶器	沖縄産 無釉陶器	染付	本土產 近・現代 器	金属 製品	ガラス 製品	小計	沖縄産 無釉陶器	金属 製品	ガラス 製品	小計	
碗	I類・B	1		1								0			0	1	
	II類・B・a	1		1								0			0	1	
	分類なし	1		1								0			0	1	
小碗	I類・C			0	2							2			0	2	
	分類なし			0					1			1			0	1	
蓋	I類・A			0		1						1			0	1	
	II類・B			0								0	1		1	1	
	IV類			0								0	1		1	1	
	V類・A			0		1						1			0	1	
	分類なし			0		1						1			0	1	
小壺		1		1								0			0	1	
瓶			1	1				1	1			2			0	3	
酒器		2		2								0			0	2	
蓋				0				1				1			0	1	
器	I類			0					1	1					0	1	
	皿類			0							0		1	1	1	1	
ガラス瓶				0							1	1		1	1	2	
合計		5	1	1	7	2	3	1	3	1	1	11	2	1	1	4	22

第52表 22号墓出土遺物観察一覧

単位:cm

捕獲番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径 器高 底径	分類	観察所見	出土地
第42図 ・図版 67	沖縄産 無釉陶器	1	壺	口～底	13.0 33.9 14.0	V-A	全体的に丁寧な成形である。肩部から肩部の立ち上がりが屈曲して綾を持つ。口縁端部は方形に成形しシャープである。内面は輪轍成形痕が目立つ。素地は明褐色で微粒子。	室外 表土
		2		胴～底	- - 8.2	IV	成形が雑である。内面は輪轍成形痕が目立つ。素地は暗赤褐色で細粒子、大粒の砂粒が目立ち、内外面に露出する。	庭
	肥前系 染付	3	瓶	頸～底	- - 4.5	-	肥前系。18世紀頃。外面に唐草文。全体に灰白色の釉が掛かる。墨付けは釉剥ぎ。素地は灰白色微粒子。	室内 床面
	染付	4	小壺	胴	- - -	-	外面に蔓草文(?)が描かれている。内面に輪轍痕。外面のみ透明釉が掛かる。素地は灰色細粒子。	



第42図 22号墓出土遺物 沖縄産無釉陶器（1・2）、染付（4）、肥前系染付（3）



図版67 22号墓出土遺物

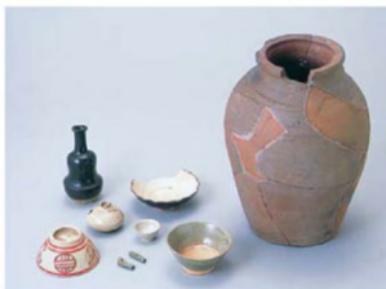
第18節 23号墓

1. 遺構

観察一覧（第53表）に示す。

2. 出土遺物

墓室内から9点の遺物が確認された。すべて沖縄で生産されたもので、沖縄産施釉陶器・無釉陶器、煙管の雁首と吸口がある。沖縄産施釉陶器では、碗・皿・杯・瓶、沖縄産無釉陶器では壺が確認されており、灰釉碗と色絵が確認されたことをのぞけば、1器種1点の構成となっている。また、本土産近現代磁器が確認されないことから、本古墓群のなかでも古式の様相を呈すると考えられる。



図版68 23号墓出土遺物集合

第53表 23号墓観察一覧

挿図番号	第43図												
図版番号	図版69												
立地	調査区西側の石灰岩の岩盤が露出している斜面地。												
構造	<table border="1"> <tr> <td>分類</td><td>石積石室墓(Ⅰ類A i b)</td></tr> <tr> <td>規模</td><td>縱(北東-南西軸)約2.7m×横(北西-南西軸)約3m 墓室内: 約0.5m四方×高さ約0.5m</td></tr> <tr> <td>工法</td><td>地表から少し露出している石灰岩の岩盤を、墓室内にかかる部分を削り、地面を少し掘り下げて整地。墓室内を大きな石灰岩の板石で囲い、その上から礫石を積んでいる。墓室の周りには多くの礫石で小高く積む。 墓室内奥壁: 岩盤を削平して壁面を形成し、その上に石積みで補足。 墓室内右・左壁: 大きな板石(石灰岩)を置き、その上に石積みで補足。</td></tr> <tr> <td>天井</td><td>蓋石(石灰岩)二枚で重ねて閉じる。</td></tr> <tr> <td>床</td><td>床石(砂岩)が敷かれており、その直上を床として使用していたと思われる。</td></tr> <tr> <td>墓口</td><td>板石(石灰岩)と礫石を併用して閉じている。 墓口の方位: 南西</td></tr> </table>	分類	石積石室墓(Ⅰ類A i b)	規模	縱(北東-南西軸)約2.7m×横(北西-南西軸)約3m 墓室内: 約0.5m四方×高さ約0.5m	工法	地表から少し露出している石灰岩の岩盤を、墓室内にかかる部分を削り、地面を少し掘り下げて整地。墓室内を大きな石灰岩の板石で囲い、その上から礫石を積んでいる。墓室の周りには多くの礫石で小高く積む。 墓室内奥壁: 岩盤を削平して壁面を形成し、その上に石積みで補足。 墓室内右・左壁: 大きな板石(石灰岩)を置き、その上に石積みで補足。	天井	蓋石(石灰岩)二枚で重ねて閉じる。	床	床石(砂岩)が敷かれており、その直上を床として使用していたと思われる。	墓口	板石(石灰岩)と礫石を併用して閉じている。 墓口の方位: 南西
分類	石積石室墓(Ⅰ類A i b)												
規模	縱(北東-南西軸)約2.7m×横(北西-南西軸)約3m 墓室内: 約0.5m四方×高さ約0.5m												
工法	地表から少し露出している石灰岩の岩盤を、墓室内にかかる部分を削り、地面を少し掘り下げて整地。墓室内を大きな石灰岩の板石で囲い、その上から礫石を積んでいる。墓室の周りには多くの礫石で小高く積む。 墓室内奥壁: 岩盤を削平して壁面を形成し、その上に石積みで補足。 墓室内右・左壁: 大きな板石(石灰岩)を置き、その上に石積みで補足。												
天井	蓋石(石灰岩)二枚で重ねて閉じる。												
床	床石(砂岩)が敷かれており、その直上を床として使用していたと思われる。												
墓口	板石(石灰岩)と礫石を併用して閉じている。 墓口の方位: 南西												
人骨・遺物出土状況	墓室内から人骨は散在して出土しており、遺物は沖縄産施釉陶器を中心に出土。												
葬法分類	二次葬(Ⅱ類C)												
砂敷(Ⅰd層)	墓室内の墓口付近から墓口前に砂が敷かれていて、墓口前は砂敷で庭を形成。												
時期	近世～近代												
備考	墓室外から沖縄産無釉陶器の壺が出土しているが、この墓に関係するものかは不明。												

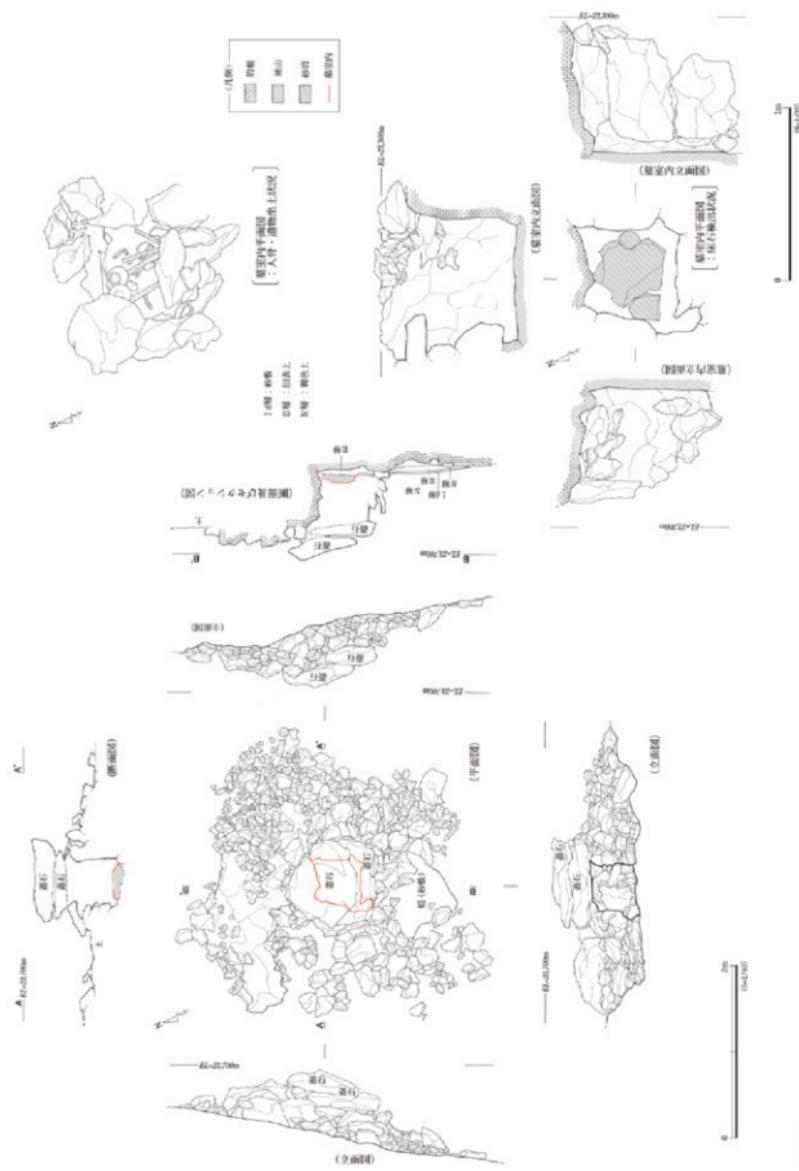


图43图 23号图



墓全景 [南西より]



墓室内：人骨・遺物出土状況 [南西より]



墓口：板石 [南西より]



墓室内：床石（砂岩）検出状況 [南西より]



墓室内：石積み状況 [北西より]

第54表 23号墓遺物出土一覧

出土地	墓室内 床面						
種類	沖縄産施釉陶器					沖縄産 無釉陶器	煙管
器種	碗	皿	杯	壺	瓶	壺	瓶首 吸口
分類	I類 - A - 無文 有文②	II類 - A - a	II類 - Z - C	I類 - B	V類 - A 小 II類 - I - 無文	V類 - B	
個数	1	1	1	1	1	1	1

第55表 23号墓出土遺物観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径/縁径 器高/長さ 底径/輪径	分類	観察所見	出土地
第44 図・ 図版 70	沖縄産 施釉陶器	1	碗	口～底	12.8 6.3 6.5	I-A	青灰色の釉。素地は鈍い橙色で細粒子。	室内 床面
		2			12.6 5.95 6.2	II-Aa	白化粧に透明釉を施すが、見込みは蛇目状に釉剥ぎ。疊付けにはアルミナが付着。高台外底面の白化粧は雑で、塗られていない場所がある。外面には赤絵で丸内に格子文と花卉文がそれぞれ2つ交互に描かれる。見込みの蛇目状に釉剥ぎされた場所には赤絵で3条の圓線が描かれる。	
		3	杯	口～底	5.85 2.9 2.6	I-B	灰釉。内部絶釉、外面は腰部まで釉が施される。口唇部は釉剥ぎ。素地は白灰色で微粒子。	
		4	壺	口～底	2.0 5.8 4.1	V-A	白化粧に透明釉を高台脇まで施す。腰部が強く張りゆるやかに頭部に至る。短頸で口縁部が外反する。高台の成形が丁寧である。素地は茶褐色で微粒子。	
		5	皿	口～底	15.0 4.7 7.0	II-2c	口唇部を面取りする。外面に厚い黒色釉を施した後、内部に白化粧と透明釉を施し、さらにその後、口唇部に再び黒色釉を施している。内部に貫入が目立つ。見込みは蛇目状に釉剥ぎし、アルミナが付着する。素地は淡橙色で細粒子。	
	沖縄産 無釉陶器	6	壺	口～底	16.4 39.7 19.0	V-B	肩部から頭部への立ち上がりがなめらかで、口縁部の作りに丸みを持たせる。外面には自然釉が掛かる。肩部に「十」と「一」の判がある。素地は暗赤褐色で細粒子。	
	沖縄産 施釉陶器	7	瓶	口～底	3.4 17.0 5.6	II-1	胴部のくびれ部に4条の沈圓線。黒色釉を腰部まで施し、高台は露胎。疊付けに多量の砂が付着する。素地は灰色で微粒子。	
	煙管	8	雁首	完形	- 4.3 -	-	火皿外径1.1cm、火皿内径1.0cm。羅宇接続部外径1.1cm、羅宇接続部内径0.9cm、重量7.3g。胴部の上面だけは平坦に形成し、断面で見ると半円形となる。火皿は緩やかなラッパ状。羅宇接続部付近に斜めに走る沈線が一部見られる。銅製。	
		9	吸口	完形	- 4.1 -	-	吸口外径0.8cm、吸口内径0.5cm。羅宇接続部外径1.0cm、羅宇接続部内径0.8cm、重量7.4g。胴部は羅宇接続部から2.0cmの所まではほぼストレートで、そこから吸口に向かって緩やかに狭まり、吸口のみ段を有して外反する。内部には竹と思われる羅宇が残存。羅宇接続部付近には斜めに走る沈線が一部見られる。8と一对か。銅製。	



第44図 23号墓出土遺物 沖縄産施釉陶器（1～5・7）、沖縄産無釉陶器（6）、煙管（8・9）



图版70 23号墓出土遗物

第19節 24号墓

1. 遺構

観察一覧（第56表）に示す。

2. 出土遺物

墓室内外や庭から53点の遺物が確認された。中でも墓室内は40点と多数を占めている。種類は沖縄産無釉陶器転用藏骨器、沖縄産施釉陶器、中国産磁器、肥前系磁器、煙管・簪等の金属製品がある。過半数を占める沖縄産陶器の器種構成も豊富で、施釉陶器では碗・皿・杯・瓶・酒器・壺、無釉陶器では壺・鉢・水甕の器種が確認された。本土産近現代磁器やガラス製品等を全く含まない希少な古墓である。遺物群の構成や転用藏骨器が6基確認されていることからも、近世から長期的に使用された墓と考えられ、本古墓群の中でも古式の様相を呈する。



図版71 24号墓出土遺物集合

第56表 24号墓観察一覧

挿図番号	第45図
図版番号	図版72
立地	調査区西側の石灰岩の岩盤が露出している斜面地。
構造	<p>分類 石積石室墓(I類A・b)</p> <p>規模 縦(東-西軸)約1.8m×横(北-南軸)約2.2m 墓室内: 縦約0.8m×横約1m×高さ約0.5m</p> <p>工法 地表から少し露出している石灰岩の岩盤を、墓室内にかかる部分を少し削り、その岩盤に沿って地山まで掘り下げて整地。整地した後に床に砂利(IIb層)を敷いてある。墓室の圍いは石積みで補足し、墓室の周りには多くの礫石を小高く積む。 墓室内奥壁: 少し削った岩盤と、地山の上に石積み。 墓室内左壁: 少し削った岩盤の上に大きい礫石を積んで補足。 墓室内右壁: 少し削った岩盤の上に石積みで補足。</p> <p>天井 割れてはいるが、一枚の蓋石(ピーチロック)で閉じていたと思われる。</p> <p>床 床石(砂岩)が敷かれており、その直上を床として使用していたと思われる。その床石下には砂利(IIb層)が敷いている。</p> <p>墓口 庭に落ちている板石(砂岩)と礫石を併用して閉じていたと思われる。 墓口の方位: 西</p>
人骨・遺物出土状況	墓室内から大量の人骨が転用藏骨器6点に収められており、遺物は沖縄産施釉陶器を中心に出土。転用藏骨器1・5・6内より焼骨が出ている。
葬法分類	二次葬(II類B-a)
砂敷(I d層)	墓口前に砂が敷かれており、庭を形成していると思われる。
時期	近世～近・現代
備考	墓室内では沖縄産施釉陶器が中心に、墓室外では沖縄産無釉陶器が中心に出土している。



墓全景【南西より】



墓室内・庭：人骨・遺物出土状況【南西より】



墓室内：床石検出状況【南西より】



墓室内：砂利敷き【南西より】



完掘状況【北西より】

図版72 24号墓

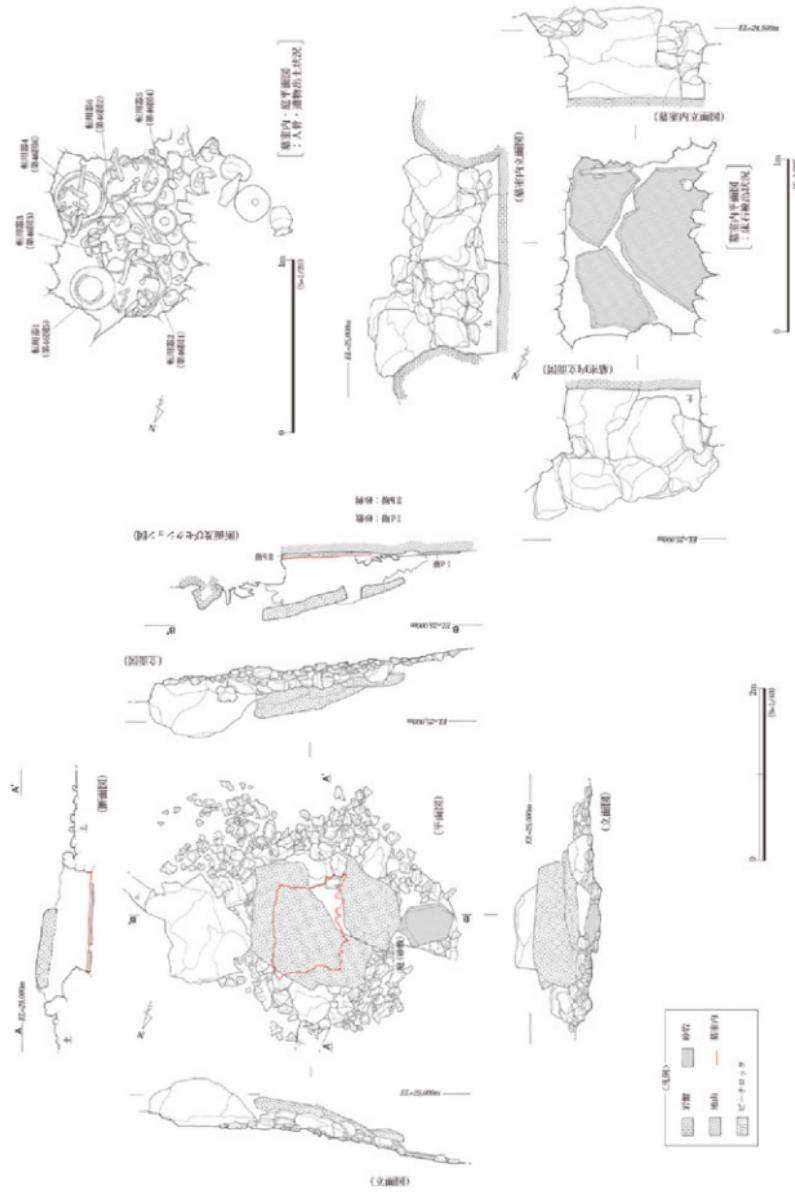


图45图 24号墓

第57表 24号墓遺物出土状況

器種・分類	出土地 種類	室内										室外 表土				庭			合計					
		床面					床下					小計		冲縄産 無釉陶器		本土産 直・現代 陶器		小計		冲縄産 無釉陶器		本土産 直・現代 陶器		
		転用 藏骨器	沖縄産 無釉陶器	白磁	色絵	釉硝解 染付	肥前系 染付	本土産 近・現代 陶器	金属 製品	白磁														
碗	A 無文		6								6	1			1						0	7		
	I類	B	1								1				0						0	1		
	無文		1								1	1			1						0	2		
皿	II類	I B	1								1				0						0	1		
	分類なし			1		1					2				0						0	2		
	小杯			1		1					1	1	4		0						0	4		
盃	B	1									1				0						0	1		
	I類	大 無文	1								1				0						0	1		
	小		1								1				0						0	1		
瓶	B										0				0						1	1	1	
	II類	I A 小	1								1				0						0	1		
	2 大		1								1				0						0	1		
IV類	V類										0		1		1						0	1		
	VI類										0		1		1						0	1		
	分類なし	1									1		3		3						0	4		
瓶	II類	I 無文	1								1				0						0	1		
	VI類	1	1								1				0						0	1		
	X類	2		2							2				0						0	2		
鉢		1									1				0						0	1		
	水甕	3									3		1		1						0	4		
	蓋				1	1					2				0						0	2		
酒器	I類	3		1							1				0						0	1		
	II類	I 無文		1							1				0						0	1		
煙管	吸口										1	1			0						0	1		
	II類										2	2			0						0	2		
	III類										2	2			0						0	2		
鉄片											1	1			0						0	1		
	器種不明										1		1								2	2		
	合計	6	19	1	1	1	2	2	7	1	40	2	6	2	10	1	2	3	53					

第58表 a 24号墓出土遺物観察一覧

単位: cm

掲出番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径 / 縁径 高径 / 底径 / 撻径	分類	観察所見	出土地
第46 図 ・ 図 版 73	転用 藏骨器	1	水甕	口	31.4 — —	—	沖縄産無釉陶器の藏骨器転用品である。1つの水甕を3分割して、利用している。1は口縁部を、2は胴部を、3は底部を利用している。水甕の器形は底部から斜めに立ち上がり、肩が張って一端収縮し、口縁部に向かって垂直に立ち上がる。口縁部は歯ブラシ状に肥厚する。肩部に太い突帯が1条巡る。素地は赤褐色で微粒子。	室内 床面
		2		胴	— — —	—		
		3		底	— 42.4 22.0	—		
		4	壺	底	— 19.3	—	沖縄産無釉陶器壺の転用品である、底部を利用して立てる。素地は暗赤褐色で微粒子。	
		5	鉢	口～底	13.2 — —	—	沖縄産無釉陶器壺の転用品である。底部からやや丸みを持って立ち上がり、口縁部をL字状に折り曲げる。底部には大きな穴を開けている。素地は暗赤褐色で微粒子。大粒の砂粒が多量に混入する。	
		6	壺	口～底	30.8 13.2 16.0	I-B	成形が全体的に稚である。頭部の立ち上がりに稜を持つたせ、口縁部を方形に形成するが、Aと比較して丁寧ではなく、丸みを持つ。素地は赤褐色で微粒子。肩部に1条の沈刻線が巡り、その上に「十」と「一」の判。同様の判が2・3号墓の壺(6)でも確認された。	

第58表 b 24号墓出土遺物観察一覧

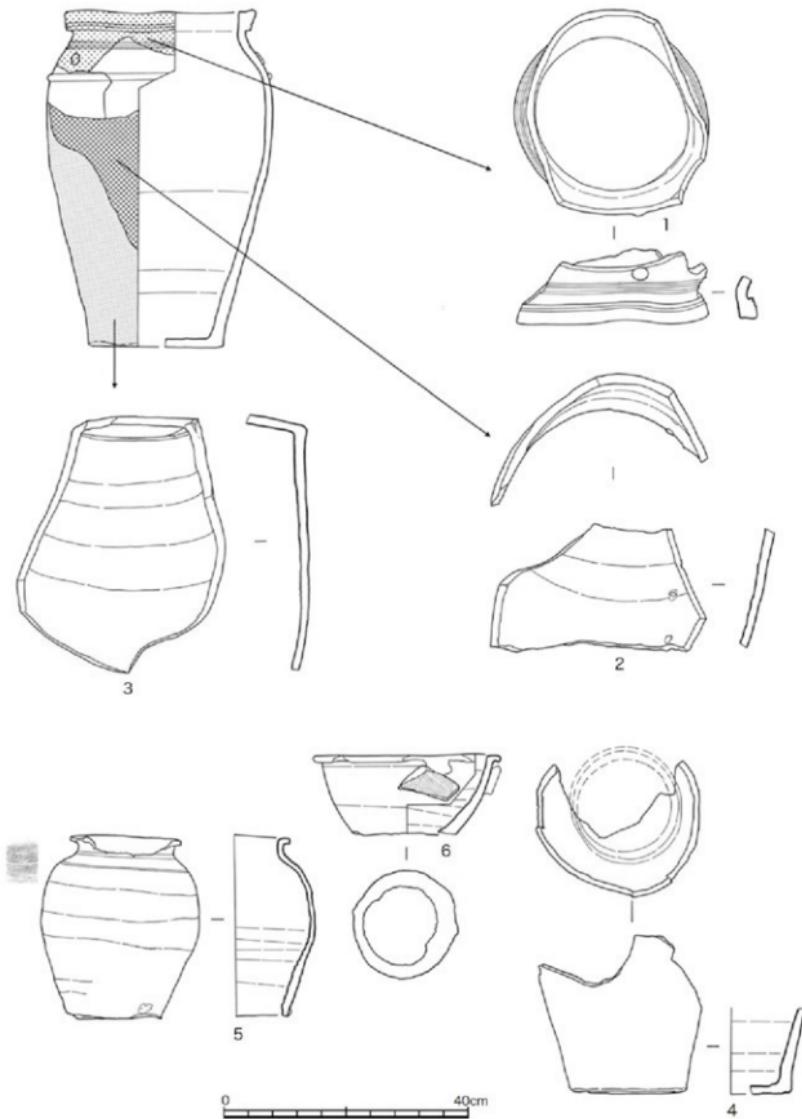
単位: cm

振団番号 國版番号	種類	番号	器種	部位	口径 / 緑径 器高 / 底径 / 捨徑	分類	観察所見	出土地
第47 図 ・ 國 版 74	沖縄產 施釉陶器	7	碗	口～底	13.3 6.6 6.2	I - A	灰釉。素地はにぶい橙色で細粒子。見込みに砂が円形に付着する。	室内 床面
					13.6 6.8 6.2	I - A	灰釉。素地はにぶい橙色で細粒子。	
					13.1 7.0 6.4	I - A	灰釉。素地は淡黄色で細粒子。	
					13.3 6.8 6.4	I - B	褐色の釉を施す。素地はにぶい橙色で細粒子。	
		11	皿	口～底	13.3 4.4 6.6	II - 1 B	口唇部を丸く成形。外面は胎色釉で縦釉するが、高台外底面は難で露胎部分がある。内面は白化粧に透明釉を施し、見込みは鉢口状に釉剥ぎする。見込みの露胎部にアルミナが付着。素地は灰白色で細粒子。	
					3.45 20.35 6.4	II - 1	胎色釉を高台脇まで施し、高台は露胎とする。高台の成形が丁寧で、豊付けを方形にする。腰部に2条の沈割線、肩部中央に3条の沈割線を施す。素地は配色で細粒子。	
		12	瓶	口～底	—	VI - 1	外面の形状は1・4・5と似るが、高台の成形が異なる。方形に内削りを行い、豊付けを方形とする。にぶい淡黄色の釉が腰部下方まで施され、高台は露胎する。素地は淡黄色で微粒子。	
					2.6 14.8 5.0	VI - 1	外面の形状は1・3と似るが、高台の成形が異なる。高台を持つが外底面は上底状を呈する。淡緑色の釉が腰部まで施され、高台は露胎する。素地は淡緑色で細粒子。	
		13	瓶	頸～底	— — 4.8	VI - 2	外面の形状は1・3と似るが、高台の成形が異なる。高台を持つが外底面は上底状を呈する。肩部と頸部の境界附近に3条の沈割線が巡る。淡緑色の釉が高台脇まで施され、高台は露胎する。高台外底面にアルミナが付着。素地は淡緑色で細粒子。	
					— — 5.1	VI - 2	外面の形状は1・3と似るが、高台の成形が異なる。高台を持つが外底面は上底状を呈する。肩部と頸部の境界附近に3条の沈割線が巡る。淡緑色の釉が高台脇まで施され、高台は露胎する。高台外底面にアルミナが付着。素地は淡緑色で細粒子。	
		14	瓶	頸～底	— — 4.8	I	大型。高台の成形が丁寧で、豊付けを方形にする。褐色釉が腰部まで施され、高台は露胎する。素地は白灰色で微粒子。	
					— — 5.1	I	大型。器形、成型方法、釉色、素地等は1・6と良く似る。腹部に砂が多量に付着。	
		15	壺	口～底	— — 6.8	II - 1	小型。器形、成型方法、釉色、素地等は1・6と良く似る。腹部に砂が多量に付着。	
					4.2 8.6 4.2	II - 1	小型。淡緑色の釉を腰部まで施し、高台は露胎する。高台の内削りが明確な方形ではなく、斜めになっている。高台、腰部に砂が付着する。素地は微粒子。	
		16	壺	頸～底	— — 6.8	I	大型。黒色釉を腰部まで施し、高台は露胎する。高台外底面は上底状を呈する。素地は暗赤褐色で微粒子。大粒の砂粒が混入し、表面に露出している。八重山産の可能性もある。	室内 床面
					3.4 6.8 3.45	II - 2	大型、黒色釉を腰部まで施し、高台は露胎する。高台外底面は上底状を呈する。素地は暗赤褐色で微粒子。大粒の砂粒が混入し、表面に露出している。八重山産の可能性もある。	
		17	壺	頸～底	— — 6.1	II - 2	大型、黒色釉を腰部まで施し、高台は露胎する。高台外底面は上底状を呈する。素地は暗赤褐色で微粒子。大粒の砂粒が混入し、表面に露出している。八重山産の可能性もある。	庭
					— — 6.1	II - 2	大型、黒色釉を腰部まで施し、高台は露胎する。高台外底面は上底状を呈する。素地は暗赤褐色で微粒子。大粒の砂粒が混入し、表面に露出している。八重山産の可能性もある。	
第48 図 ・ 國 版 75	沖縄產 施釉陶器	20	酒器	口～底	3.4 9.4 8.0	I - 3	褐色釉を腰部まで施し、高台は露胎する。素地はにぶい乳白色で細粒子。	室内 床面
					2.1 21.0 6.2	X	青緑色で色ムラが目立つ釉を底部付近まで施し、底部は露胎する。素地はにぶい乳白色で微粒子。	
		21	瓶	口～底	8.3 14.95 7.0	II - B	小型。成形が全体的に難である。素地は暗灰色で細粒子、大粒の砂粒が混入する。	室外 表土
					— — 9.0	IV	全体的に成形が難である。肩部と頸部の境界に5条の、肩部に1条の、肩部下方に3条の沈割線が巡る。素地は暗赤褐色で微粒子。	

第58表 c 24号墓出土遺物觀察一覧

単位: cm

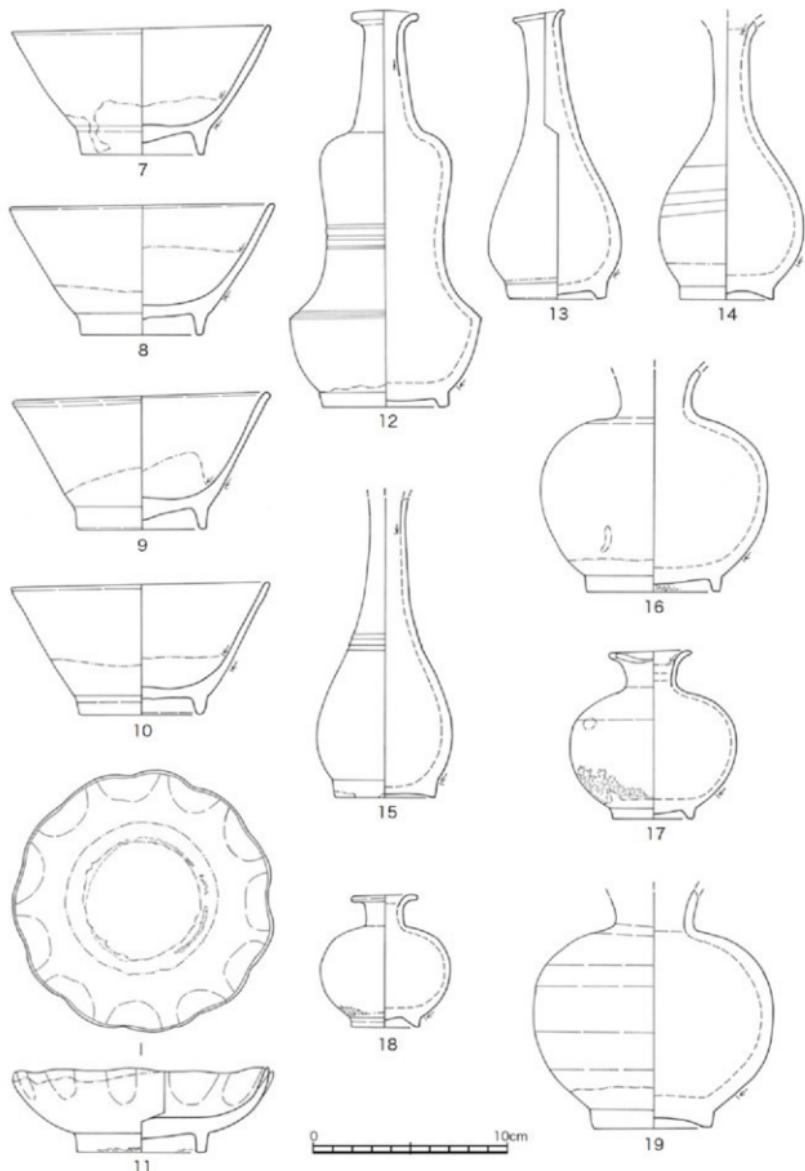
掲載番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径 / 緯径 器高 底径 / 撇径	分類	観察所見	出土地
第48図 ・ 図版 75	沖縄産 施釉陶器	24	蓋	口～胴	13.8 — —	V-A	中型。全体的に成形が丁寧である。肩部から頭部にかけて屈曲し、明瞭な稜を持つ。口縁部をL字に折り曲げ、シャープに成形する。肩部に2条の沈窓線が巡る。素地は暗赤褐色で微粒子。	室外 表土
		25		肩～底	— — 14.7	IX	全体的に丁寧な成形である。肩部に7条の沈窓線が巡る。素地は微粒子だが、大粒の砂粒が多量に混入し、表面に露出している。その中に沈波状文を施す。内面は輪廻成形痕が頗著に残る。外面上にマンガン釉が施される。素地は暗褐色で微粒子。大粒の砂粒が混入する。	室内 床面
		26	水漬	口～底	44.0 — —	—	肩が張り、頭部に向かって収縮して口縁部が外反する。口縁端部を上面に向けて舌状に成形する。肩部に2条の沈窓線が巡り、その中に沈波状文を施す。内面は輪廻成形痕が頗著に残る。外面上にマンガン釉が施される。素地は暗褐色で微粒子。大粒の砂粒が混入する。	室外 表土
第49図 ・ 図版 76	肥前系 染付	27	皿	口～底	15.0 2.5 8.1	—	波佐見焼の五寸皿。1680年代～1740年代。腰部が丸く張り、口縁が直口する。内面に二重斜格子文と半菊花文。見込み中に五弁花文。見込みに3条の輪廻線が入る。全体に青みを帯びた透明釉が掛かる。口唇部は口禿げ。見込みは蛇目釉割ぎ。豊付けも釉割ぎ。素地は灰白色微粒子。	室内 床面
		28	蓋	甲～縁	13.0 — 11.5	—	肥前産。18世紀後半～19世紀前半。外面に銀杏文二つ一组が対に、簡略化した寿文が対に配置。摘み下部に二条、蓋置き部に一条輪廻線が入る。全体に青みを帯びた透明釉が掛かる。蓋置き部は釉割ぎされ、砂状のアルミニウムが付着。素地は灰白色微粒子。描みが欠落している。	
	色絵	29	皿	口～底	15.3 2.8 8.8	—	徳化窯系(?)。高台から口縁部にかけて丸みを帯び、口縁部は外反する。内面に丸文(中は格子状の絵付け)が三つ、見込みに丸窓に寿文が入る。内面三つの丸文と草花文が交互に描かれている。全体に灰白色の釉が掛かる。豊付けは釉割ぎ。素地は灰白色微粒子。	室内 床面
	白磁	30	小杯	口～底	4.55 3.15 1.9	—	徳化窯系。大きめの小杯。型成形。腰部が少し折れ、直に立ち上がる。口縁部が弱く外反する。全体に透明釉が掛かる。豊付けは釉割ぎ。素地は白色微粒子。	
		31			3.55 2.1 1.8	—	徳化窯系。型成形。口縁部が弱く外反する。全体に透明釉が掛かる。口唇部は口禿げ。豊付けは釉割ぎ。素地は白色微粒子。	室内 床下
	瑠璃釉	32	小杯	口～底	3.85 1.8 2.0	—	型成形。口縁部は直口。外面のみに瑠璃釉が掛かる。内面は白濁した釉が掛かる。口唇部は口禿げ。豊付けは釉割ぎ。素地は観察出来ず。	室内 床面
	金属製品	33	小杯	口～底	3.3 1.75 1.7	—	金属製の小杯である。高台を作るが内削りは行わず、平坦である。腰部から丸みを持って立ち上がり、口縁部が外反する。口唇部は丸みを持たせる。本古墓群から1例のみ確認された。	
	簪	34	—	破損	— — —	II	竿の断面はおそらく六角形だと思われるが、面の磨耗が著しい。先端から10.5cmの所で、ぐの字にねじじて折れ曲がる。長さ16.1cm、幅0.4cm、厚さ0.35cm。重量5.2g。銅製。	室内床面 (転用蟲骨器1内)
		35	—	完形	— — —	II	竿の断面が六角形で、先端から10.9cmの所で段を有し、そこからカブまで断面がやや丸みをおびた六角形となる。先端部は六角錐となる。長さ16.65cm、幅0.5cm、厚さ0.4cm、重量8.6g。銅製。	室内 床面
		36	—	完形	— — —	III	竿の断面は六角形で、先端から15.2cmの所で面が互い違いになる。竿は先端に向かい若干太くなる。先端部は六角錐。長さ21.85cm、幅2.1cm、厚さ0.6cm。重量27.0g。銅製。	室内床面 (転用器5内)
	煙管	37	—	破損	— — —	—	長さ6.75cm、重量8.1g。羅宇接続部付近は少しつぶれており、接合痕に約4.5cm亀裂が入っている。銅製。	室内 床下



第46図 24号墓出土遺物① 転用藏骨器



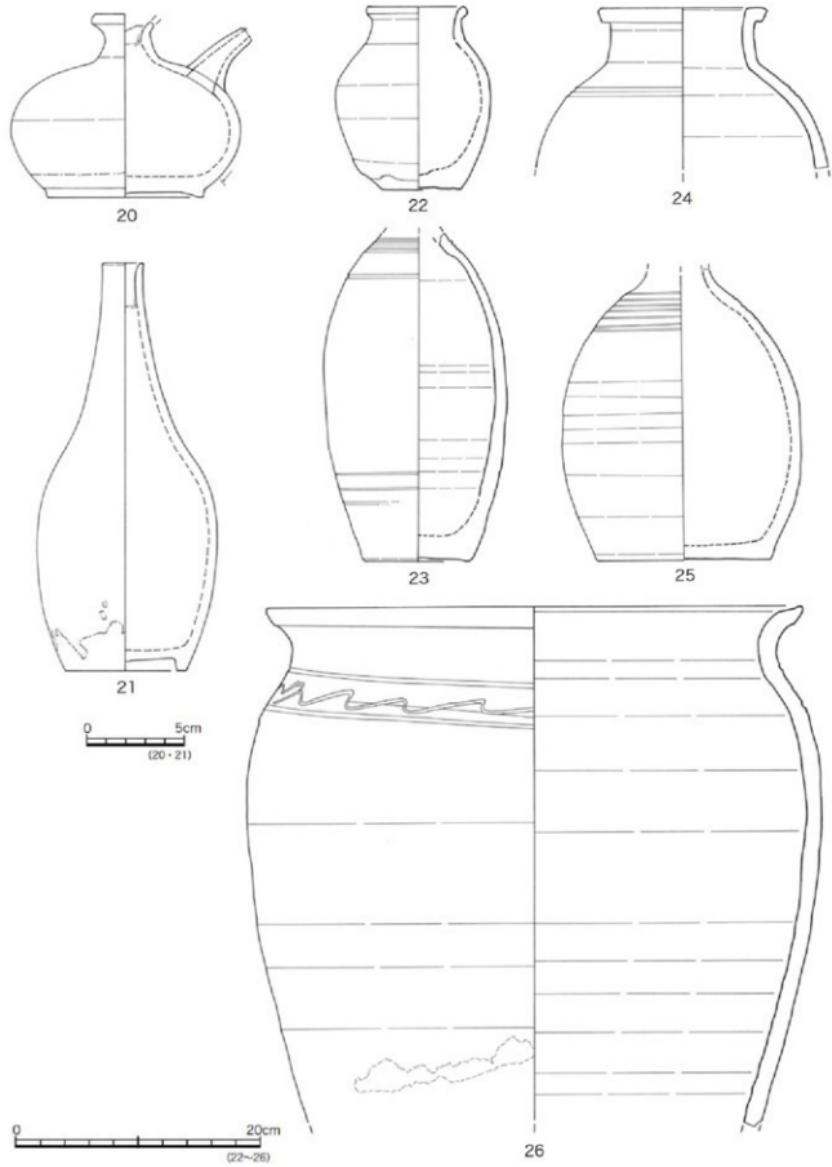
图版73 24号墓出土遗物①



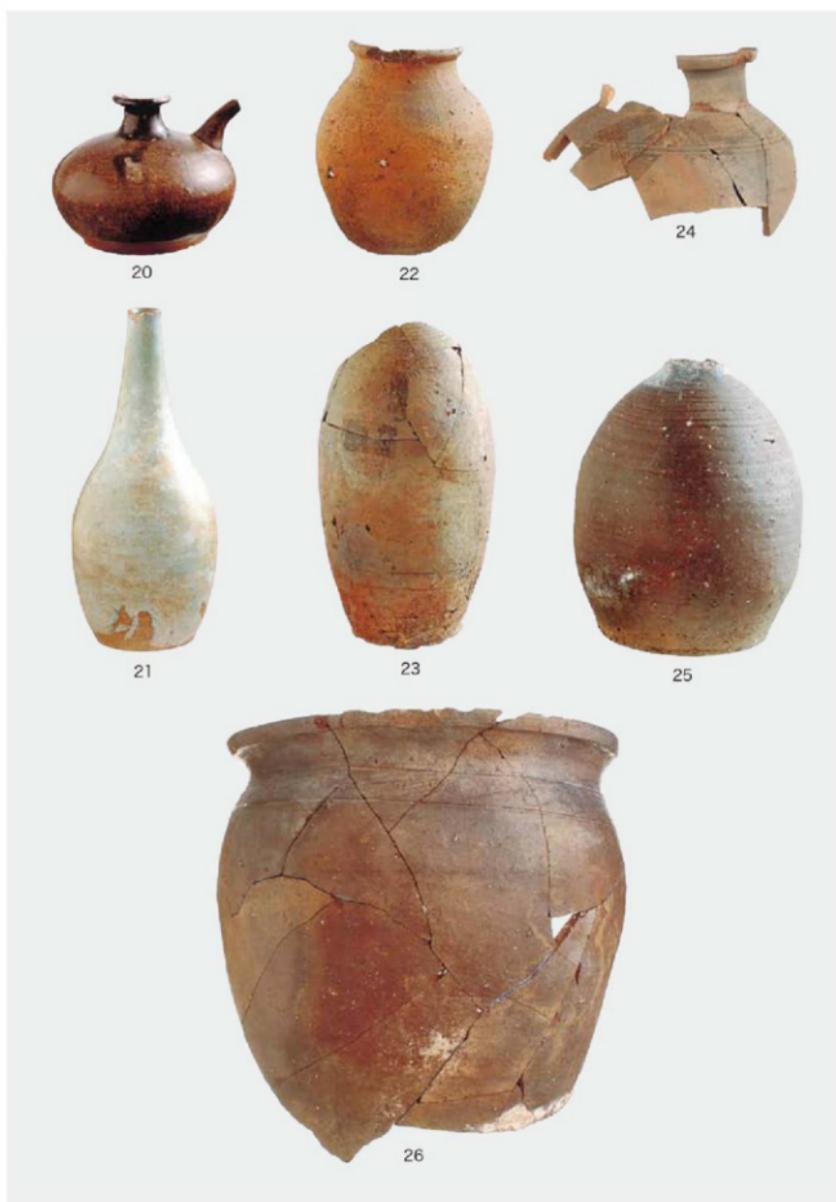
第47図 24号墓出土遺物② 沖縄産施釉陶器



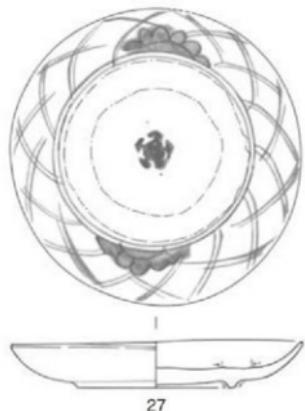
图版74 24号墓出土遗物②



第48図 24号墓出土遺物③ 沖縄産施釉陶器



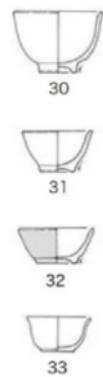
图版75 24号墓出土遗物③



27

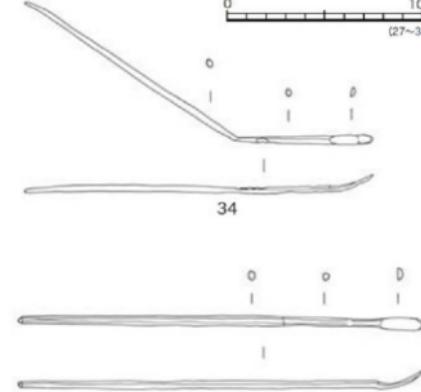


28



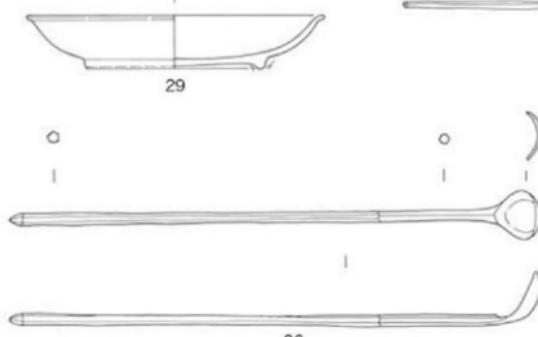
29

0 10cm
(27~33)



34

35

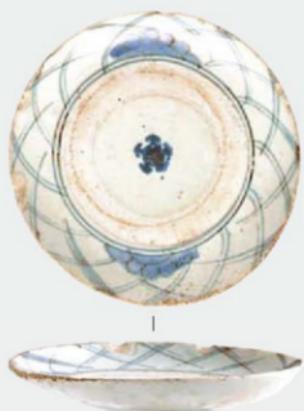


36

0 5cm
(34~37)

第49図 24号墓出土遺物④

白磁(30・31)、色絵(29)、瑠璃釉(32)、肥前系染付(27・28)、金属製品(33)、簪(34~36)、煙管(37)



27



29



28



30



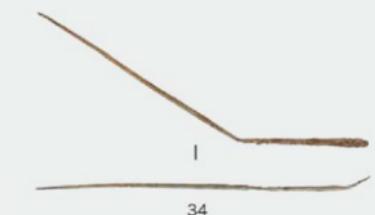
31



32



33



34



35



37



36

图版76 24号墓出土遗物④

第20節 25号墓

1. 遺構

観察一覧（第59表）に示す。

2. 出土遺物

墓室内外から14点の遺物が確認された。中でも墓室内は11点と多数を占めている。種類は沖縄産無釉陶器転用蔵骨器、沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器、肥前系染付、簪等がある。過半数を占める沖縄産陶器の器種構成も豊富で施釉陶器では、碗・小碗・壺・瓶、沖縄産無釉陶器では壺が確認された。数量こそ少ないが墓室内から多くの遺物が確認された点等も24号墓と同様で、本土産近現代磁器やガラス製品等を含まないことからも、本古墓群の中でも古式の様相を呈すると考えられる。



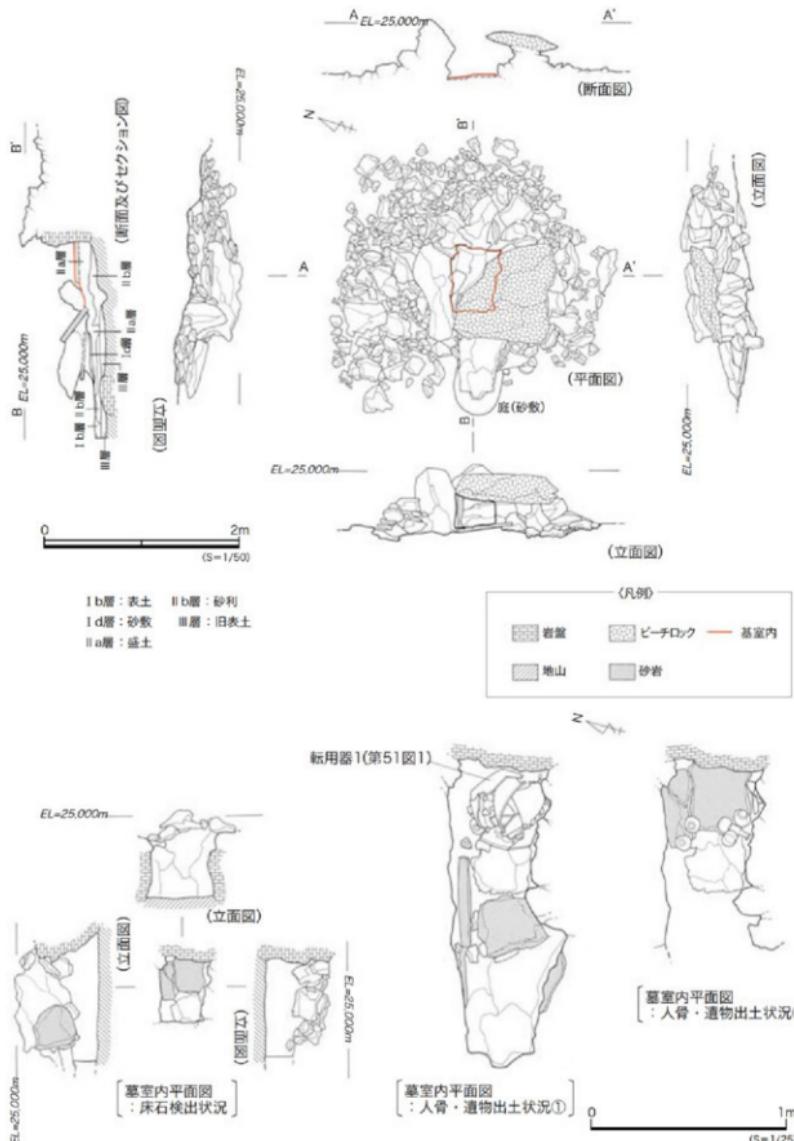
図版77 25号墓出土遺物集合

第59表 25号墓観察一覧

挿図番号	第50図
図版番号	図版78
立地	調査区西側の石灰岩の岩盤が露出している斜面地。
分類	石積石室墓（I類A i a）
規模	縦（東-西軸）約2m×横（北-南軸）約2m 墓室内：縦約0.35m×横約0.25m×高さ約0.5m
工法	地表から少し露出している石灰岩の岩盤を、墓室内にかかる部分を削り、地面を少し掘り下げて整地。整地した後、砂利（IIa層）を敷いて、さらに上から盛土（IIb層）されているが、盛土は墓口を補強するためのものと思われる。このことから、最初に墓室の開口を作り、最後に蓋石を乗せていたのではないかと思われる。墓室内の開口は板石や繩石を積んで補足している。墓室の周囲は多くの繩石を小高く積んでいる。 墓室内奥壁：岩盤を削平して壁面を形成し、その上に石積みで補足。 墓室内右壁：地面の上に大小様々な繩石を積む。 墓室内左壁：地面の上に大きな板石（石灰岩）を置き、その上に石積みで補足。 砂岩の板石が壁に沿うように置かれている。
天井	蓋石（ビーチロック）で閉じている。
床	床石（砂岩）が敷かれており、その直上を床として使用していたと思われる。その下は順に盛土（IIa層）、砂利（IIb層）が敷かれている。
墓口	石灰岩と砂岩の板石を重ねて厳重に閉じていたと思われる。 墓口の方位：西
人骨・遺物出土状況	墓室内から人骨はほとんど出土しないことから、持ち主により移転されている可能性があり、転用蔵骨器と思われる壺、沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器、肥前系染付（簡型碗）が出土。
葬法分類	二次葬（II類B-b）
砂敷（I d層）	墓口前に砂を敷いており、庭を形成していると思われる。
時期	近世～近代
備考	墓室内に石灰岩の大きい石が置かれていて、墓口を閉じる石とも考えられるが、遺物が石の上に乗っていたことから、台石のようなものと思われる。

第60表 25号墓遺物出土一覧

出土地	室内 床面						室外 表土		
	種類	沖縄産施釉陶器		沖縄産無釉陶器	肥前系染付	金属製品	沖縄産施釉陶器		沖縄産無釉陶器
器種分類		壺	小碗				壺	碗	
		II類 - A	II類 - I - A 小	III類 - I - A	II類	III類	II類	II類 - B - c	油壺
個数		1	2	1	1	4	1	1	1
									1



第50図 25号墓



墓全景〔西より〕



墓室内：人骨・遺物出土状況①〔西より〕



墓室内：人骨・遺物出土状況②〔西より〕



近景〔西より〕



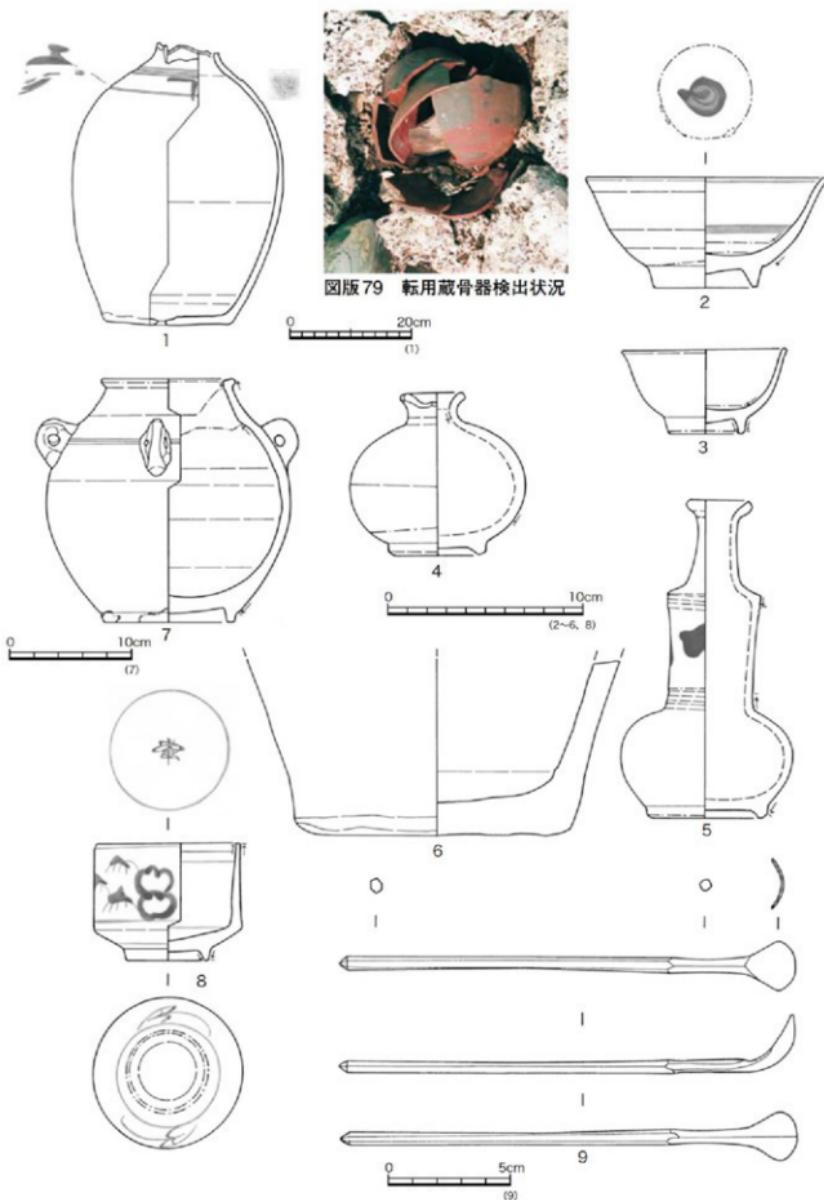
完掘状況〔西より〕

図版78 25号墓

第61表 25号墓出土遺物観察一覧

単位:cm

捕団番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径/長さ 器高/幅 底径/厚さ	分類	観察所見	出土地
第 51 図 ・ 図 版 80	沖縄産 施釉陶器	1	壺	肩～底	— — 21.3	VII	沖縄産無釉陶器の転用藏骨器である。丁寧な成形。口縁部から頭部欠損。底部が有孔されている。頸部と肩部の境界に5条の沈圏線、肩部に1状の沈圏線。素地は暗赤褐色で微粒子。	室内 床面
		2	碗	口～底	12.4 5.7 5.3	II-Bc	外面は褐色釉。褐色物で見込み中央に丸を、体部中央に帯状の線を描く。素地はにぶい暗橙色で粗粒子。	室外 表土
		3	小碗	口～底	8.5 4.4 3.9	II-A	白化粧にムラがあり、露胎する部分がある。蛇目状に釉剥ぎされた見込みと豊付けにアルミナが付着。	室外 表土
		4	壺	口～底	3.4 8.4 5.0	II-1A	緑灰色の釉。素地は灰色で細粒子。外面に砂が大量に付着する。	室内 床面
		5	瓶	口～底	3.4 16.3 6.1	III-1A	口縁部から肩部まで青灰色の釉を、腰部は白化粧に透明釉を施す。豊付けから外底面は露胎。胴部は露胎させるが、褐色釉を掛け流す。胴部下方と上方に2条の沈圏線が巡る。	室内 床面
	沖縄産 無釉陶器	6	壺	底	— — 14.1	—	素地は暗赤褐色で微粒子。	室外 表土
		7	油壺	口～底	11.0 20.0 10.6	—	4つの綫耳が付く。器壁が薄く丁寧な成形である。胴上部に2条の沈圏線を巡らせる。透明感のある褐色釉を内外面に施釉する。外面は高台脇まで釉を施し、高台外底面は雜に塗る。	室外 表土
	肥前系 染付	8	碗	口～底	7.5 6.0 4.2	—	波佐見もしくは薩摩の弥助窯(?)産で筒形碗。高台から腰部まで逆ハの字状に開き、腰部から直に立ち上がる。外面に雪持笹文と岩文が描かれている。腰部には不明文が対で描かれている。見込みには昆虫文。高台脇に二条少し離れて上に一条、腰部・口縁部に一條ずつ、内面口縁部に二条、見込みに一条圓線に入る。全体に青味を帯びた透明釉が掛かる。口唇部は口禿げ。豊付けは釉剥ぎ。素地は白色微粒子。	室内 床面
	簪	9	—	完形	18.7 0.6 2.0	III	竿の断面は六角形で、先端から13.8cmの所で面が五い違いになる。先端部は六角錐。重量26.3g。	室内 床面



図版 79 転用藏骨器検出状況

第51図 25号墓出土遺物 転用藏骨器(1)、沖縄産施釉陶器(2～5・7)、沖縄産無釉陶器(6)、肥前系染付(8)、簪(9)



图版80 25号墓出土遗物